

「1942-1946年のタシミ日系カナダ人強制収容所」歴史プロジェクト



(写真1 タシミ収容所の大通り)

翻訳者による解説

カナダのブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市を中心にしてブリティッシュ・コロンビア州の太平洋沿岸地区に住んでいた日系カナダ約2万2千人は、1941年12月に太平洋戦争が始まると同時にカナダ連邦政府から敵性外国人と認定され、財産を没収されて着の身着のままブリティッシュ・コロンビア州内陸部に急造された収容所や道路建築のための飯場に強制移動させられました。収容所で一番大きかったのがブリティッシュ・コロンビア州ホープ町の南西22キロの所に作られたタシミ収容所です。この収容所は1942年に開かれ1946年に閉められました。一番多いときには2644名の日系カナダ人が収容されていました。

日系カナダ人の強制収容については様々な記録と物語が出版されていますが、収容所の詳細な記録、特に収容された日系カナダ人がどのようにしてこの過酷の環境の中で生活していたのか。限られた自由と資源のもとで将来に希望をもてるようにどのような創意工夫で収容所の生活を改善していったかの記録はまだ少ないです。

このタシミ収容所の記録は収容所の住民の一人であったハワード・シモクラが委員会を作りブリティッシュ・コロンビア州バーナビー市にある日系全国博物館とトロント市にある日系文化センターの支援を得て、様々な記録と収容所の元住民の証言を集めて編纂したものです。委員会は資料の収集と記録の編纂に三年余りを費やし、その結果をこ「1942-1946年のタシミ日系カナダ人強制収容所」歴史プロジェクトとして2016年3月20日にウェブサイト www.tashme.ca に発表しました。

記録はウェブサイトウェブページとして重層的に作られていて、重要項目と資料にはリンクが貼られてあり、それぞれの項目について詳しく探求できるようになっています。また多数の写真、地

図、図表が載っています。この翻訳はウェブ形式ではなく一冊の本の形式にしてあります。項目別の目次を作りウェブ形式ではリンクになっていたページを一箇所にまとめてあります。重要な写真、地図、図表は載せてありますが、それ以外は割愛してあります。この記録はいろいろな資料からの抜粋や証言がそのまま載せてあり、内容の重複もあります。この翻訳ではウェブサイトの内容をそのまま翻訳してあります。従って内容の重複もそのままにしてあります。ウェブサイトにあるタシミに関する資料の翻訳はありません。これらの資料に興味をお持ちの方はウェブサイトからご覧ください。

私は2010年代に4年ほど全カナダ日系人協会の役員をしていました。その後も協会のプロジェクトに参加し、現在は全カナダ日系人協会のウェブサイト <http://najc.ca/>の英語から日本語への翻訳をしています。

2020年3月

大木 崇

「1942-1946年のタシミ日系カナダ人強制収容所」歴史プロジェクト

目次

- 1.0 はじめに
- 2.0 タシミ収容所の概要
 - 2.1 タシミの統計
 - 2.2 タシミの施設の概要
 - 2.3 タシミの名称の由来
 - 2.4 タシミの歴史
 - 2.5 タシミ・コミュニティの形成
- 3.0 収容所の説明
 - 3.1 ホープ・プリンストン道路工事飯場
- 4.0 収容所の組織
 - 4.1 タシミの管理
 - 4.2 就業
 - 4.3 タシミの住宅と施設
 - 4.4 教育
 - 4.5 医療
 - 4.6 宗教
 - 4.7 ブリティッシュ・コロンビア公安委員会
- 5.0 収容所の日常
 - 5.1 買い物
 - 5.2 タシミの公共サービス
 - 5.3 郵便
 - 5.4 農園と庭
 - 5.5 レクリエーション
 - 5.6 スポーツ
 - 5.7 クラブ
 - 5.8 収容所の出来事
 - 5.9 タシミ句会
- 6.0 終わりに
 - 6.1 連絡先
 - 6.2 参考文献
- 7.0 付録
 - 7.1 タシミ歴史年表
- 付録1 タシミの住民と住所一覧表（同名の PDF を御覧ください）
- 付録2 タシミ住民データベース（同名の PDF を御覧ください）

1.0 はじめに

強制収容所に於ける日系カナダ人の生活、1942年から1946年まで

タシミ強制収容所は太平洋戦争中にカナダ連邦政府が日系カナダ人を強制収容するためにブリティッシュ州に作った8つの強制収容所のひとつです。この強制収容所はホープの町の南西22.5キロのところに位置し、面積は約4キロヘーホーメートルありました。一番多かったときには2,644人の日系カナダ人が収容されていました。強制収容所は1942年に開かれ、1946年に閉じられました。

以上がタシミ強制収容所の概要ですが、ではここで日系カナダ人はどのような食事をし、生活を支え合い、収容所の生活の秩序を保っていたのでしょうか？この生活に何か楽しみはあったのでしょうか？

上記の質問の答えを見つけるのがこのプロジェクトの目的です。この強制収容所に入れられていたハワード・シモクラをリーダーとしてボランティアからなる委員会を作りこのプロジェクトを推進しました。ブリティッシュ・コロンビア州バーナビー市にある日系全国博物館とトロント市にある日系文化センターがスポンサーになりました。そしてタシミ強制収容所の生活をできるだけ詳しく記録しようという目的のこのプロジェクトが始まりました。

このウェブサイトはタシミで生活した人、親戚がタシミに居た人、そして強制収容所の生活がどんなもだったか知りたい人のために作成しました。

2.0 タシミ収容所の概要

2.1 タシムの統計

- 開所日：1942年9月8日
- 閉所日：1946年8月12日
- 位置：ブリティッシュ・コロンビア州ホープ町の南西22.5キロ。幅1.6キロ、長さ6.4キロの谷の中のロイヤル・エンジニア・ロード沿い（この道路は現在のホープ・プリンストン・ハイウェイの一部となった。）
- 敷地：約4.6平方キロメートルのフォーティーンマイル牧場内。この牧場は鉱山会社の役員アモス・ブリス・トライティスから借りた土地にあり乳牛と肉牛を飼育していました。
- 海拔：700メートル。
- 温度は夏には摂氏35度まで上り、冬には摂氏零下20度まで下がりました。
- 1942年から1944年までのタシムの気候の要約は巻末の別表01をご覧ください。

人口：

- 収容可能最大人数 2,966人
- 実際の最大収容人数 2,644人（1943年1月6日）

- 収容所職員 約 40 人の日系人以外の人（ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会職員、連邦警察警官、政府職員と約 9 人の宣教師を含む。）

2.2 タシミの施設の概要

タシミ強制収容所は牧場の建物と木材とタールを塗った紙で出来た 347 の急造の安普請からなる小さな町で学校、病院、発電所、連邦警察派出所、消防署、教会、商業施設がありました。強制収容所は初めははブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が統治していましたが、後にカナダ連邦政府労働省と強制収容所の日系カナダ人の委員会の親和会が共同で統治するようになりました。

タシミ強制収容所は他の町から地理的にも社会的にも孤立していたので、自治組織、商業施設、学校、教会を持つ自立した社会でした。毎日の生活は制限されていましたが、タシミの人達は創意工夫で生活を我慢できるもしました。

2.3 タシミの名称の由来

強制収容所のあった土地は元来「ブリティッシュ・コロンビア州ホープ町 14 マイル牧場」と呼ばれていましたが、この名前はカナダ郵政省に登録されていませんでした。それで新しい地名を付けました。TASHME という名称は当時のブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の三人に名前から二文字ずつを取って作ったものです。

- Austin T. Taylor、有名なバンクーバーのビジネスマン
- John Shirras、ブリティッシュ・コロンビア州警察管
- Frederick John Mead、連邦政府警察官

2.4 タシミの歴史

長野萬蔵が 1877 年に日本人として初めてカナダに定住しました。その後の日本人移民とアジアからの移民はカナダでいろいろな人権が制約されました。

（詳しくは www.japanesecanadianhistory.net を御覧ください。）

タシミと他の強制収容所の歴史は 1941 年 12 月 7 日に始まります。この日、日本軍はハワイ真珠湾の米国海軍基地を攻撃し米国、カナダ、英国に宣戦布告しました。カナダ政府はすぐさま宣戦布告に対応して、戦時特別法のもとにカナダにいる総ての日本国籍の日本人及び 1922 年以降カナダ国籍を取得した日本人に対して敵性外国人登録を義務付けました。その後すぐに日系カナダ人の自由と財産を奪いました。

1942 年 1 月にブリティッシュ・コロンビア州の西海岸から 100 マイル以内が保護地域に設定されました。そして 2 月初めには今や敵性外国人とみなされた日系カナダ人で 18 歳から 45 歳の男子は総てこの保護地域からの退去を命じられました。これらの大部分の人達はブリティッシュ・コロ

ビア州内部の道路建設のための飯場に送られました。その後、数週間たつと連邦政府法務省から日本人を祖先に持つ人は総て保護地域から退去せよという命令が出ました。そして1942年3月から女性、子供、高齢者は強制収容所に送られました。強制収容所の多くはブリティッシュ・コロンビア州内部の廃業した鉱山施設や木材伐採作業員の宿泊所でした。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が日系カナダ人の強制収容の計画、実行、管理をするために設けられました。

1942年に後にタシミ強制収容所となる施設の建設が始まりました。当初はホープ・プリンストンハウエイの建設のための18歳から45歳の男子500名を収容する宿舎の予定でしたが、これらの男子がタシミの施設の建設にも必要な事がわかり、家族と共にタシミに居住することが出来るようになりました。そして家族も収容出来るようにタシミの施設は当初よりも拡充されました。かくしてタシミ強制収容所が完成しました。

タシミはブリティッシュ・コロンビア州に設定された10の強制収容所の一つでした。他の収容所は次の場所にありました。

グリーンウッド

カスロー

レモンクリーク

ニューデンバー

ローズベリー

ベイファーム

ポポフ

サンドン

スローキャンシティー

この他に5の自立した収容所がありました。

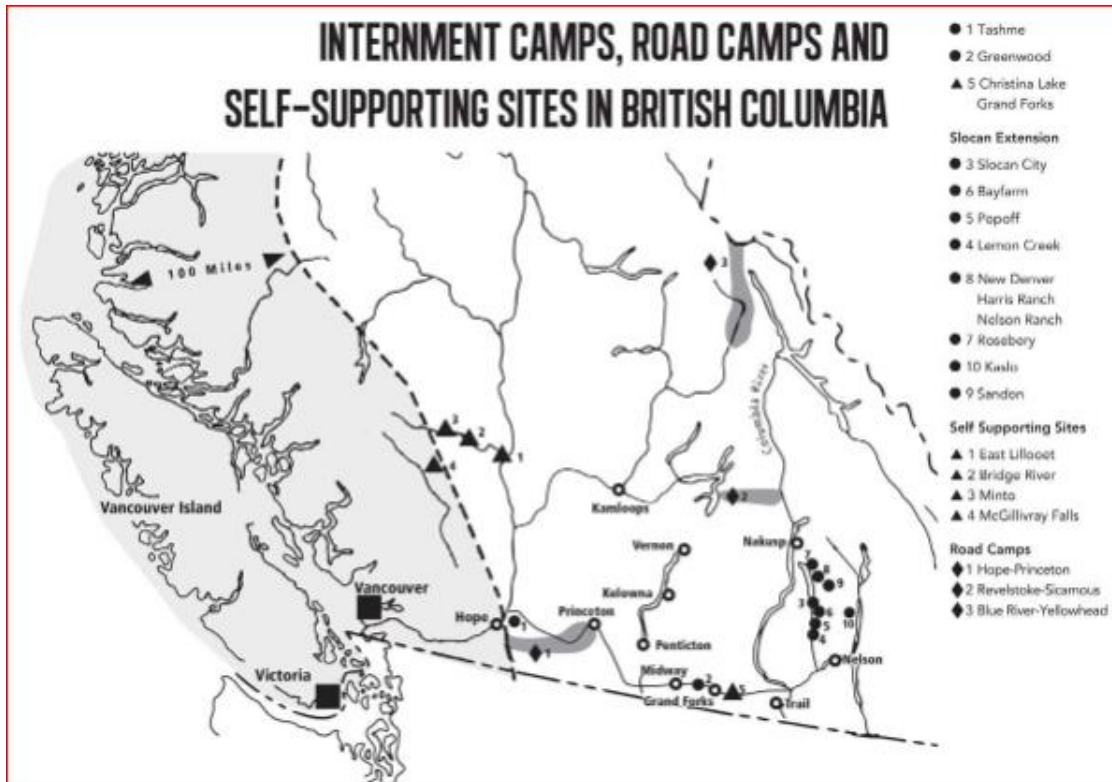
ブリッジリバー

ミントシティー

マックギルバリーフォールズ

イーストリルエット

クリスティーナレーク



(写真2 収容所と道路建設の飯場の位置)



(写真3 マイル11道路建設飯場)



(写真4 マイル15道路建設飯場でくつろぐ人々)



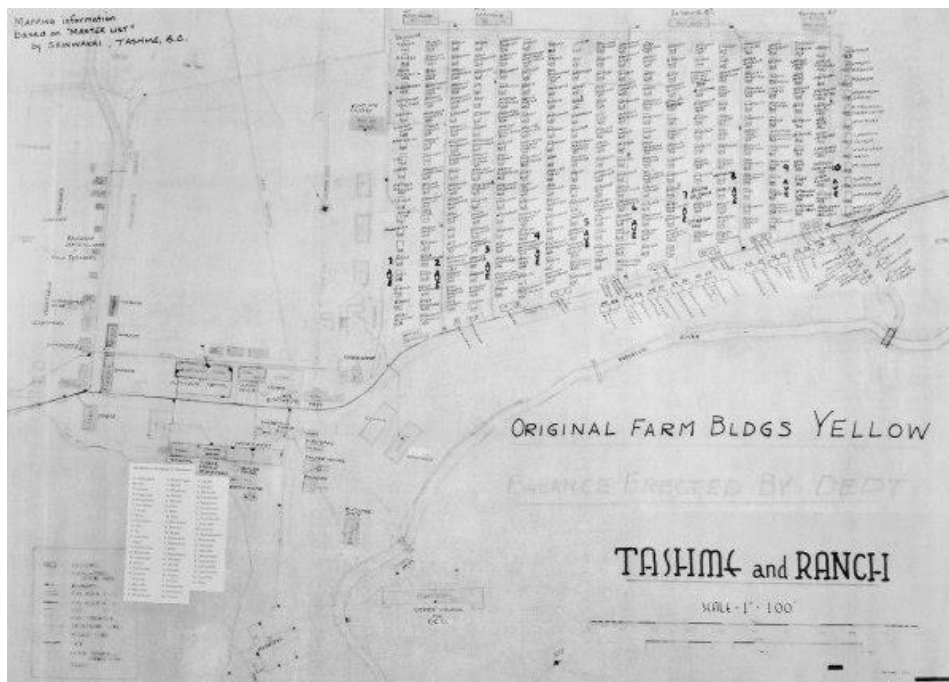
(写真5 ホープ・プリンス頓道路建設現場)

タシミはブリティッシュ・コロンビア州の強制収容所では最後に建設され、規模としては最大でした。ホープ町の南西22.5キロの牧場に建設され、丁度100マイル(160キロ)の保護地域の外側に

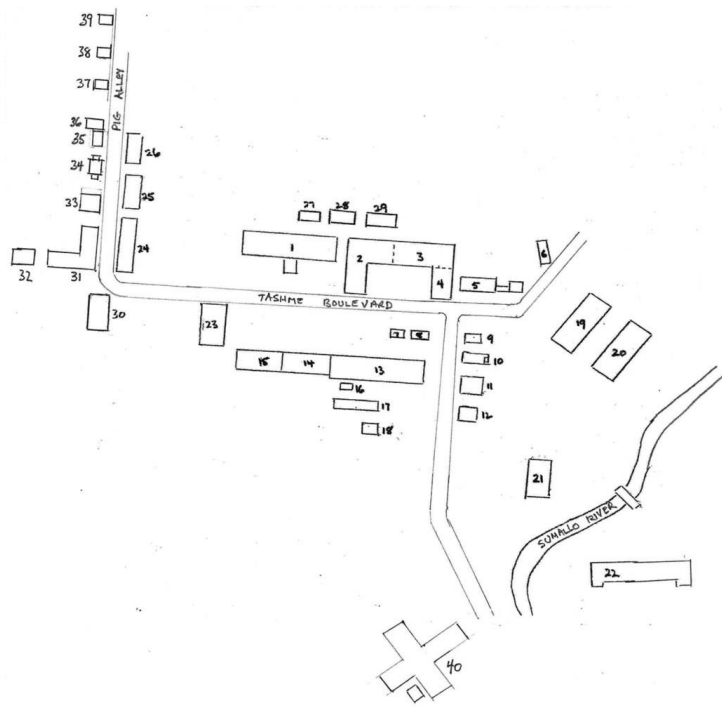
ありました。この牧場は大恐慌時代に失業者救済のための施設があった所で、その後、鉱山会社役員で14マイル牧場の持ち主だったアモス・ブリス・トライティスから連邦政府防衛省が月々500ドルで太平洋戦争の間だけ借用しました。



(写真6 タシミにトラックで到着する日系カナダ人)



(写真7 タシミの概略図)



BUILDINGS

- 1 D building: School & community hall
- 2 Warehouse
- 3 General store
- 4 BC Security Commission offices
- 5 Mess hall
- 6 Kindergarten school
- 7 Barber shop/Shoe repair
- 8 Post office
- 9 RCMP
- 10 Fire hall/fire tower
- 11 Power house
- 12 Bakery
- 13 C building: Apartments
- 14 B building: Single men's quarters
- 15 A building: School extension
- 16 Boiler house
- 17 Bath house
- 18
- 19 Wood/Sawdust shed
- 20 Elementary school
- 21 Butcher shop/Meat market
- 22 BCSC staff apartments
- 23 E building: Single women's apartments
- 24 Pig barn
- 25 Garage
- 26 Tin smith/Metal shop
- 27
- 28
- 29
- 30 Horse stables
- 31 Pig barn
- 32 Slaughterhouse
- 33
- 34
- 35 Commissioner's house
- 36 Log cabin
- 37 Log cabin
- 38 Log cabin: Rev McWilliams
- 39 Log cabin
- 40 Hospital

(写真8 タシミの公共施設の配置図)



(写真9 タシミの全容)



(写真10 タシミの全容)



(写真11 タシミの郵便局)

タシミの声

「タシミに到着してから私の中の苦痛と痛みが少しづつ薄らいでいきました。そして現在はもう完全に消え去ったと思いたいです。人々の軽蔑した目つきを恐れて遠慮がちに外を歩くことをもうタシミではする必要がありません。穢らわしいジャップと呼ばれることもありません。タシミに来て

私は内心、人々の不信感から逃れられてうれしかったです。山々に囲まれた隠れ家のようなこの収容所にはある種の自由があると感じました。この収容所は私達のものだ。私は私を愛し信用してくれる日系人以外の友人たちと手紙のやり取りが出来ました。そしてこのことは私に様々な苦難が降り掛かって来ても私が耐えていける力の源になりました。多分私を一番励ましてくれたのは収容所の人懐っこく優しい教会の指導者たちでしょう。私はこの人達と日々会うことが出来ました。そして他人の善意のみを信じることで、私は戦争と一緒に始まった不正義の渦巻の中で見失っていた自分自身を取り戻すことが出来ました。また日系カナダ人であることの有利と不利を客観的に考えることが出来るようになり、自分の中の葛藤に勝ったように感じました。それはいかに日系カナダ人を偏見の眼で見る人達が多く居ようとも、いつでもこれと対抗する善意と親切を持った人達がいるとわかったからです。」

(メアリー・オキ)

タシミは険しいカスケード山脈の山並みに囲まれ、周辺にはほとんど人が住んいません。ブリティッシュ・コロンビア州の他の強制収容所からも離れていました。他の収容所はブリティッシュ・コロンビア州の南東部に多く、近くに町や村があり、また収容所同士も近いところが多いのです。タシメは近くに村落が無いので多数の人を収容する施設が建設できました。クータニーのように近くに村落がある地域では外部の人達との接触を排除しながら大きな収容所を作ることは出来ませんでした。

他の収容所は以前は賑やかだった鉱山町がゴーストタウンになっていた所に建設したものが多くですが、タシミは新たに建設されたカンパニー・タウンのようなものです。住居、生活に必要なもの、学校、病院、仕事、レクリエーションなど総てがブリティッシュ・コロンビア州公安委員会と外部の宗教団体、慈善団体によって支給され管理されていました。近くに村落がないので戦争中のタシミの生活は全部がここに住む日系人以外の人と日系カナダ人によって作られました。

14 マイル牧場はかつて乳牛と肉牛の牧場でした。当時の建物の多くがまだ残っていて収容所の施設として使われました。馬の厩舎、豚の飼育所、屠殺場、鍛冶屋、車庫などです。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会は二つの大きな納屋を改造して家族のアパート、独身寮、学校の教室、集会所にしました。他の建物も公安委員会の職員、ユナイテッド教会関係者の宿舎に改造しました。収容所の他の住居、施設はすべて新しく建てられました。

1942年9月8日に最初の日系カナダ人がバンクーバーのヘースティングパークからタシミに到着しました。バンクーバーからホープまで汽車に乗り、そこからバスまたはトラックでタシミまで来ました。急造の宿舎が建つにつれて150名が一団となってタシミに到着しました。ヘースティングパークの仮収容所は1942年9月28日に閉められました。ここからタシミに最後の一団が着いたのは1942年10月初めです。1942年12月までにタシミには347の住居用建物が建てられました。

タシミの住居用建物は全部で 2,966 人を収容出来る数がありました。1943 年 1 月 6 日に住民数は 2,644 人でした。これが多分最高でしょう。収容所の開所後、時間が経つにつれてブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の方針が変化して次第に住民にカナダ東部とブリティッシュ・コロンビア州の他の地域に移動することを勧めるようになりました。そして住民が仕事を求めてブリティッシュ・コロンビア州の他の地域はやロッキー山脈の東に移動するにつれて収容所の人数も減っていきました。

タシミには日系カナダ人の他に 40 人ほどの日系人以外の方が住んでいました。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会職員、連邦警察官、病院、政府関係者、そして 9 人の教会関係者です。日系カナダ人はこれらの日系人以外の人他に日系カナダ人以外の人との交流は無いにひとしかったです。そして外の世界から孤立してタシミで生活したことは、日系カナダ人に戦時中そして戦後も深い影響を残しました。

タシミが運営されていた 4 年間、ここはとても賑やかな小さな町になりました。住人は学校と病院を作りました。住民は自治祖組織を作って町の平和と秩序を守りました。また公衆浴場と庭を作りました。雑貨屋、発電所、郵便局、連邦警察の交番もありました。町の醤油と味噌の工場、周辺の山での採伐と製材、ホープ・プリンストンハイウェイの建設現場で働く人もいました。若い人たちは自分たちの組織やクラブに参加しました。住民は限られた強制収容所の中で出来るだけ普通の生活に近づくような努力をしました。

1944 年からは連邦政府労働省日本局がタシミの住民をロッキー山脈の東のカナダ各地に分散させる政策を推し進めました。その結果、住民で収容所を離れる人が着実に増加していきました。

太平洋戦争は 1945 年に終わりましたが、連邦政府は戦時特別法を継続して強制収容所の日系カナダ人全員に「東に行くか、故郷に帰れ」と命令しました。これはロッキー山脈以東の地域、ブリティッシュ・コロンビア州内の他の地域、または日本に移動しろということです。1946 年までにタシミの住民は毎週ロッキー山脈の東に移動して行きました。タシミに残ったのは日本に帰ることを選択した人達です。また、タシミはレモンクリーク、グリーンウッド、スローキャンの収容所に居た人達で日本に帰る選択をした人達が一時的に滞在する場所になりました。

タシミ病院は 1946 年 6 月 25 日閉院し器具は他の収容所に移されました。収容所全体は 1946 年 8 月 12 日に閉所しました。収容所の施設は取り壊されて撤去されました。そして土地は持ち主の A.B.トレイティスに返還されました。

1946 年以降、収容所のあった土地はアリソン製材所に売られ、一時、製材工場と鉱山が稼働していました。ボーイスカウトのキャンプ地にするという話もありました。現在はサンシャインバリーというレクリエーション施設になり RV 公園、休暇用山小屋、レクリエーション施設があります。一時は小さなシルバーチップというスキー場もありました。

タシミの声

「タシミの生活をどう受け止めるかはタシミに收容された時の年齢の大きく作用されました。小さな子供は他の子供と遊んで楽しかったですが、学齢期の児童は学校教育が中断されました。一世は悲嘆にくれました。しかし多くの一世は限られた環境の中で最善を尽くし、收容所をひとつの小さな町とおもうようになりました。日本名を付けた野球チームが生まれ、学校、音楽会、スポーツ大会が組織され、ダンスパーティーが納屋を改造した学校の校舎で開かれました。ダンスパーティーには教会関係者で高校生を教えていた人達がお目付け役として参加しました。これは一世の人達がダンスパーティーを承認する絶対条件でした。メイ・デイ女王やメイポールのダンス、結婚式、葬式などが行われ、收容所の日常が流れていきました。」（マリエ・カツノ）

2.5 タシミコミュニティの形成

バンクーバーのヘースティング・パークに一時的に收容されていた日系カナダ人でタシミ收容所に移動する人達の移動は1942年10月までにだいたい終わりました。タシミの347の住宅の建設は1942年12月までに終了しました。1942年11月のタシミの人口は2639人でした。

タシミ收容所にどのように地域コミュニティを形成するかは收容所開所当初からの関心事でした。收容所の運営全般についての支配権と責任はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会にありましたが、收容された日系カナダ人はいろいろな委員会を作り施設の運営に関する方針と規則を策定し、收容所の入所からはじまり收容所内に地域社会を形成するまでの面倒をみました。まずは日系人建設委員会が選出されて收容所全般の建設についての提案をしました。この委員会は1943年に親和会と交代しました。

タシミへ移動が終了し收容所の建設も終わりに近づいたので、現在まで收容所の建設について助言してきた建設委員会に代わる新しい委員会の設立準備が行われています。現在は設立準備委員化が選出されて、これからのタシミにどのような内容の委員会が必要か討議しています。またタシミから何人かの代表が他の收容所を訪問して現状を視察し、これから連絡をとっていくこと出来るように考えています。このことについてはタシミの青年組織が調べていますが、青年組織はこれから收容所の若い世代がどうなるか先行きが見えないので、どのような行動を取ればいいのかかわからないという困難に直面しています。

住民の入居完了

住居用建物300棟が完成し、総ての独立住宅、二世帯住宅、アパートへの入居が完了しました。水道設備は三軒に一つの割合で戸外に水道の蛇口が設置されました。。入浴施設の工事はまだ完了していませんが、50軒に一つの割合で入浴施設が作られる予定です。電灯はアパート、商業施設、

その他の重要施設に敷設されましたが、一般住居まで普及するのは時間がかかりそうです。その間、照明はケロシンランプで間に合わせます。

病院が完成

タシミに 60 床の病院が完成しました。住民皆が誇れるりっぱな施設です。この病院の完成で医療関係者は他の地域の現代的な病院と同様の医療サービスを収容所の住民に提供することができるようになりました。製材所も稼働して収容所の施設に必要な材木を生産しています。ここでは収容所に来る前に製材所で働いた経験を持っている人 20 人が働いています。また製材の他に燃料用の薪も生産しています。収容所内で栽培する野菜は漬物に欠かせません。

この 5 ヶ月で収容所の様子は今年の冬と比べると大分変わりました。タシミの生活様式が出来てきています。死亡、誕生、結婚などの報告手続きも整備されました。タシミは山々に囲まれ、ブリティッシュ・コロンビア州の日系人立入禁止の保護地域の東の端から更に東に 35.8 キロ離れた人口 2,600 人余りの町ですが、これらの手続きは正常に行われています。若い人同士の結婚も何組かすぐでありそうな気配です（1942 年 12 月 6 日の「ニューカナディアン」紙から）。

1942 年 12 月までにヘースティングパークからタシミへの段階的な家族の移動も終わり、タシミにはコミュニティーの雰囲気定着してきました。

タシミは私達の町

1942 年も終わりに近づきました。また新しい年がやって来ますが、ブリティッシュ・コロンビア州の日系カナダ人にとって 1942 年は忘れられない年になりました。太平洋戦争の影響をなすすべもなく受け入れなければならず、突然新しい環境で生活することを余儀なくされました。タシメの一世、二世はブリティッシュ・コロンビア州（BC 州）の他の収容所の一世、二世と同様に、これからこの戦争が終わるまでなんとか頑張っ生活していくでしょう。以前は牧場だったタシミ収容所は三千人近くが暮らす日本人村になりました。タシミは周囲をカスケード山脈の高い山に囲まれた平坦な谷にあります。周囲を見ても見えるのは山だけです。

田舎の村

タシミに収容所の建設が始まったときは、タシミは森の中に切り開かれた開拓時代の村のようでした。しかし今は大きく変わりました。何列も何列もコールタールを塗った紙を壁にした家が続きます。その間を忙しそうに人達が行き来しています。また大きな町の一部のような日系人以外の人用のアパートや病院があります。タシミは人里離れた谷の中に突如出現した町です。住人はが楽しく毎日を暮らすように努力しています。何ヶ月も続いた移動と様々な変化の後に、やっと新しい秩序のある環境に生活することができるようになりました。人々はこの制約の多い環境のもとで日々の暮らしを出来るだけ気持ちによいものにしようと努力しています。毎日の生活は男と若者はいろい

ろな仕事に従事し、女と子供は大勢の人が住む窮屈な住居の中でも、なんとか普通の家庭の雰囲気を作る努力をしています。

人々の気持ち

収容所の人々は一緒に暮らして仕事をしていましたが、誰もが同じような気持ちだったわけではありません。中には苦しみ傷ついたあげく、収容所コミュニティーがどのようになろうが関係ないという人もいました。そして傷ついた気持ちを発散するために、わけもなくコミュニティーに不和を起こすような行動を衝動的にとったりしました。しかし一方では毎日を一日一日を冷静に対処しているという人達もいました。この人達は自己憐憫を乗り越え陽気に毎日の問題に取り組んでいました。不平、不満、意地悪、自己憐憫などはこの収容所の生活に少しも役立たないことを知っていたからである。

多分、収容所の生活に一番満足していたのは高齢世代だったろうとおもいます。もう若い時のように楽しく浮かれ騒ぐ必要は無く、静かに暮らすことで十分満足できました。しかし収容所の二世や若い世代の人ははどうだったでしょう。町での生活、劇場、ローラースケート場、ボーリング場などは収容所にはありません。若い人たちはそのエネルギーを戸外のスポーツに向けました。時たま不平を述べることはあっても、収容所の生活を楽しくするすべを見つけるのに忙しかったです。若い人たちは青年会を作り、収容所の経験を将来のための貴重な経験にしておこうという希望さえも育んでいた。この一年の辛い経験にも関わらず収容所の人達はタシミの最初のクリスマスと正月を陽気に祝いました。

(ニューカナディアン紙1942年12月26日から)

最初の冬

「1942年のタシミでの最初の冬は皆の心に深く刻み込まれました。自分の家から着の身着のままに近い状態で追い出されてきた人々はBC州内陸部の雪と寒さの厳しい冬に対する準備が来ていませんでした。収容所の施設は冬を過ごすにはあまりにも不十分で、そのうえまだ強制移動と収容所の受け入れの混乱が続いていました。急いで建てられたコールタール紙の壁の小屋は厳しい冬を迎えるにはあまりにもお粗末でした。燃料の薪は十分にありましたが、どれもまだ乾燥不足で燃えにくく住居を温めるのが大変でした。

小屋の建設に使われた材木と薪はどちらも乾燥不足で水分を含んでいた。そのため薪はなかなか火がつかず、ついてもすぐに消えてしまった。薪を燃やすことが出来ても部屋が暖かくなると小屋の木材から水分が滲み出してきた。そして薪が夜中に燃え尽きると小屋の壁は木材から滲み出た水が凍って朝までには壁全体が氷で覆われた。

生活環境の厳しさは春まで続きましたが収容所の人達は次第に自分たちのいる環境を冷静に見ることが出来るようになり、収容所の生活を規則正しく送れるようになってきました。最初の冬が終わ

る頃には生活環境も改善しました。収容所にはいろいろな組織が出来るようになり、友達付き合いも増えて収容所の雰囲気も改善していきました。」

（“過去のコミュニティーの存在：タシミ、ブリティッシュ・コロンビア州、”「この土地の人々」タンタラス・リサーチ、1972年からの引用）

タシミはカナダ政府が日系人を強制的にブリティッシュ・コロンビア州の海岸の保護地域から追放した時に作った強制収容所の一つです。これらの収容所では住民が自分たちのコミュニティーを作っていくという気持ちを持つことがとても大事でした。収容所の管理責任者と職員は住居、教育、雇用、収容所での種々のサービスの提供を通じてコミュニティー意識を醸成することに努力しました。

3.0 収容所の説明

1942年始めのタシミには14マイル牧場があり、肉牛と乳牛、幾つかの牧場用の建物とごく少数の牧場で働く人達がいました。しかし一年後には350の掘っ立て小屋と、住宅に改造された二つの納屋に3000人近くの日系カナダ人とブリティッシュ・コロンビア州公安委員会その他の職員が住む小さな町になっていました。

人口

1942年7月から日系カナダ人はタシミ収容所に到着し始めました。二ヶ月後の9月末までに2100人が到着しました。そして1943年1月には最大の3044人に日系カナダ人が収容されました。それから後は他の収容所に移動する人や日本に帰ることを決めた人がタシミ収容所が出ていったので、タシミに収容されていた日系カナダ人の数は減っていきました。

収容所には日系人以外の人に収容所の管理官、連邦警察、病院の職員とその家族が住んでいました。この人達をを含めると総勢3090人が1943年1月にタシミで生活していました。タシミは1946年9月に閉鎖されました。

タシミの施設の配置

タシミは347戸の小さな住居と病院、製材所、幾つの庭、町の集会所のある独立した町で、また働き場所でもありました。タシミになる前の牧場にあった建物は改造されて集会所、高齢者と虚弱な人達のためのアパートになりました。タシミのある広い平な場所には何列もの住居が建設され、また収容所の管理に必要な建物が建てられました。

タシミの住居の表札の名前

トロント日本文化センターはタシミ住居表札プロジェクトを開始し、全カナダ日系博物館に保存されている1942年11月のタシミ住民表をもとにしてタシミの個人住宅に住んでいた人達の名前を住

宅ごとに調べました。作成された地図は各住居ごとの居住者の名前を記していますが、タシミが開かれていた期間に一つの住居に異なる家族が順番に住んだこともあり、複数の家族の名前が記されているところもあります。

付録1 タシミの住民と住所一覧表

付録2 タシミ住民データベース

建物

タシミにはいろいろな建物がありました。個人住宅、アパート、風呂場、農業用の建物、病院、製材所などです。



(写真11 タシミの製材所)



(写真12 木材の運搬)



(写真13 薪の生産)



(写真14 タシミの農作業)

3.1 ホープ・プリンストン道路工事飯場

ホープ・プリンストン道路工事の飯場は日系カナダ人がブリティッシュ・コロンビア州に沿岸から100マイル以内の地域から強制排除された時に、日系カナダ人の独身、既婚男性を收容するために作られました。独身、既婚男性を家族から引き離して收容するという事は、強制收容初期の大きな論争のもとでした。ホープ・プリンストン道路工事のすべての飯場については「国内追放、太平洋戦争中の日系カナダ人の道路建設飯場の記録」（ヨン・シミズ、1993年）に詳しく記載されています。

ホープ・プリンストン道路工事の飯場は6つありました。ホープ・マイル11、ホープ・マイル15、キャンプNo.1レッドバック（プリンストンNo.1）、キャンプNo.5（プリンストンNo.2）、キャンプNo.2（プリンストンNo.3）、サミット・キャンプNo.4でした。このうちホープ・マイル11とホープ・マイル15だけがタシミ管理官に直接監督されていました。

マイル11 キャンプ

ホープからタシミに行く道路沿いにあり、タシミから3マイルのところでした。1942年3月15日に開かれたこの飯場には1943年1月には70名の男子がいました。このうち16名の既婚男子はタシミに家族がいました。既婚男子は毎週タシミの家族に会いに行くことが許されていました。この飯場には二つの寄宿舍、台所、食堂、日本式の風呂場がありました。

マイル 15

この飯場はタシミから 1 マイル、歩いて 20 分の所にあり、1943 年 1 月には既婚男性 13 人と独身男性 10 人の計 23 人が働いていました。

レッドバック (キャンプ No.1)

この飯場はタシミの北東 59 マイル、プリンストンの南西 11 マイルの所にあり (プリンストンはタシミの東 70 マイル) 45 人の男子が働いていました。

コッパー・クリーク (キャンプ No.2)

この飯場はタシミの北東 41 マイル、プリンストンの南西 29 マイルにあり、1942 年 7 月には 76 人、1943 年 1 月には 37 人が働いていました。

プリンストン (キャンプ No.5)

タシミの北東 53 マイル、プリンストンの南西 17 マイルにあり、1942 年 7 月には 52 人、1943 年 1 月には 131 人が働いていました。

1943 年 1 月にホープ・プリンストン道路工事の 4 つの飯場で 874 人が働いていました。

サミット・キャンプ (キャンプ No.5)

これはプリンストンの南西 50 マイル、アリソン・パスの近くの飯場でホープ・プリンストン道路の最高地点でした。この飯場は最後に建設されました。

フライデイ・クリーク (キャンプ No.5)

この飯場はプリンストンの南 13 マイルにあり、この道路建設の基地でした。

ホープ・プリンストン道路の建設は初期には重機械が不足していて進捗が遅く、厳しい肉体作業が主でした。労働者は一日 8 時間、週 5 日働きました。賃金は一般労働者は 1 時間 25 セント、鍛冶工、鋸の目立て工は 30 セント、自分の道具で働く大工と現場監督は 35 セント、トラック運転手は 40 セントでした。飯場で働く人は食事と住居代を一日 75 セント払い、また毎月医療保険に 1 ドル払いました。飯場には労働者の他に料理人、消防士と掃除担当者がいました。

週 5 日、毎日 8 時間働く以外はすることがなく、労働者の多くは飯場の孤立した環境で閉鎖感と寂しさを感じていました。それで 1942 年 7 月にホープ 11 マイルキャンプに監督者の承諾を得て共同購買組合を創設しました。飯場の労働者総てが組合員になり利益は自分たちののために使いました。ここには 100 人収容できる宿舎、食堂、風呂場、洗濯場があり、レクリエーションに新聞を読んだり、ラジオを聞いたり、手紙を書くことができました。道路工事の飯場で働いていた日系カナダ人男子が家族と暮らせるようにするという決定があり、そのためにホープから 14 マイル離れた所にあったトライツ農場にタシミ収容所が作られました。

1942年7月にデコボコではあったがプリンストンからアリソン・パスまでの自動車で通過可能な道路が開通しました。

1942年8月までにプリンストン寄りの4つの飯場には大部分が独身男子の60人住んでいました。既婚者男子はホープ寄りの飯場に移り、タシミ収容所でバンクーバーから移動し始めた家族を待つことになりました。またタシミの収容所建設に200人ほどが働いていました。

飯場では仕事の後や週末に庭造りをしたり、石を集めたり、ジュニパーを使って箱やブローチを作ったりして退屈を紛らわせていました。工芸品、彫刻、小説、詩を作る人もいました。野球、ハイキング、アイススケートも人気がありました。しかし日系人は釣りをすることは禁止されていました。いろいろなことをしましたが、それでも飯場の生活は単調でしつこかったです。

1943年になると飯場の監督者は日系人労働者のやる気を維持しようとして、ブリティッシュ・コロンビア州内陸の収容所に家族や友人を訪問することを許可しました。プリンストン寄りの飯場の労働者は一月一回プリンストンの町に行って映画を見るなどを許可されました。ただし町に行くには公安委員会に許可を願い出る必要がありました。

1943年にプリンストン寄りの飯場には三つの野球チームがありました。

1943年10月ホープ・プリンストン道路はホープの東26マイルのスカギー・ブラフスでつながりました。ホープマイル25飯場の人とプリンストンNo4飯場の人がやっと車が通れるようになったこの道路で出会うことになりました。道路は8～12フィートの幅で車がやっと通れました。

道路の建設はその後も改良のために1945年9月まで続きました。この時点でプリンストンからアリソン・パスまで50マイルが車で通過可能になり、ホープからは最初の7マイルが道路表面を平にして表面加工が終わり、つぎのタシミまでの14マイルは一部の表面が平らになりました。

4.0 収容所の組織

何も無いところから2600人が暮らす町を作ることを想像してみてください。どうやってこの町でまず人々が生きていくのに必要最小限度のものを確保しますか？どのようにこの町を組織して運営しますか？児童の教育はどうしますか？医療はどうしますか？毎日に必要なものを買う資金はどうして手に入れますか？

タシミの住民は以上の問題を解決するためにまずブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の監督管や職員と密接に協力して行動していかなければならないことを知りました。そして町で必要ないろいろなサービスは自分たちで組織して提供しなければならないこともわかりました。

運営

タシミ収容所は連邦政府による日系カナダ人の強制移動の結果生まれましたが、収容所の住民の行動は自由なところが多く、生活も安全で効率よく行われていました。収容所全体の管理は初期の施設の建設、住民の収容とその後の生活はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の責任でした。連邦政府警察が収容所の治安にあたりました。収容所内のいろいろな規則については住民が構成する親和会が責任を持ちました。親和会は住民の協議会、ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会との交渉係、そして住民の厚生を促進する代表という役目を担い、タシムの住民の生活に無くてはならないものになりました。住民は回覧板で町の出来事を知ることができました。

タシムの住民の声

「私がタシミに到着して間もなくの1942年10月最後に日に、ヒデ・ヒョウドウ、テリー・ヒダカ、その他の教育関係者が会合を開き私も出席しました。会合は収容所にあった大きな古い納屋で行われました。会合の目的は収容所の児童にどうやって教育の場を提供するかということでした。この小さな会合から学校を作ることが始まり、古い納屋が改造されて学校になりました。納屋は衝立で区切られて教室になりました。住民が生徒のために二人がけの机と椅子を購入しました。納屋の学校が始まると生徒の話し声で学校は活気に満ちました。」（マリー・カツノ）

警察

「ホープの町はブリティッシュ・コロンビア州の海岸から100マイル以内の日系カナダ人立ち入り禁止区域内なので、私達タシムの住民は行くことが出来ませんでした。収容所の入り口では連邦警察警官が人の出入りを見張っていました。」

（「国内追放されたカナダ人を教える、モリツグとゴーストタウンの教師たち」歴史協会刊行、189ページ）

タシミはほかの収容所と同様に連邦警察が警備をしていました。連邦警察は通常の警察業務の他にタシムの住民の行動の監視してブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が設けた規則を住民が守っているか確認していました。また収容所の入り口で収容所への人々の出入りを管理していました。

連邦警察派出所はタシムの町に中央にあり、事務所と拘置所がありました。警察官は収容所内を巡回警護していましたが、収容所内で起きたもっとも重大な事件といえばせいぜい住民同士の口論でした。連邦警察はこの他にも月例報告書を提出（住民の人口を含む）しました。また死亡、出生記録もとっていました。

収容所の初期には日系カナダ人の旅行は制限されていました。旅行をするには旅行を必要とするのに十分な理由、例えば親族の死亡など、を書いて連邦警察から許可をもらわなければなりませんでした。

連邦警察警官は違法行為の取締りが公平で、住民に対する態度も礼儀正しく、住民に尊敬されていました。

「連邦警察はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会によって交付されたタシミの生活の規則を住民が守っているかどうか監視する義務がありました。この規則には日系カナダ人の移動制限、ある種の持ち物の所持禁止、カメラとラジオの使用の禁止、魚釣り、野生動物の猟と罟の禁止、長距離電話の使用禁止などがありました。これらの規則は徐々に修正されたり緩和されました。」

（「日系カナダ人の管理に関する連邦政府労働省報告1942年から1944年」）

回覧板

タシミの住民は回覧板を始めました。回覧板は持ち運べる大きさの情報誌で家から家へと回し読みされました。回覧板にはニュース、広告、要望などが書いてありました。回覧板は道路の端の家から始まり次々と家を回り、ニュースが直ぐに収容所全体に伝わるようにそれぞれの家で急いで読んで名前を署名して次の家に渡されていきました。

回覧板はニュースとお知らせをタシミの住民皆に急いで知らせる有効な手段でした。収容所に関する大切なニュース、雑貨屋に入った新しい品物などのことも書いてありました。タシミの住宅は整然と列になって並んでいるので回覧板を素早く全戸に回すのに便利でした。

就業

日系カナダ人はタシミに収用された時に仕事を失い、生活の手段が無くなりました。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会は必要があればタシミに収用された人達の生活を経済的に支えることになっていましたが、また収用された人達は仕事につき出来るだけ自分たちで生活を支えることになっていました。

タシミは収容所は自立を目的として建設された町なので働く機会はたくさんありました。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会、後には連邦政府労働省日系人局が雇い主でした。仕事の種類は道路建設の労働者から医者、歯医者までたくさんありました。

親和会

住民にはタシミの団体生活を問題なく行うための組織が必要でした。日系カナダ人はバンクーバーのヘースティング・パークの仮収容所でタシミへの移動を待っているときからタシミ建設委員会を創立してタシミの住居、移動などについての自分たちの要望がタシミの建設に反映されるように努力しました。

1942年12月7日に50名の委員からなる親和会が創立され、従来の建設員会と代わりました。委員はタシミのそれぞれの住宅区から任期六ヶ月で選ばれました。

親和会はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会と一緒に収容所の生活の方針や規則を作りました。親和会は収容所の生活改善をブリティッシュ・コロンビア州公安委員会に働きかけました。またタシミの日系カナダ人住民とブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の間の日本語と英語による仲立ち役をし、日系カナダ人住民社会には町議会の役目も担いました。

親和会は収容所の生活一般について責任を持っていました。暖房と料理用の薪の配達、照明用の軽油、ゴミ処理、住居、屋根、ストーブの保守と修理などです。回覧板も作成しました。また親和会は執行委員会を作り教育、福祉、価格、スポーツ、レクリエーションについて責任を持ちました。

親和会はすぐれた組織能力を生かして、収容所の住民のやる気を維持するためには住民が何かすることがあり、収容所の生活に寄与出来るようなことに従事するように努力しました。若い人たちが何もしないでだらけないように、また女性が何か新しい技術を獲得できるようにも腐心しました。親和会は葬式その他の儀式を取り仕切り、住民間の円滑なコミュニケーションの促進もしました。

タシミの住民はいろいろな問題や苦情を親和会に持って来ては解決してもらいました。住民の苦情や要望は親和会で十分に議論したあとで、必要なときはブリティッシュ・コロンビア州公安委員会に持っていきました。このように親和会はタシミの生活に重要な影響力を持つ組織でした。

タシミの住民のリスト

タシミの住民の住所氏名録が完成し、ガリ版印刷で発行されました。氏名録を出身地別に集計すると滋賀県出身者が一番多く、広島県、熊本県、和歌山県と続きます。タシミでは最近以前の建設委員会の後を継ぐ組織が作られ親和会と名付けられました。タシミ住民の投票で選出された委員はまた執行員委員会委員を自分たち委員の中から投票で選出しました。執行委員会は次のとおりです。

会長： クマジ・ニヘイ

副会長： R・シラカワ

委員： S・ササキ、T・タカハシ、N・オセキ、T・スミ、K・ニシハラ、K・カワサキ、K・ツユキ

秘書： S・シライシ、T・タシロ

12月20日の執行委員会で「親和会はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会と協力してタシミにおける日系カナダ人コミュニティーの統合と福祉を促進する」という動議を可決しました。

タシミの施設の建設はほぼ終了しました。ただし病院の内部の部屋、学校に使われる建物の改造、店舗のための建物、事務所、コミュニティーホールの改造などはまだ終わっていません。製材所はフル回転ですが、多くの大工と配管工は製材所から樹木の伐採の仕事に回されました。暖房用の薪

が不足していたからです。12月26日と27日は青年会が大きな演芸会を催したので住民は大喜びでした。

教育

強制移動で日系カナダ人の子弟の教育は突然中断されました。カナダの義務教育は州政府の責任ですが、ブリティッシュ・コロンビア州政府は日系カナダ人の強制移動は連邦政府の事業であるという理由で日系カナダ人子弟の義務教育を中断しました。日系カナダ人の強制収容とカナダ各地への強制移動の間、収容所には日系カナダ人子弟を教える州政府の教育免状を持った教師は一人もいませんでした。ブリティッシュ・コロンビア州教育省は収容所が日系カナダ人子弟を教える教師を雇うことを拒否しました。1942年秋には日系カナダ人子弟はこれから教育が受けられないという状況にありました。



(1944年7月23日、ニューデンバーの教師研修会で)



(ヒデ・ヒョウドウ)



(小学校の生徒たち)



(幼稚園の児童たち)



(タシミ高校の教師たち)

医療

タシミ収容所が開所したときには医療施設はありませんでした。病院が建設されている間は臨時診療所が医療サービスを行いました。病院も最初のうちは日系人以外の医師が務めていましたが、すぐに採用されていた日系カナダ人でカナダで医療教育を受け資格を取った医師、看護婦が病院で仕事をするようになりました。タシムの医療サービスは1946年6月に終了しました。



(1943年6月、タシミ病院の関係者)



(タシミ病院)



(男子の病室)

宗教

タシミには仏教会、ユナイテッド教会、アングリカン教会の信者がいました。住民の大部分は仏教徒でした。日本生まれの人は仏教徒でカナダ生まれの人にはユナイテッド教会とアングリカン教会の信者でした。

ユナイテッド教会の牧師は高校の生徒を教え、アングリカン教会の牧師は幼稚園で幼児を教えました。

タシミの声

「私はタシミで友人の娘さんの火葬に立ち会いました。火葬は森の中の空き地で行われ、棺桶を火葬用の薪の山の上に置き火をつけました。私達は火葬場でお通夜を行い、一晩中静かに話しながらモミと松の森を吹き抜ける風の音に耳を傾けました。夜明けに火葬場を後にしました。後で家族が来てお骨と遺灰を集めました。タシミ収容所内でのお葬式はありませんでした。」（ビクター・カドナガ）

タシミの声

「私達がバンクーバーのヘースティング・パークの仮強制移動に来ると直ぐに、私の夫は収容所の人達の役にたちたいと言いはじめました。そして収容所で靴の修理をしたいと言いました。収容所には何百人という大人や子供いましたから、たくさんの靴の修理が必要でした。たまたまプリンス・ルパートで夫が世話をした日系人が靴職人でした。この人は政府から危険人物と判断されて敵性外国人収容所に入れられてしまいました。夫はこの人から靴の製造修理に使う道具一切を譲り受け、ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会に靴修理の店を開く許可を申請しました。許可が降りると夫はタシミに行きました。タシミが一番大きな収容所だったからです。夫は靴の製造と修理の道具を持っていましたが靴の製造や修理の経験はありませんでした。それでタシミでは経験者を雇って自分は店の経営をしました。料金は安く、収容所の人達は皆喜びました。夫は収容所の人に役立つことが出来たのです。公安委員会の人達は夫を信頼して親切に対応してくれました。私達がタシミを離れてトロントに移動する時には店の道具、材料すべてを無料で引き取ってよいという許可が公安委員会から出ました。夫はすべてのものをトロントに送りましたが、荷物は全部で5トンありました。それまでに夫は見様見真似で靴の修理が出来るようになっていました。おかげでトロントでも靴の修理の仕事を6年間続けることが出来ました。」

「タシミでは夫は靴の修理、私は助産婦、娘は教師をしました。私達の賃金な皆同じで1時間25セント、一月でだいたい45ドルでした。タシミでは出産も続きました。全部で400人から500人の二世が誕生したとおもいます。タシミには4000人近くの日系人がいたので、学校、病院、風呂場、靴の修理店となんでもありました。夫は靴修理店の経営だけで他にはなにも仕事はしませんでした。それで野球チームを編成して三年間マネージャーをしていました。夫は仕事も熱心

でしたが生活を楽しむことも忘れませんでした。」（ヤス・イシカワ、“写真花嫁、カナダの日本女性、” トモコ・カワベより）

ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会はバンクーバーに本部がありブリティッシュ・コロンビア州の沿岸から 100 マイル以内の戦略的に重要な保護地域から日本人を祖先に持つ人を追放する責任を持っていました。公安委員会な内閣令 PC1665 号によって 1942 年 3 月 4 日に設立され、連邦政府労働省の管轄のもとに活動しました。保護地域から日本人を祖先に持つ人達の追放が完了すると、公安委員会は内閣令 PC946 号で解散し、その後の日本人を祖先にもつ人達の管理はオタワの連邦政府労働省日本局と日系カナダ人配置委員会に移されました。日本局と配置委員会はバンクーバーに事務所を持っていました。

4.1 タシミの管理

ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の役目は次のようでした。

- ブリティッシュ・コロンビア州の保護区域の日本人（日本生まれとカナダ生まれを問わずすべて）をブリティッシュ・コロンビア州内陸部の 6 つの収容所、自立した収容所、または労働力を急いで必要としているロッキー山脈以東（主にアルバータ、マニトバ、オンタリオ州）の産業（農業を含む）に強制移動する政策を立案し、実行、管理する。
- これらの日本人の住居、食料を供給して保護し、就職出来ない人、高齢者、病人は生活できるように支援し、児童にはカナダの初等教育を行う。
- 日本人の移動を管理して日常の生活の規則を必要に応じて作る。

公安委員会のさしあたっての役目は日系カナダ人ののブリティッシュ・コロンビア州内陸の収容所とロッキー山脈以東への強制移動でしたが、収容所への移動が終了すると、収容所の管理が一番大切な役目になりました。公安委員会はこのために収容所管理官を任命しました。管理官はいわば収容所の町長で収容所の施設の建設と維持、雇用、厚生、医療、教育、警察、地域サービスとその管理（雑貨店、パン屋、床屋など）と住民の他の収容所への移動などについてのすべての最高責任者でした。

タシミは他の 6 つの収容所と同様に管理官と副監督管が管理していました。管理官はバンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア州公安委員会に属していました。またタシミには現場管理のマネージャーが数人いました。監督管と現場管理マネージャーは協力して収容所の管理にあたっていました。現場管理マネージャーはバンクーバーにはそれぞれが属するブリティッシュ・コロンビア州政府の役所に上司がいました。

タシミは地理的に孤立していたので他の収容所と違って自立していました。収容所はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が管理をしていましたが、収容所の運営に必要な仕事は少数の日系人以外の人を除くと収容所の日系カナダ人が雇われて行なっていました。

収容所の監督管は収容所の日系カナダ人が作ったいろいろな組織と連絡して収容所の運営にあたりました。収容所の日系カナダ人は収容所の生活に必要な組織をつくりその責任者を選挙で選びました。

副監督管は住人の戸外の活動に責任をもっていました。これら戸外の活動には木の伐採、製材、収容所施設の保守管理などがありました。事務監理官が収容所の会計、事務所の運営、職員の管理にあたり、日系人以外の職員が雑貨店、倉庫、肉屋、郵便局の運営にあたりました。

ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会は 1942 年 3 月 4 日のカナダ連邦政府 1665 番閣議令で設立され、オースティン・テイラーが委員長になりました。公安委員会は連邦政府労働省大臣ハンフリー・ミッシェルの権限の下に活動しました。日系カナダ人の強制移動が 1942 年 10 月 31 日に完了するとブリティッシュ・コロンビア州公安委員会は連邦政府閣議令 946 号で解散し、その権限は連邦政府労働省大臣の下にバンクーバーに新たに作られた日系カナダ人配置委員会に移されました。この委員会の委員長はジョージ・コリンズでした。（“日系カナダ人管理報告書 1942 年から 1944 年” 1944 年 8 月発行から）

1942 年 3 月カナダ連邦政府はバンクーバーにブリティッシュ・コロンビア州公安委員会を創立しました。この委員会はタシミ収容所の管理運営とブリティッシュ・コロンビア州内の日系カナダ人全般の戦時中の管理に責任を持っていました。収容所には管理官が配置され、委員会の方針によって収容所の管理運営にあたりました。日系人配置官と福祉サービス職員が収容所の住人の福祉サービスに責任を持っていました。配置官は収容所住民の収容所以東への移動と 1946 年 5 月と 8 月の日本への帰還の許可を管理しました。公安委員会の他の委員は収容所の他の事務、例えば雑貨店、倉庫、木材、農場などの管理運営にあたりました。（「日系カナダ人移動センター、1942 年から 1946 年」 WJ・オーマック著から）

それぞれの収容所で住人は収容所の生活を確立していくための組織の指導者になれる人を探しました。タシミではエツジ・モリとそのグループがこの役割を担いました。1942 年にエツジ・モリの指導力が低下してシエオタカ・ササキとフランク・S・シライシが指導者となりました。この二人とアングリカン教会牧師のヨシオ・オノがタシミ住民のいろいろな仕事を指導しました。

収容所生活の改善のために住民は管理官と交渉しましたが、難しい交渉でした。収容所の管理官の多くは、特にスローキャン・シティー（後にタシミ）のウォルター・ハートレー、カスロー（後にニューデンバー）、ヘンリー・P・ローヒードの監理官は協力的でしたが、ほかの収容所の管理官はそれほど熱心ではありませんでした。例えば 1942 年と 1943 年にブリティッシュ・コロンビア州

内陸部収容所住居マネージャーの EL.レン・ブルビーは 1943 年に日系カナダ人配置委員会委員長のジョージ・コリンズに「収容所の施設を改善すると日系カナダ人住民の居心地が良くなり、収容所から他の土地へ移動させることが難しくなる」、と文句をいっています。そしてまた、「もう収容所の改善は必要なく、現在の施設でどうにか生活してもらうのが良い」とも言っていました。

（「人種差別の政治、太平洋戦争の日系カナダ人の強制移動」アン・ゴマー・スナハラ、第 4 章）

4.2 就業

タシミで日系カナダ人が従事した職種

1942 年の春、18 才から 45 才の日系カナダ人男子で健康な人 2000 人余りが家族から別れて連邦政府鉱山・資源省の管轄するブリティッシュ・コロンビア州内陸部の道路建設現場に送られました。大部分の人達は若い独身者でしたが既婚者も含まれていました。

1942 年 3 月までに 1000 人余りの日系カナダ人男子がホープ・プリンストン道路の建設に徴用されました。これらの人達は道路沿いの五つの飯場で生活しました。家族の多くはタシミ収容所へ送られました。1943 年 7 月に規則が変わりやっと家族と一緒に生活できるようになりました。

ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会（後には連邦政府労働省日本局）が収容所の日系人の雇い主でした。1943 年 1 月までに約 600 人の日系人男女が雇われました。そして約 100 人の日系人が生活保護を受けていました。約 35 人の日系人以外の人が収容所の運営の仕事に雇われていました。

収容所の施設の建設が終わると、多くの日系人がブリティッシュ・コロンビア州公安委員会に雇われ様々な職種につきました。事務職員、病院職員、野菜の栽培と家畜の世話、教師、店員、市民サービスなどです。雑貨店では 40 人の日系婦人が販売と事務の仕事に従事しました。

タシミ製材所は収容所の住居、公共施設、現存していた牧場の建物を学校とアパートへ改築などのための木材を製造しました。またタシミの建物の建造、改築には 1942 年 8 月に 350 名の男子が雇われ、347 の住居と他の施設を建てました。1945 年 3 月には製材所は 212 人の男子を雇っていました。タシミで雇用された日系人の総数は 645 人で毎月の支払い合計は 34,883 ドルでした。

1943 年の夏には連邦政府軍需・燃料省の木材燃料監督官の要請で木材燃料プロジェクトが始まりました。これはバンクーバーの燃料不足を補うためのプロジェクトでした。

他にもヘイネイのピーター・ベインの製材所で働いた日系カナダ人男子がいました。この製材所の賃金はタシミにあるブリティッシュ・コロンビア州公安委員会の製材所より高かったです。16 才から 20 才の男子で道路修理のトラックや原木を運搬するトラックで仕事をした人もいました。また午後の 3 時まで店や事務所で働き、夕方は高校に通った人もいました。畑で人参、セロリ、キャベツなどを育てたり、馬の餌料にするカラスムギを育てる仕事に従事していた人もいました。

日系カナダ人女子は教師、速記者、事務員、店の売り子、倉庫の職員、病院の看護女子の仕事に就いていました。

連邦政府労働省日本局はまず働ける日系人すべてに仕事を与えることを目的にしました。そしてこの目的に到達すると、次に若い日系人にロッキー山脈以東の労働者不足な産業に仕事を見つけることを目的にしました。アルバータ州、マニトバ州、オンタリオ州南西地域の林業と農業などが見つかりました。

ほかの収容所と同様にタシミでも公安委員会は各家庭が家庭菜園を作ることを奨励して野菜の種と肥料を無料で提供しました。また公安委員会は収容所に大きな農地を作り約 100 人の日系人を雇用していました。

1943 年に公安委員会はタシミに小さな醤油と味噌の工場を作りました。醤油と味噌造りの経験を持つシンイチ・ネゴロが工場長となり日系人を雇いました。そして高品質の醤油と味噌を作り、タシミだけでなく他の収容所やロッキー山脈以東の地域に移動した日系人たちにも醤油と味噌を供給しました。

賃金

収容所で働く日系カナダ人の賃金は 1 時間 25 セントが基本で、特別な技能を必要とする職種はこれより高い賃金をもらいました。1942 年のカナダの平均賃金は男子が 1 時間 62 セント、女子が 37 セントでした。

道路建設労働者は 1 時間 35 セント。一般労働者の最低賃金は 1 時間 25 セント（一日の労働時間は 8 時間）で 1 時間あたり 2.5 セントを住居費として差し引かれました。独身男子は手取り 1 時間あたり 17.5 セント（住居と食事付き）で、技術をもった労働者（大工、配管工、機械工など）は 1 時間 22.5 セントから 27.5 セントの賃金でした。

日系カナダ人で施設の建設と修理、燃料用の木材の採伐などの戸外で働く人は 1 時間 22.5 セントから 40 セントの賃金をもらいました。1943 年 4 月 1 日まで屋内で働く専門職は一部は時間給、一部は月給でしたがそれ以降は全部月給になり、月に 30 ドルから 75 ドルをもらいました。医者と歯医者者の月給はもっと高かったです。

仕事の無い人への補助

公安委員会は仕事のない人に補助金を支給しました。これは日系カナダ人は敵性外国人という理由で自宅、仕事、生活を強制的に放棄させられたからです。補助金を受けた人は病人、体が弱くて働けない人、高齢者、シングル母親とシングル父親、その他の理由で働けない人、働いているが収入の少ない人などでした。

公安委員会の下に福祉課がもうけら訓練された福祉サービス職員が補助サービスの管理をしました。この職員はブリティッシュ・コロンビア州で行われていた福祉政策に基づいてタシミの該当者に福祉サービスを提供しました。経済的援助、住居の提供、食料と衣料の提供が福祉サービスに含まれていました。タシミでも他の収容所と同様に福祉サービスマネージャーと日系人の職員が福祉サービスにあたり、日系人職員は収容所の住人と密接に連絡をとっていました。ブリティッシュ・コロンビア州の基準にあった福祉サービスを収容所の住民が受けられるようにするのが福祉課の責任でした。1942年の福祉サービスの経済補助は独身者が月に15ドル、家族は最初の二人が月に11ドルづつ、それ以上は一人あたり4ドルでした。それで4人家族は月に30ドルもらいました。住居、水、料理と暖房用の薪、照明のための灯油は無料で支給されました。

道路建設に従事した日系人がタシミの家族と合流出来るようになると、この人達は収容所施設の修理などの仕事に従事しました。そして家族の生活費は自分たちの負担となりました。これ以降福祉サービスを受ける人は減少し、福祉サービスの補助金総額も減少しましたが、これはいわば道路建設労働者が家族と合流して福祉サービス補助金を肩代わりしたものでした。

タシミの声

「どうして私達ネゴロ一家がタシミ収容所を退所した最後の一家になったかお話しします。父はステイブ・ササキ（柔道五段）、アーサー・ニシグチ、マゴジロウ・ニシグチ、スズモトなどの日系人と一緒に故郷の町ブリティッシュ・コロンビア州のアッシュクロフトに醤油と味噌の工場を建てる計画をつくりました。そしてタシミの醤油・味噌工場の材料の残りを購入しました。工場は1946年、収容所から日本帰還者が出て、バンクーバーに移動したころに閉鎖されました。1946年の秋、連邦警察と他の管理責任者がタシミを離れた時に、まだ父達は樽に大豆を詰める作業をしていました。父は日本に帰る手続きはしませんでしたから収容所に最後まで残り、大豆を確保していました。アーサー・ニシグチが1トン積みトラックを持っていて息子のキイチ・ニシグチ、甥のカイチ・ニシグチ、それとササキさんと一緒に収容所に来ました。このトラックに大豆と私達の少しばかりの身の回り品を積み、ササキさんと私の姉妹のエミとシゲミが前の席に、カズミを抱いた父と残りの家族が荷台に乗りました。私達は収容所を出て、慎重に運転してホープに着きました。これは私の12才の誕生日の数日前、1946年11月4日か5日のことだったと思います。ホープから列車に乗ってアッシュクロフトに行きました。」（タック・ネゴロ）

4.3 タシミの住宅と施設

タシミにはいろいろな種類の住宅と施設がありました

住宅

347の安普請の住宅が以前からある牧場の施設の東側のスマロ川と北側の小川の間の平地に急いで建てられました。一戸の住宅には8人まで住みました。

公安委員会基準の住宅は12フィート25フィートの面積で、これはブリティッシュ・コロンビア州のどの収容所でも同じでした。住宅はタシミの製材所で作られた荒削りの建材が縦に建てられた枠に釘で打ち付けられました。そしてこの上からコールタール紙をかぶせました。二戸の住宅が屋根のついた通路で結ばれ、この通路の下が共通の薪の倉庫になりました。

それぞれの住宅は三つに区切られていました。居間・台所(9x14フィート)が真ん中にあり、8x14フィートの寝室が一つかまたは8x7フィートの寝室が二つありました。寝室の両側に二段ベッドを作る家が多かったです。部屋にはドアが無く、カーテンで区切りました。木を燃やすストーブと木製の流しが居間・台所の一方の壁際にありました。このストーブが暖房源でした。この住宅の建設費は1942年の値段で一戸あたり145ドルでした。

照明は灯油またはケロシンのランプで、いつも掃除をする必要がありました。後にもっと明るいコールマン社製のランタンを使う人もいました。

住居のなかには上下水道は無く、4戸の家が戸外にある4人用の便所を共有しました。これは住宅の裏に作られていました。

住宅は南北に平行に作られた10本の通りに面して建てられていました。通りの南の突き当りにタシミ大通りがあり、北の突き当りに4つの風呂場がありました。家の前の通りには家にそって木製の歩道が作られました。この歩道を下駄をはいて風呂場に行く人々の足音が毎日響いていました。

家族4人までの一家は二つ続いた住居の片方だけに住み、大きな家族は二つ続いた住居の両方を使って住みました。それぞれの家族が独立して炊事と洗濯をしました。

住居にはタシミの冬の寒さにも関わらず断熱材が使われていませんでした。1942年から1943年にかけての最初の冬は住居の外壁には製材されたばかりの材木が使われ、板はまだ完全に乾燥していませんでしたので、乾燥するに従って縮み、板と板の間に隙間が出来て戸外の寒気が部屋の中に浸透しました。住民はこの板壁の内側に毛布を吊るして寒気を防ぎましたが、それでも朝になると毛布に氷がついていて、毎朝この氷をはぎ落とさなければなりませんでした。

アパート

農場の納屋(Cビルディング)は1階と2階が38のアパートに区切られ、それぞれのアパートに5人が入りました。共同の炊事場が1階と2階にあり、風呂場と暖房と暖水のためのボイラー室もつくられました。

Cビルディングに付属していた羊の納屋は二つに区切られ、Cビルディングに接している方はBビルディングと呼ばれて90人に独身者が入りました。もう一方はAビルディングと呼ばれて週日は教室に週末はユナイテッド教会の集会に使われました。

Eビルディングは独身女子のためのアパートに使われました。このビルの前方部分に床屋があり、散髪は25セント、シャンプーは10セントでした。

公安委員会の日系人以外の職員はスマロ川の向こう側の別のビルディングに住んでいました。このビルディングには室内に上下水道があり、また電気と暖炉のある共有の部屋がありました。

日系人以外の人でも学校の教師、教会の牧師など日系人の住居地区に住んでいた人達もいました。例えばユナイテッド教会に属していた女性の教師は4014番通りの家に住んでいました。

風呂場

10番通りの北に日本式の風呂場が4つあり、タシミの日系人が使いました。風呂場には2つの大きな風呂と体を洗う湯を貯めておく小さな風呂がありました。

風呂場は二つに区切られ、一方が男子用、もう一方が女子用でした。風呂場は午後4時から10時まで開いていました。そして各家庭は予め割り当てられた時間に風呂場に行きました。

タウンセンター

公安委員会はタシミが独立した町として機能するための施設をすべて作りました。タウンセンターはU字型をしたビルディングで、ここに公安委員会の事務所、雑貨店、倉庫が入っていました。近くに連邦警察の派出所、発電所、肉屋、食堂がありました。

Dビルディングと呼ばれた以前の納屋は改造されて教室と住民のためのホールになりました。1階は二つに区切られ、一方はタシミの大工仕事の場所、もう一方は集会場と教室に使われました。2階も二つに区切られ、一方は教室にもう一方はタシミの催し物会場に使われました。この催し物会場は週日は区切られて教室になり、週末には区切りを取り払い講堂・体育館になりました。このような使用法は1944年に小学校にもう一つの建物が完成するまで続きました。

それぞれの家庭は自分で食事を作りましたが、独身者とタシミ以外の飯場で働いている人の食事は食堂で供給しました。食堂は三つに区切られ、中央部分が台所で、台所の片側は日系人の独身者のための食堂、もう一方は日系人以外の住民と連邦警察職員の食堂でした。

25キロワットの発電装置が設置されてからはアパート、学校、病院、雑貨店、公安委員会事務所に電力が供給されました。発電能力が限られていたので一般住民の住居には電力は供給されませんでした。

農場の建物

タシミの町が出来る前にあった牧場の建物はタシミの住居や施設の改造されました。タシミの監督官はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会によって任命されましたが、この監督官がいわばタシミ町の町長の役割を担っていました。監督官とその家族はタシミからホープに行く道の横の丸太で作られた家に住んでいました。他にもタシミの日系人以外の職員でこのような丸太造りの家に住んでいた人達もいました。タシミの高校を始めたユナイテッド教会のマックウィリアムズ牧師もこのような丸太の家に住んでいました。

他の牧場の建物は馬の厩舎や豚舎に使われました。またタシミには金属の加工場と自動車の修理場がありました。タシミで使われる豚肉はタシミで豚を屠殺して加工していました。

病院

50床の病院が完成して日系人以外に医師一人、日系人の医師一人、日本人以外と日系人の看護師（看護師は主に日系夫人）が勤務を始めました。十字形をした二つの横に伸びた建物があり、一方は男子用の病室、もう一つは女子用の病室でした。個人用の病室もありました。他にも医師の部屋、歯医者さんの部屋、看護師長の部屋、検眼士の部屋、手術室、分娩室、レントゲン室、台所、洗濯場がありました。病院の後ろには慰安室が建てられました。

水道その他

タシミの飲水は収容所から南西にある川の川上に貯水場が作られ、ここから6つの口径6インチのパイプで収容所まで引かれ、各住居に分配されました。住居の中に水道はなく4戸に一つの共有の水道の蛇口が戸外にありました。

タシミからホープに電話をかけられましたが、電話の使用は公安委員会の職員、連邦警察とタシミで働く政府職員に限られていました。

スマロ川の南側、公安委員会職員のアパートの東側の平坦な場所がスポーツ場として使われ、野球場もありました。ここでタシミのいろいろな戸外の催し物が行われました。

スマロ川には橋が三つ掛かっていました。一つは肉屋のそばから日系人以外の住民のアパートに行き、一つはもう少し東寄りです番通りから運動場に行き、もう一つは10番通りから野球場に行きました。

収容所の東に火葬場と焼却炉のあるゴミ処理場がありました。

製材所

タシミには以前から製材所が収容所の東、収容所へ出入りする車を見張る監視所の向こう側にありました。製材所のある道路が後にホープ・プリンストン道路になりました。この製材所はタシミ建設の時に整備されてタシミの住居建設用の木材を製造しました。1日あたり6,500ボードフィートの製材能力がありました。製材所は燃料用の薪も製材してバンクーバーと他の町に出荷しました。

4.4 教育

強制移動で日系カナダ人の子弟の教育は突然中断されました。カナダの義務教育は州政府の責任ですが、ブリティッシュ・コロンビア州政府は日系カナダ人の強制移動は連邦政府の事業であるという理由で日系カナダ人子弟の義務教育を中断しました。日系カナダ人の強制収容とカナダ各地への強制移動の間、日系カナダ人子弟を教える州政府の教育免状を持った教師は一人もいませんでした。ブリティッシュ・コロンビア州教育省は収容所の日系カナダ人子弟を教える教師を雇うことを拒否した。このように1942年秋には日系カナダ人子弟は将来教育が受けられないという状況でした。

児童の教育が中断されてから親たちとボランティアは自分たちで児童を教育をしようとバンクーバーのヘースティング・パークと教会に緊急の学校を開きました。ブリティッシュ・コロンビア州の学校で16年の教職経験のあるヒデ・ヒョウドウと、ヒョウドウと一緒に学校を運営していたチトセ・ウチダの二人が高校した日系人に教え方の訓練をして、この二つの学校で教える教師にしました。高卒の教師たちは後にブリティッシュ・コロンビア州の他の収容所でも教えました。

日系カナダ人が収容所に到着してから、やっと公安委員会が収容所の児童の教育に責任をもつことになりましたが、それでもグレード1から8までで高校生の教育と幼稚園は収容所の教会関係者が行いました。タシミではユナイテッド教会の牧師たちが子供の教育や他のことで住人を助け皆に愛され感謝されました。

教師たちの献身的な努力によってタシミの児童は質の高い教育を受けることが出来ました。おかげで収容所生活が終わり、普通の学校に戻ったときも問題なくそれぞれの学年に戻ることが出来ました。またタシミで身につけた勉強の方法はその後の学業と人生において役にたちました。

1942年9月に日系カナダ人市民協議会はバンクーバーに臨時学校を設立して、強制移動の命令を受けた日系カナダ人の児童の入学を拒否した公立学校に代わって教育を続けました。公立学校は日系カナダ人の強制移動が終了するまでの間、何週間または何ヶ月になるかはわかりませんが、日系カナダ人児童の入学手続きを受け付けないことにしました。この臨時学校は児童の入学手続きをボランティアで始め、パウウェルストリートのユナイテッド教会で授業をしました。そして日系人がバンクーバーから強制移動を始める時まで授業を続けました。学校の責任者はヒデ・ヒョウドウとミス・ウチダの二人でした。（ニューカナディアン新聞、1942年9月12日）

公安委員会が本日ニューカナディアン新聞に告げたところによると、公安委員会は強制移動させられた日系カナダ人の児童に通信教育を取る機会を与えるが、児童の指導はボランティアの教師がすることになるそうです。ブリティッシュ・コロンビア州政府は道義的、財政的に太平洋沿岸から強制排除された日系カナダ人児童の教育に責任を持たず、いかなる形でもこれらの児童の教育を援助することはないと断言しています。そのため連邦政府のブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が通信教育の費用、教科書と必要最低限の備品を供給することになりました。各収容所の監督官は住民と協力して児童が集まって通信教育で勉強する場所を確保する、また少数の二世の学校秘書を公安委員会が雇用して通信教育の教材の配布、クラス分け、教室の確保などの事務を行う、ことになるそうです。（ニューカナディアン新聞、1942年10月10日）

教育組織

ミス・ヒョウドウがヘースティング・パークで始めた学校プロジェクトが1942年秋には収容所で学校を開校する時のモデルになりました。公安委員会が収容所における初等教育に責任を持つようになってからは、ヘースティング・パークの学校をモデルにしてミス・ヒョウドウなどの初期の指導者の協力を得て学校を開校しました。ミス・ヒョウドウは収容所が学校を組織するのを助け、若い二世が学校で教える手本となりました。

新しく出来たばかりの収容所では1942年の終わりから1943年の始めにかけて学校を開校する準備をしました。タシミでは古い納屋を教室に改造したり、教師を雇用したり、学校の備品を整えたりとたくさんのことをしなければならず、児童が学校に通い始めたのは1943年1月26日でした。それまでに児童は正常の授業を一年近くを受けられなかったわけです。始業式には600人の児童が学校にきました。しかし始業式の日にはまだ暖房設備を設置中で、教室が寒すぎたので児童は始業式が終わるとすぐに家に帰されました。

ヒロシ・オクダがタシミの小学校の初代の校長に任命されました。オクダはブリティッシュ・コロンビア大学の卒業で、ヘースティング・パークに臨時の高校が設立された時に数学の教師になりました。タシミでも引き続きボランティアの教師として初等教育を組織して教師を採用しましたタシミの小中学校の校長になってからは約600名の生徒の教育の責任者となり数々の困難を乗り越えて教師を雇用し教科書と備品を獲得しました。

学校には父兄会が作られ、マサカル・モリガツが会長になりました。モリガツは公安委員会に教育の改善を働きかけました。父兄会は学校の運営を助けただけでなく、父兄から募金を集めて教科書を購入する手助けもしました。

幼稚園

幼稚園、実際はデイケアと言ったほうが良いのですが、はアングリカン教会によって運営されました。教会の牧師ミス・ホーキンスとミス・ウォーカーが二人の日系人の若い女性と一緒に120人の

児童を教えました。二つのクラスがあり午前9時半から午後3時半の間に一つのクラスは午前、もう一つのクラスは午後が開かれました。幼稚園は木立の中にある建物で教会と幼稚園を兼ねていました。幼稚園で児童は勉強をしたり友達と遊んだりしました。また父兄のための英語教室も開かれました。

小学校が1943年に開校した時に30人の教師がいましたが、その多くは収容所に来るまで児童に教えた経験がありませんでした。大多数は高校卒また大学卒の若い人たちで、学校で教えることをかってでました。学校では必修教科以外のことも教えました。教師は最初のうちは学校の教科課程を知らなかったのが大変でしたが、教室で経験を積むとともに自信を持つようになっていきました。教室で実践を通して経験を積む他に1943年と1944年には正式な教師の訓練プログラムに参加しました。

高校

タシミの高校には毎年150人を超す生徒がいました。父兄会が公安委員会に請願しましたが、公安委員会は高校の校舎を建設することを許可しませんでした。父兄会は自分達の経費で高校を建てると提案しましたが、これも拒否されました。父兄会はカナダ・ユナイテッド教会に相談することにしました。というのはユナイテッド教会は日系人がヘースティング・パークの収用されていた時にも高校教育を援助してくれたからです。

ユナイテッド教会の牧師、ウィルバー・ロイ・マックウィリアムが高校の設立に重要な役割をはたしました。マックウィリアムズは高校の教師の確保に尽力し、ブリティッシュ・コロンビア州政府とカナダ連邦政府のどちらもが拒否した高校を設立することに成功しました。高校の教師だったウィニフレッド・オーマックによれば、父兄はマックウィリアムズ牧師に「教会でなんとか助けていただけませんか？私達の子供が高校教育を受けられなければ、将来子どもたちは単純労働者になるより他はありません。」と訴えたそうです。マックウィリアムズ牧師は直ちに行動を開始して、カナダ・ユナイテッド教会本部に相談し、教師を採用し、教室となるような施設の使用を交渉し、学校の備品を整えました。教師の中には日本人・カナダ人交換船MVグリプスホルム号でカナダに帰ってきたばかりのメイ・マックラクランもいました。ミス・マックラクランと保安委員会福祉局のダグラス・サウンダーズがこの高校の設立に尽力しました。

カナダ・ユナイテッド教会の女子宣教師会が高校の授業の具体的な中身を組織しました。生徒は通信教育を取り、それぞれの教科に9ドルを払いました。さらにこれらの生徒は「外国人」とみなされているので基礎費用の2ドルを払いました。これは着の身着のままタシミに強制移動させられた日系人父兄にとって、とても大きな経済的な負担でした。結局、公安委員会がこの11ドルを払い、基本的な教科書も購入することになりました。

いろいろな人達の努力と協力で通信教育による高校が始まりました。生徒は公安委員会から支給された数少ない教科書を回し読みしました。教師はボランティアで報酬無しで、で夕方に学校にきて生徒を助けてました。生徒もまた教室の掃除と修理を自分たちで行いました。若い日系二世の女子が高校の事務職員として雇われ、教科書の配布、生徒のクラス分けなどの事務の仕事をしました。

高校に不備なところはありませんでしたが、とにかくも生徒は高校教育を続けブリティッシュ・コロンビア州の高校教育の標準を満たすことができました。タシミの教育環境でこの通信教育の導入はもっとも大事なものだっておもいます。教師の協力のもと生徒は英文学、文法、社会、健康、数学、科学、ラテン語、フランス語、化学を学びました。若い二世の教師は通信教育以外の機会設計図、家庭科、工芸、速記、商業などの科目を教えました。

収容所で日本語を子供に組織的に教えることは連邦政府の内閣令で禁じられていました。しかし家庭内や他の人の家で子供に日本語を教える親はいました。連邦警察官は見て見ぬ振りをしていました。

財政も施設も不十分でしたが、この高校は皆で一緒に勉強しようという意欲に満ちていました。高校開校の二年目には生徒は自分たちで校歌を作り生徒会を組織しました。生徒会は高校の勉強以外のいろいろな活動を組織しました。高校の教室はコミュニティーセンターと同じ建物にあり高校生にとって学校は社会活動の中心になりました。

158人の教師が夏の講習会を終了して秋学期の備える

ニューデンバー：4週間の厳しい教育法の基本を学ぶ講習を終了した158名の二世の教師は新学期を始めるためにそれぞれの学校のある収容所に帰って行きました。講習でこれらの教師はバンクーバーの学校から来た教師から教育方法を学びました。「準備が出来次第、講習修了証書が教師に送られる。」とヒデ・ヒョウドウが言っています。（入カナディアン新聞 1943年8月28日号）

高校の教師たち

高校の教師の多くはユナイテッド教会を通じて採用されました。これらの教師は日系人以外の大学卒で、いろいろな経験を持った人がいました。メイ・マックラ克蘭とキャサリン・グリーンバックは日本で教えた経験があり日本語を話すことが出来ました。ウィニフレッド・オーマックは科学を教えていましたが、タシミに来る前はバンクーバーの魚加工会社の研究場で働いていました。アーニー・ベストはクウェイカー信者で良心的兵役忌避者です。哲学と歴史を大学で勉強しました。1945年にタシミの高校を辞めるとまた自分の研究を続けました。ジム・ウィリアムズがアーニー・ベストの後をついでタシミで教えました。高校は正式な教師4人では人手が足りず二世の教師が生徒の指導を補強しました。

テルコ“テリー”ヒダカの高校での最初の仕事は新しく採用した教師に教え方を教えることでした。新しい教師の多くは正式な教育法の訓練を受けたことが無く、教会の日曜学校やヘースティング・パークの臨時の学校で教えたただけでした。これらの教師は高校の必修科目ではなく、速記、簿記、タイプ、工芸、裁縫、料理、家庭科の科目を受け持ちました。これらの若い二世の教師は高校の課外活動にも熱心に参加しました。たとえばミセス・イノウエはタシミ・ガール・ガイド支部を創立しました。ミス・ヤノは教会の日曜学校でピアノを弾きました。

二世の教師は一ヶ月 30 ドルの報酬をもらいました。教師の監督役は 45 ドルでした。ユナイテッド教会を通して高校の教師になった人は教会の給料である 75 ドルをもらいました。給料は高かったですが他の教師と同じ条件で生活していました。タシムの収容所が閉鎖され高校が閉校になった後も教会関係でタシミに来て教えた教師たちへの住民の感謝は続きました。

二世の教師たちにとって 1943 年と 1994 年の夏期講座の教育法の訓練はとても役立ちました。この夏期講座はバンクーバー 小学校教員養成学校の教師によって行われました。講座は集中的に行われて厳しかったですが、講義の他にいろいろな催し物があり、講義の緊張をほぐすことができました。仲間意識と教師としての責任感を共有する機会になりました。

タシミでの教育経験

「教室の左の壁際に私の机と椅子と棚を置きました。私の机の横の衝立に吊るした古びた黒板が教室の前方の印です。生徒は使い古した二人掛けの机と椅子を使いました。バンクーバーのキツラノにあった日本語学校で使っていたものと同じでした。教室の設備は敵性外国人財産保管委員会がブリティッシュ・コロンビア州沿岸の日本語学校から運んできたものでした。」

「最初の授業の日の朝の 9 時に大きな銅製のベルが鳴り響くと生徒は皆学校の入り口に整列しました。私のクラスは学校の横の入り口に並び、順序よく教室に入りました。」

「教室に入ってドアの代わりの毛布を引き下ろすと、教室は他の教室から見えなくなりました。そして最初の授業が始まりました。私は黒板にミス・ハヤカワと書いてから生徒の方を振り向き、「皆さんおはよう」と言いました。すると生徒全員が「おはようございます。ミス・ハヤカワ」と返事を返しました。」

(フランク・モリツグとゴーストタウンの教師歴史協会共著「国内追放の中での授業」トロント、2001 年からの抜粋)

収容所の学校第一年度の出来事

学校に問題がありましたか？勿論収容所の学校の第一年度はいろいろと解決しなければならない問題で一杯でした。先生の経験不足はさておいて、先生はいろいろと不備なところの多い教室を使わなければなりませんでした。

問題のある生徒、問題のある父兄、そのうえ問題のある先生までいました。収容所の学校の生徒と先生の話を読めばどんな問題があったかわかりいただけるでしょう。

小さすぎる納屋の中の学校

ヒロシ・ロージー・オクダ：タシミ小中学校の最初の校長がタシミの学校をどのように組織したかお話しします。

「バンクーバーのヘースティング・パークの仮収容所にブリティッシュ・コロンビア州沿岸から日系カナダ人が到着し始めると、公安委員会は仮収容所で仮の小中学校と高校を開校することを決めました。私は高校で数学を教えるボランティアになりました。」

「一方で私はポップフに移動する願書を出していましたが、1942年の8月にタシミ収容所で学校を組織するように依頼されました。しかしタシミの収容所はまだ建設中で、タシミには牧場の納屋とあと二、三の建物あるだけなので、わたしが直ちにアシミに行く必要はありませんでした。」

「私は強制移動の最終日の一日前の1942年10月30日にバンクーバーを出発してタシミに向かいました。タシミはまだ移動してきたばかりの人達が落ち付かず、学校を始めるのは大変でした。」

「まず初めに私は二つのことをすることにしました。教室を確保することと先生を採用することです。教室はそのときすでに独身男性の宿舎になっていた大きな納屋を教室に改造することにしました。教室はこれで確保しましたが、先生の採用なかなか進みませんでした。それでも12月末までには十分な先生の採用が終わりました。」

「納屋を教室に改造するのに予想以上の時間がかかりました。これは納屋を幾つかの教室に高さ6フィート余りの取り外し可能な衝立で区切ったためです。教室は衝立を外して集会、映画の上映、演奏会、ダンスパーティーなどに使えるようしました。」

「そうこうしているうちに副校長のテリー・ヒダカがタシミに到着しました。テリー・ヒダカは採用した教師に教育方法を教えるという大変な仕事を受け持ちました。」

「クリスマスの頃にやっと父兄に生徒の登録を受け付ける準備が整ったと知らせました。これまで児童は長い間教育の機会を奪われていました。登録の結果ブリティッシュ・コロンビア州沿岸地方の60の学校に通っていたグレード1（小学校1年の相当）からグレード8（中学校2年に相当）までの生徒700名が学校に入学することがわかりました。」

「納屋を改造した学校は700名の生徒を収容できず、グレード8の生徒は学校の前の道の向かいにある別校舎の移りました。」

「学校の始業式は教室の衝立を取り払った大きな部屋で行われ、600名の生徒と来賓が出席しました。しかしこのもとは納屋だった部屋は生徒を長くとどめておくにはとても寒く、始業式は短く済ませました。」

オクダさんはバンクーバーのミセス・ブースに次のような手紙を送っています

「1943年1月18日月曜日に学校の始業式をしました。生徒全員が出席して会場は満員になりました。とても寒い日でブリティッシュ・コロンビア州保安委員会委員長代理のデブリセイ氏と相談して、授業はこの寒波が終わるか、または学校の暖房設備が十分に稼働するまで延期すると生徒に伝えました。」

「始業式の日温度は摂氏マイナス18度でした。私が手紙を書いている今日（1月22日）でもまだとても寒く火曜日の夜には摂氏マイナス29度まで下がりました。暖房設備が稼働していても授業の出来るような天気ではありませんでした。」

「そのうえ火曜日から水曜日にかけて雪が激しく降り、学校に暖房用の燃料の補給が出来ませんでした。。暖房用のパイプも氷結してしまいました。学校に暖房が通るまでには大分時間がかかるそうです。」

これと同じ週にデブリセイ氏はミセス・ブースに次のような手紙を書いています。

「学校は1月18日に始業式をして600名の生徒とそのた来賓が集まりましたが、会場は摂氏マイナス18度ととても寒く、生徒に短く挨拶をただけで始業式を終了することにしました。」

「生徒には天気が暖くなるまで授業は行わないと伝えました。校舎の中がどんなに寒いかあなたにはわからないとおもいます。ここにきて実感してください、と言いたいころですが寒すぎます。ここには来ないようにお勧めします。」

授業の延期で父兄、教師、生徒は大変がっかりしました。生徒は強制移動で半年間も学校に行けなかったのに、タシミでやっと学校の始業式に出席すると直ぐに家に帰ることになりました。そのうえ父兄には教室で授業ができるような条件が整うまで生徒は学校に来ないようにと伝えなければなりませんでした。

タシミの学校は1月26日火曜日にグレード1から4まで、1月27日にグレード5は27日水曜日から8日から9日遅れて始まりました。しかし最初の数週間は全部のグレードで授業は半日だけでした。この間も教室の改造が行われていました。

25のクラスの騒音の中での授業

強制収容所の学校の中で一番大きいタシミの学校の最初の校長だったヒロシ・オクダの1943年1月の開校の頃の思い出

「生徒の登録は1942年のクリスマスの頃に行いありませんでした。グレード1から8までで700名以上が登録しました。父兄との集会で私はすでに一学年の半分以上が経過しているので、授業は強制移動の前の学年に戻って行く、授業についていけない生徒は下のグレードに移動させると説明しました。」

「タシミの町は一本の大通りと10の通りに分かれていました。そして生徒の問題はそれぞれの通りを単位にしてその通りの代表者と学校で話し合うことにしました。

幾つか通りの代表者が、生徒が下のグレードに移動させられたが考え直してくれないかと‘要請してきました。しかし私ははっきりと断りました。生徒を下のグレードに移すと決めたのは現場の教師の判断だったからです。下のグレードに移った生徒はグレード2から5が大部分でした。」

学校の25のクラスの授業は取り外し可能な衝立で区切られただけの教室で行われました。25のクラスで行われる授業の音声が一緒に反響してとても大きな騒音になりました。しかしこんな教育環境の中でも教師と生徒はしっかりと授業を行いました。

マサハル・モリツグ会長をはじめとして父兄会は一団となって学校を支援しました。父兄だけでなくタシミの町をあげて学校を助けてました。それで教師の仕事がやりやすくなりました。

ブリティッシュ・コロンビア保安委員会はそれぞれの学年に限られた数の教科書しか配布しませんでした。そのため同じグレードの生徒が全員教科書を使えるようにと、同じグレードの生徒を幾つかのクラスに分けて、それぞれのクラスが違う時間に授業をして教科書を交代で使えるようにしました。例えばグレード1は4か5のクラスがあったと思います。

教科書の数が大変少なく貴重なので、教科書は授業の後に学校で保管しました。このため生徒は宿題を家でするのに教科書が使えませんでした。父兄会は父兄から寄付を募り教科書を買ひ、生徒が家で宿題を出来るようにしました。タシミの住民で働いていた人はその乏しい給料の中から学校に寄付をしました。」

教室のドアは毛布

教師の一人だったシズ・ハヤカワの思い出

「初めてタシミに来たときに見た古い納屋がこんな立派な学校に変身するとは誰も思っていなかったです。納屋の二階を教室に改造するためにどれだけたくさんの人手が必要だったのでしょうか。多

様目的ホールはタシミの住人2000人がいろいろな用途に使えるように設計されました。納屋の改造の終わった部分はDビルディングと呼ばれ、この二階のホールに行くために3つの階段がありました。ホールの両端の一つずつと大通りに面した建物の横にもう一つありました。一週間に5日、このホールが学校になりました。」

「月曜日になると週末に音楽会、映画会、ダンスパーティーに使われたホールは急いでたくさんの教室になるように6フィートの高さの衝立で区切られました。そしてそれぞれの教室は一方だけは衝立が無く出入口になりました。両側の教室の列の真ん中に廊下がホールの端から端までありました。Dビルディングの一つの角に校長室が作られました。この部屋は教師達の部屋と備品室も兼ねていました。部屋の真ん中に長いテーブルが一つと幾つかの椅子がありました。部屋の二つの壁には作り付けの本棚があり、教科書と紙の備品が入れてありました。古い手動のレミントンタイプライターとヘクトグラフコピー機もありました。このコピー機を使うと手と指が紫色に染まりました。」

「1942年の秋、学校の呼びかけに答えて私達は教師のボランティアをしました。ヒロシ・オクダ校長のもとに集まった教師は誰も教師経験の無いボランティアでした。学校が始まるのに備えて私達教師は厚い緑色の教科内容書を渡されました。私はグレード5の担当になりました。生徒の名簿に知っている名前を三つ見つけました。トシオ・アダチとケイジ・ナガミは私達一家の知り合いの子供です。マサコ・カミオは私の兄弟の柔道の先生の娘さんです。それで私は全く知らない生徒だけの教室に行くことはなくなりました。」

「メイ・イナタとサディー・サクマそれと私の三人がグレード5の三つのクラスを担当しました。二人とは強制移動前にバンクーバーで知っていたので三人で密接に連絡を取って教えるのが楽でした。まず最初にしたことは毎日の教科の時間割を作ることです。限られた数の教科書を使って授業をするので時間割の作成には苦労しました。」

「先生の一般的な服装はカーディガンのブラウス、膝上の長さのスカート、踝までの靴下とサドル靴でした。私が最初の授業をした日の服装はこのとおりでした。私は髪は短く切り真っ直ぐでしたが左に分けて耳のうしろでポビーで留めていました。最初の授業の日は少し早めに学校に行き、同僚と励まし合ってから教室に向かいました。」

「教室の入り口にはドアがありませんでした。その代わりにブリティッシュ・コロンビア州保安委員会から支給された薄鼠色の毛布が吊るしてありました。外側の壁の下に窓がありました。窓から光が差し込むので教室が暗かったという印象はありませんが、光源はこの窓と教室の真ん中に天井から吊り下げられた裸電球だけでした。」

「教室の左に私の机と椅子と棚を置きました。私の机の横の衝立に吊るした古びた黒板が教室の前方の印です。生徒は使い古した二人掛けの机と椅子を使いました。バンクーバーのキツラノにあっ

た日本語学校で使っていたものと同じでした。教室の設備は敵性外国人の財産保管委員会がブリティッシュ・コロンビア州沿岸の日本語学校から運んできたものでした。」

「最初の授業の日は朝の9時に大きな銅製のベルが鳴り響き、生徒は皆学校の入り口に整列しました。私のクラスは学校の横の入り口に並び、順序よく教室に入りました。教室に入ってドアの代わりの毛布を引き下ろすと、教室は他の教室から独立した空間になりました。そして最初の授業が始まりました。私は黒板にミス・ハヤカワと書いてから生徒の方を振り向き、「皆さんおはよう」と言いました。すると生徒全員が「おはようございます。ミス・ハヤカワ」と返事をしました。」

「私のクラスは10才と11才の女子10人、男子15人でした。ただ、一人だけ14才の背が高いのに目立たない男子がいました。生徒の多くは私と同じか私より大きい体格をしていて背丈も私より高く、私は少し不安な気持ちになりました。出席を取った後に紙と鉛筆を配り、生徒に暗唱するための主の祈りを書き写させました。生徒は時間割も書き写しました。」

「私は生徒に学校では英語だけを話すように言いました。誰かが忍び笑いをしました。私達は皆戦争中の収容所にいる日系人ですから、この規則が不思議だと思ったのでしょうか。最初の授業の日に教室で他の教室の声がよく聞こえてしまうことがわかりました。教室は上が開いた衝立で仕切られていただけだったからです。私はもともと声が大きいので、教室で大きな声で話さないように注意をしました。」

教会からの援助

ウィニフィールド・マクブライドはタシミの高校で教えるためにタシミに引っ越してきた教師の一人です。これは1942年から1946年までタシミでカナダユナイテッド教会がどのように高校の授業をしたかというマクブライドさんの話しです。

「タシミの父兄がタシミで働いていたカナダユナイテッド教会のマックウィリアムズ牧師の所に行き、私達の子供に高校が必要です。高校に行けないと将来単純労働者になってしまいます。教会に何とか助けてもらえませんか、と頼みました。マクブライド牧師はメイ・マックラクランがグリプスホルム号で日本から引き上げてきたカナダ人の一団と一緒に前年にカナダに帰ってきたことを知っていました。講演旅行のあとにマックラクランさんはニューヨークのユニオン神学校に旅立ちました。」

「メイ・マックラクランは日本の田舎のカナダユナイテッド教会で長年仕事をしていました。太平洋戦争勃発後も日本に残り、一年間自宅に監禁されていました。マクブライド牧師はメイ・マックラクランに電話をしてタシミに来てくれるように頼みました。メイ・マックラクランはすぐさま快諾しました。メイ・マックラクランは1943年1月にタシミに到着しました。マクブライド牧師とメイ・マックラクランは高校生が通信教育で勉強する手助けをしました。後にマクブライド婦人も加わりました。」

「ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会はタシミに高校を作ることに反対でした。委員会は父兄と教会が高校のための建物を建てることを拒否しました。そのため小中学校が使っていた建物を小中学校の授業が終わってから高校の授業に使いました。」

「メイ・マックラクランは私に、1943年9月に学校が始まる前に何日も夜に生徒に教えるためにフランス語を勉強した、といました。するとある日マクブライド牧師が来て、フランス語を教える人が見つかったよ、といました。」

「このフランス語の先生はアーニー・ベストでした。メイ・マックラクランは私に、アーニー・ベストと一緒に生徒を教えられてとても助かった、といました。高校が学校の体裁を整えてきたのはこの頃だったと思います。校歌をつくり、生徒会も出来ました。生徒会は授業以外のいろいろな活動を組織しました。週一回の音楽鑑賞、スポーツ、レクリエーション、年一回のダンスパーティーなどです。」

「私、ウィニフィールド・マクブライド、は高校開校二年目の1944年に高校の教師になりました。私は1940年にブリティッシュ・コロンビア大学で農業、特に植物病理学を専攻して卒業しました。卒業後、父親を助けて温室の管理をし、またバンクーバーの「カナダ漁業会社」で魚から油を取る研究をしました。」

「マクブライドは学生キリスト教運動からタシミで教師を募集していることを知り、二週間の休暇を利用してタシミを訪問しました。そこで教師をしていたヘレン・マクウィリアムズ（マクウィリアム牧師の娘）とアーニー・ベストにアシミに来て高校で科学を教えてくれるように頼まれました。グレード9には90名の生徒がいましたが、科学を教える教師はいませんでした。私は誰か科学を教える資格を持つ人を雇えばいい、といましたが、誰もこんな辺鄙な所に来ません、といわれました。私は教師としての訓練を受けたこともなく、また教えたこともありませんでした。しかし私は人は皆兄弟と信じていましたから、タシミの学校で教えることに挑戦しようとおもいました。」

1944年の9月、ウィニフィールド・マクブライドがタシミの高校で教え始めた時、高校には175名から180名に生徒がいました。グレード9が90名、グレード10が40名、グレード11が30名、グレード12が15名から20名でした。

タシミの声

「インスタント教師になるのは易しいことではありませんでした。私は最初にグレード1の担当になりました。後から分かったことですがグレード1の担当はグレード3や4よりもっと難しかったです。教材書不足なので毎晩翌日の授業のための教材を自分で用意しました。絵を書くのには新聞紙を使い、生徒の練習問題の作成にはジェラチン謄写版を使用しました。何枚か印刷するともう文字

がぼやけてしまいました。私はタシミで小学校の全部のグレードを教えました。そして夜は高校の通信教育を教えました。高校の通信教育は教会の牧師が先生になって始めました。」

「公安委員会がタシミの小学校を正式に認めるようになってやっと正規の教科書と教科指導備品が学校に来るようになりました。夏には全部の収容所の教師がニューデンバーに集まって教育法の講習を受けました。講師はバンクーバー 小学校教員養成学校の教師でした。」（マリエ・カツノ）

タシミの先生

メイ・マックラクランがタシミの高校の校長で教師も兼ねていました。メイ・マックラクランとキャサリン・グリーンバックは日本にいましたが戦争が始まると1942年の8月にカナダに帰国しました。二人は日本に抑留されていましたがカナダに居た日本人との交換でカナダに帰りました。

タシミ高校の教師たち

アニー・メイ・マックラクラン

アニー・メイ・マックラクランはタシミ高校の教師で校長でした。マックラクランはもうひとりの教師キャサリン・グリーンバックと同様に太平洋戦争が始まったときに日本にいました。そして二人とも1942年8月のカナダ・日本在留者交換プログラムでカナダに帰ってきました。

マックラクランは1895年11月3日にマニトバ州パイプストーン生まれ、1917年にマニトバ州ブランドン・カレッジで学士号を取り、パイプストーン中学校の校長になりました。その後、マニトバ州のバーデン校で1922年まで歴史を教えました。1922年にトロントのユナイテッド協会牧師訓練校に入り、1924年に訓練を終わると日本の女性宣教師協会に送られました。東京で日本語を勉強してから教師と宣教師の二つの仕事をしました。静岡と甲府の私立高で教えました。戦争が始まると静岡市で自宅監禁され1942年にカナダに戻りました。

マックラクランはタシミの収容所で戦争が終わるまで高校の教師をしました。戦争が終わると日本に戻り静岡英和女子学園で教えました。1952年頃からは榛原の教会で働きました。マックラクランの働きで榛原の教会は知的障害者の施設「やまぼと」を支援することが出来ました。

1963年にマックラクランは日本での仕事を引退してカナダに戻りました。そしてブリティッシュ・コロンビア州チリワックのスーワージーカナダ原住民地区で働き始めました。ここでの仕事で特筆すべきものは原住民のための教育と医療、栄養の改善プロジェクトを始めたことです。

マックラクランは1987年に母校のブランドン大学からすぐれた社会貢献をしたとして表彰されました。また1992年6月に、すでに亡くなっていましたが、日本政府から受勲しました。マックラクランは1991年10月13日にチリワックの自宅で亡くなりました。

(カナダユナイテッド教会ブリティッシュ・コロンビア州大会から)

キャサリーン・グリーンバック

キャサリーン・グリーンバックはタシミ高校の教師、校長でした。アニー・メイ・マックラクランと同様に日本から 1943 年に在留外国人交換でカナダに帰ってきました。

アーネスト・エドウィン・ベストとヘレン・ベスト

アーネストはタシミ高校で生徒から尊敬されていたフランス語の教師でした。良心的兵役拒否者でした。兵役の代わりにタシミ高校で教えました。アーネストはヘレン・セリーナ・マックウィリアムズ（ウィルバート・ロイ・マックウィリアムズの娘）と 1945 年 9 月 1 日にタシミで結婚しました。

ウィルフレッド（マックブライド）オーマック

ウィルフレッド（マックブライド）オーマックは 1918 年頃米国イリノイ州デピューで生まれました。スコットランド生まれのウィルフレッドの父は金属学の専門家で米国に移住するまでメキシコで働いていました。イリノイ州で数年過ごした後、ブリティッシュ・コロンビア州に引っ越ししました。ビクトリアで一年働いたあとでレディースミスの精錬所に行きました。大恐慌になると仕事を失いましたが精錬所の機械の補修と鉱石の試験を続けました。

ウィルフレッドの父はウィルフレッドが大学に行くのを望んでいましたが、学費を払う余裕は無く、ウィルフレッドは大学のクラスで最高の成績を取って翌年度の奨学金を獲得して学業を続けました。1940 年にブリティッシュ・コロンビア大学で植物病理学を専攻して農業学学士号を取りました。専門分野の仕事を探しましたが女性ということで仕事が無く、やむなくバンクーバーのデパートに花をおろす農園で働きました。1941 年 10 月にバンクーバーのカナディアン・フィッシング・カンパニーの研究所で魚からとれる油のビタミン A 成分を分析する仕事に着きました。

大学在学中にブリティッシュ・コロンビア大学学生キリスト教運動に参加して 1942 年と 1943 年のキャンプに参加しました。ここでジョー・オーマックという農業専攻の学生に会い、後に結婚しました。ジョー・オーマックは良心兵役拒否者で兵役の代わりに山で森林管理事務所の仕事をしていました。このキャンプでやはり良心兵役拒否者で森林管理事務所の仕事をしていたアーネスト・ベストと出会いました。

1942 年秋にウィルバート・ロイ・マックウィリアムズ牧師はタシミのユナイテッド教会の牧師をしていましたが、教会の信者から高校をつくるのを手伝って欲しいと頼まれました。牧師はカナダユナイテッド教会の支援を得て高校をつくることに成功しました。高校の教師も見つけました。森林

管理事務所で兵役の代わりに働いていた三人の若い男子を森林管理事務所の仕事からタシミの高校の教師の仕事に換えることができました。このうちの一人がアーニー・ベストでした。

ジョー・アーマックは 1943 年秋にブリティッシュ・コロンビア大学に戻り、この学期が終了するとタシミに来て物理学をグレード 9 の生徒に教えました。アーマックはのちに、この高校の仕事が一番面白い仕事だったと語っています。

1944 年の夏、ウィルフレッドはホープ町の近くのシックスマイルに引っ越して、タシミのユナイテッド教会のメイ・マックラーチアンが組織した女子のためのキャンプのリーダーになりました。ここは樹木採伐キャンプのあったところで、テント村とログハウスがありました。ログハウスには台所、食堂、集会場がありました。

同じ夏、ヘレン・マックウィリアムズ（マックウィリアムズ牧師の娘）とアーニー・ベストがキャンプを訪れ、ウィニフレッドに高校で科学を教えてくれないかと頼みました。ウィニフレッドは教えた経験はありませんでしたが、「人類愛を信じる私にこの依頼を断ることが出来ない。」と言って依頼を承諾しました。ウィニフレッドは勤労感謝祭の週末に手に入る限りの科学の本をまとめてタシミ高校に来ました。

タシミ高校はユナイテッド教会の支援で 1943 年 1 月に開校しました。ウィニフレッドはが教え始めた 1944 年秋にはグレード 9 が 90 人、グレード 10 が 40 人、グレード 11 が 30 人、グレード 12 が 15 人から 20 人の生徒がいました。教師はウィニフレッド、メイ・マックラーチアン（ブリティッシュ・コロンビア公安委員会のダグ・サウンダーズと一緒に高校を始めました）、キャサリン・グリーンバック（1944 年から 1946 年までの校長）、ジム・ウィリアムズ（アーニー・ベストが大学に戻った後の後任）の 4 人でした。

ウィニフレッドは科学と衛生の総ての授業とグレード 9 の数学、それにグレード 10 の数学の授業の一つを教えました。ウィニフレッドによれば最初のうちは生徒が教師に注意を払わず教室の規律を守らせるのが大変だったそうです。生徒にどうして授業にもっと集中しないかと聞くと、生徒は次のようにいったそうです。教室の設備が悪くて教師の話すことが聞きづらい、授業で使う科学用語を理解出来ない、二人掛けの机ではどうしても隣の生徒と話してしまう、です。ウィニフレッドが生徒の苦情に対処することで問題は解決しました。

ウィニフレッドの宗教的信条はゆっくりと時間をかけて確かなものになりました。12才の時に日曜学校の先生が聖書の中の奇跡は本当だと言いました。ウィニフレッドは科学的な思考をしたので、先生の言うことを信じるのが難しかったです。ウィニフレッドは誰かが人間が良くなるようにと願って新約聖書を書いたと解釈しました。ウィニフレッドがタシミに来た頃には、おぼろげに人間よりもっと偉大な力をもったものが宇宙に存在すると思うようになっていましたが、神学的にこのことを捉えていたわけではありませんでした。

タシミでは高校関係者は一緒に食事をし、哲学的な書物と聖書を読み、祈りました。ウィニフレッドは最初はこれに反抗しましたが、次第に祈りは心に安らぎと喜びをもたらし皆の心を一つにすると思うようになりました。

1946年にウィニフレッドはトロントに行き、ユナイテッド教会の女子宣教師教会に参加しました。そして翌年、モントリオールのセイント・コロンバ・ハウス（教会とコミュニティーセンターが一体化したもの）にある女子宣教師協会に参加しました。

1948年ウィニフレッドはブリティッシュ・コロンビア州ゴールドデンにジョー・オーマックを訪ねました。オーマックは名前の知られた農業指導員でした。そして1948年10月30日にクエーカー教徒の儀式で結婚しました。二人は6人の子供をもうけ、ブリティッシュ・コロンビア州クランブルックで20年生活しました。二人は1967年にジョーがバンクーバー島のヘーゼルトン近くに原住民博物館と訓練センターを設立するプロジェクトの監督をするためにビクトリアに移りました。

1993年にウィニフレッドは「タシミ、日系カナダ人収容所、1942年から1946年」を出版しました。この本には収容所、高校、ユナイテッド協会がタシミの若者に及ぼした影響が書かれています。

フランシス・ベール・ホーキンス

フランシス・ベール・ホーキンスはタシミの幼稚園で教えていたカナダ・アングリカン教会の宣教師の一人でした。

ホーキンスは1891年10月6日にオンタリオ州ミーフォード生まれ、ミーフォード高校を卒業するとトロントのアングリカン女子訓練学校の入り、1920年に女子司祭助士として卒業しました。すぐに日本に行き豊橋、名古屋、岡谷で幼稚園教育の仕事をしました。休暇の年にトロントに戻りトロント小学校教員養成学校で幼稚園教育の学士号を1926年に取り、また名古屋に戻りました。

1940年1月に日本の柳城幼稚園教師養成学校の校長になりました。同年、シンジ・サカイ司祭はホーキンスに戦争が始まる前にカナダに避難するように命じました。ホーキンス日本の幼稚園児と児童の教育を続けるために、カナダに避難することを拒否していましたが、1941年4月にオンタリオ州ハミルトンの戻りました。

カナダに戻るとすぐにブリティッシュ・コロンビア州の日系カナダ人のための仕事をしたいと申し出て、バンクーバー島のポートアルバーニに派遣されました。そこで日系カナダ人がバンクーバーのヘースティング・パークの仮収容所、ついでは他の収容所に送られるのを目撃しました。ホーキンスは日系カナダ人の後を追ってヘースティング・パーク、そしてタシミに来ました。タシミでは

幼稚園を創立するのを手伝い、幼稚園で教えました。タシミ収容所が1946年7月に閉鎖されるとハミルトンに戻りました。

1947年に日本に戻り、1948年4月に柳城幼稚園教師養成学校の第三代校長に任命されました。そして1953年に名古屋柳城短期大学の第一代校長に任命されました。1961年6月、70才の時に校長を引退してハミルトンに戻りました。

1972年にカナダ・アングリカン協会女子補助会は協会関係の女子のカナダと海外における活動の調査をしました。ホーキンスは日本とカナダで行った活動について報告しました。

タシミの生活についてのホーキンスの著述

「日本から戻ってくるとすぐにミス・ホロビンと一緒にブリティッシュ・コロンビア州ポートアルバーニに日系カナダ人のために働くように派遣されました。日本軍のパールハーバー攻撃の後に日系カナダ人にとって友達は私達しかいませんでした。日系カナダ人男子はブリティッシュ・コロンビア州内陸の工事現場に強制移動させられました。私達は残された女子と子供がバンクーバーのヘースティング・パークの仮収容所に行くまで一緒にいました。私達はヘースティング・パークで幼稚園と教会の日曜の集会を開きました。そして日系カナダ人がヘースティング・パークから内陸の収容所に送られたときも一緒について行きました。ミス・ウオーカー、ミス・ベイリーと私はバンクーバーから一番近い収容所のタシミに行きました。最初のうちは私達の監督者のW.H.ゲイル牧師と一緒にバンクーバーからタシミに通いましたが、すぐにタシミの中に宿舎と幼稚園、教会のための建物がありました。私はタシミに4年半いました。」

ホーキンスは1978年11月26日にオンタリオ州ハミルトンで亡くなりました。

このホーキンスの生い立ちについては名古屋のジュンコ・ハカネさんに感謝いたします。

教室と備品

タシミには学校の校舎はありませんでした。以前牛舎だったDビルディングの二階が教室でした。二階は高さ3メートルの衝立で7.6メートル四方の教室に区切られました。この教室で17人の児童が勉強しました。2階には一つだけ部屋があり、ここが校長室、教師の共同の部屋、備品置き場を兼ねていました。授業は月曜から木曜は午前9時半から午後9時半まで、金曜は午前9時半から午後3時半まででした。二階はたくさんの教室で一度に授業をするので他の教室の音も聞こえて大変でした。

週末には二階の教室の半分の衝立を取り外してホールにしてタシミの住民の集会や体育場などの使いました。ここがタシミで一番大きな集会場でした。

A ビルディングは以前は羊小屋でしたが、ここも区切られて教室になりました。4.6メートル四方の小さな教室でグレード8の児童が授業をしました。ここも週末には衝立を取り外して小さな集会や催し物、教会、結婚式場に使われました。

小学校は月曜から金曜まで普通の小学校の時間割で授業をしました。高校は自分たちの教室を作る資金が無かったので小学校と同じ施設を使いました。そのため授業は午後3時半から5時半と6時半から8時50分までの二回行われました。高校生の多くは昼間は事務所、店、病院、金属加工場などで働き、仕事が終わってから学校にきました。夕方遅くまで働く生徒のために教師は午後9時半以降も残って生徒が必要な学習をするのを手伝いました。

1944-45年度には薪小屋を改造して小学校用の教室を8つ作り低学年の授業に使いました。

収容所の学校は資金不足のために生徒は限られた教科者と備品しかなく、それらを有効に使わざるを得ませんでした。オクダ校長はバンクーバーで机を購入しました。二人の生徒と一緒にベンチに座り30センチx81センチの表面のある机と一緒に使いました。教科書も不足していましたが新しい本を買う資金がありませんでした。生徒は自分の教科書を家から持ってきて他の生徒と一緒に使うこともありました。高校生もおなじような状態でしたが、ブリティッシュ・コロンビア州の高校生の試験のためのワークシートをユナイテッド教会が資金を出して生徒全員に購入しました。このワークシートを使って自分で勉強することが、教師不足の高校生が試験勉強をするために必要でした。その後父兄会が資金を集めて不足している教科書を買うことが出来ました。

タシミの急造の高校は普通の高校のような備品を持っていませんでした。授業は通信教育の教材をつかいましたが化学や生物のような実験を必要とする科目では備品不足が問題になりました。生徒は家にあるもので代用しました。教師だったオーマックさんは思い出の中で次のように言っています。「私は以前バンクーバーで働いていた魚加工工場に頼んで魚をタシミに送ってもらい生物の教材に使いました。教材に使ったあとの魚は料理して皆で食べました。高校の教師は自分の裁量で新しいことを授業の導入出来たので、普通の高校生のように教科書だけに頼った勉強をしていたわけではありませんでした。」

学校の課外活動

生徒は週末は学校の課外活動で忙しくしていました。課外活動は卒業単位とはなりませんが、生徒たちの毎日を楽しめるものになりました。課外活動には教会での礼拝と社交の二種類がありました。毎週土曜日には音楽鑑賞がありました。教室の衝立を取り払った大きな会場でタシミに一つしかなかった蓄音機で音楽を聞きました。最初に教師が古典音楽曲の聞き所と歴史を説明してからレコードを聞いて、その後でそのレコードについて皆で話し合いました。次に生徒にポップ音楽のレコードを選ばせました。オーマック先生は生徒にレコードの音楽に合わせてダンスをすることを教えまし

た。これらの生徒の中にはタシミの生活が終わってからもずっと同じパートナーとダンスを続けた人もいます。

教会の日曜学校も若い人たちに人気がありました。高校の教師に採用された人達は全員アングリカン教会かユナイテッド教会の属していました。そしてこのことはタシミの高校教育に影響を及ぼしました。

学校の課外活動はタシミの日常生活のいろいろなところにその影響が出ていました。スポーツ、ダンス、戸外活動、ボーイスカウト、そして仕事まで学校生活と関連していました。高校生はタシミ青年会を組織しました。高校生の多くは昼間働き、夜に学校に来ました。仕事が遅くまで終わらないときは、教師は授業の終了時間を延長して遅い生徒を待ち、生徒の学業が遅れないようにしました。タシミの若者たちはタシミのいろいろな催し物を企画しました。サディ・ホーキンス・ダンスがその一例です。これら高校生の活躍は学年年報にも書かれています。学年年報は 1943 学年度から始まりそれぞれの学年で制作しました。年報を読むとタシミの学校と生徒が何をしていたかがよく分かります。

タシミの高校生は課外活動で外の世界の眼を向けるだけでなく、教師の努力のお陰で質の高い教育を受けることが出来ました。タシミ収容所の生活が終わり生徒が普通の高校に行くようになった時に生徒は問題なくそれぞれの学年に復帰することが出来ました。タシミの高校で会得した勉強の方法はその後の学校生活のみならず生徒の人生でも実を結びました。

タシミの高校が高校年報協議会で賞を獲得

ジェームズ・シノ編集のタシミ通信教育高校の年報「タシミ・リーシー」がブリティッシュ・コロンビア州の高校年報協議会で最も良い年報と評価され、バンクーバー・デイリー・プロビンス新聞社の「州の盾」賞を受賞しました。審査員の評には「大きくページ数を割いた文芸作品には通信教育で夜間に勉強をしている生徒の真摯な姿がよく描かれている。写真も去年より良い。学校での出来事も良く記述されている。」と書かれています。（ニューカナディアン新聞、1945年10月8日）

その他の引用

ゴーストタウンに設立された学校が 1942 年または 1943 年に始まった時に、教師の中に正式な教育方法の訓練の経験を持つものは誰もいませんでした。教師の中には日曜学校やカナダ女子訓練会での経験を下に学校で教え始めた人もいました。また中にはヘースティング・パークの臨時学校で 1942 年の春と夏に教えたことが唯一の経験だった人もいました。

（フランク・モリツグとゴーストタウン教師歴史教会著、「国内追放者への教育」トロント、2001年からの抜粋）

ブリティシュ・コロンビア州沿岸地域から強制移動させられた2万2千人の日系カナダ人のうち約半数の人達はブリティシュ・コロンビア州内陸部の収容施設に行くことを選びました。この人達の中に約3千人の義務教育年齢児童がいました。

結局、約250名の日系二世がブリティシュ・コロンビア州の8の収容所でブリティシュ・コロンビア州公安委員会によって管理されていた学校で教えました。

ゴーストタウンにある収容所で1942年または1943年に学校が開いた時には教師で教えた経験のある人は一人もいませんでした。ある教師は以前教会の日曜学校で教えた経験やカナダ女子訓練学校の経験をもとに教え始めました。またヘースティング・パークの仮収容所で二世の子どもたちに教えた経験を持っていた人もいました。

バルハーバー攻撃の時までにヒデ・ヒョウドウはブリティシュ・コロンビア州の教育制度のもとで16年の教職経験を持っていました。当時ヒョウドウだけが、日系カナダ人はブリティシュ・コロンビア州の小中学校で教えるはならない、という暗黙の規則を突き破った唯一の日系カナダ人教師でした。太平洋戦争が始まった1941年12月にはヒョウドウはスティーブストンのロード・バイロン学校で教えていました。1942年初めにヒョウドウはヘースティング・パークの臨時学校の校長および管理者に任命されました。

ヘースティング・パークの臨時学校の経験がブリティシュ・コロンビア州の収容所で学校を開校する上でとても役に立ちました。その一つは収容所の監理管が若い日系人を学校の教師に雇用することを許可したことでした。そしてもっと大切なことはヘースティング・パークの臨時学校をモデルにしたブリティシュ・コロンビア州公安委員会方式の学校様式を収容所の学校に採用したことでした。

1942年10月23日、ヒデ・ヒョウドウはバンクーバーから内陸の収容所に日系カナダ人を運ぶ最後の汽車に乗りました。まずタシミに立ち寄り、学校を立ち上げる世話をしてから10月28日にスローキャン地方に向かい1942年10月末にニューデンバーに到着しました。ここでヒデ・ヒョウドウはブリティシュ・コロンビア州内部の収容所の学校の管理をしました。

ニューデンバーはスローキャンバレーの幾つかの収容所（ニューデンバー、ポポフ、ベイファーム、サンドン、キャスロー、ローズベリー、レモンクリーク）のほぼ真ん中にあり、これらの収容所の学校の管理に都合が良かったからです。タシミ収容所だけが西に300マイル離れていました。

タシミではヒロシ・ロージー・オクダが学校の初代校長になりました。オクダはヘースティング・パークの仮の高校で数学を教えていました。タシミの小中学校の校長に任命され1942年1月タシミに到着すると、オクダはまず学校に適当な建物を探し先生の雇用を始めました。Dビルディングと呼ばれた納屋を改造して学校にしました。そして1942年12月までに教師の採用を完了し

ました。Dビルディングの二階を高さ6フィート余りの衝立で区切り教室にしました。週末には衝立を取り外して集会所、映画館、ダンスホールなどに使いました。テリー・ヒダカがインスタント教師の教育にあたりました。生徒の登録を始めて見るとグレード1から8までで700人の生徒がいることがわかりました。納屋の二階の教室だけでは足りず、グレード8の生徒は納屋のある道の向かいの独身者のためのアパートに付属した建物を教室にしました。1943年1月に始業式をしましたが厳しい寒さがきたので暖房装置が修理されるまで授業を延期しました。結局グレード1から4は1月26日に、グレード5から8は1月27日に授業が始まりました。しかし学校の建物の改修工事が終わるまで授業は半日だけでした。

Dビルディングでの授業にはいろいろと問題がありました。納屋の二階を衝立で区切っただけの25の教室は総ての教室の音が筒抜けで騒音になりました。教科書が足りず、生徒は教科書を遺影の持ちかいいませんでした。まもなく募金活動で足りない教科書を買う資金を集めました。月曜日には週末に演奏会や映画界に使われた学校をまた衝立で区切って教室をつくりました。かく教室の一面は衝立が無く入り口になりました。授業中はここに毛布を吊るして入り口を閉じました。生徒の机は二人がけでバンクーバーで買って来ました。Dビルディングの二階の片隅を釘て校長室、教師の部屋、備品室に併用しました。

高校教育は小中学校教育とはだいぶ異なった方法で行われました。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会は小中学校教育だけに責任を担いました。高校教育は通信教育が元になりました。しかし実際の教育方法は収容所ごとに異なっていました。タシミではユナイテッド教会とW.R.マックウィリアムズ牧師が高校教育を推進する中心になりました。牧師は日本の地方で長年過ごしたメイ・マックラーチアンを高校の教師に採用しました。マックラクランは1942年7月にカナダ人・日本人交換船でカナダに帰ってきました。ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が高校の建物を建てることを拒否したので、小中学校の教室を授業の終了した後に使いました。マックウィリアムズ牧師はアーニー・ベストをフランス語教師として採用しました。1944年9月にウィニフレッド・オーマックが教師陣に加わりました。オーマックは教師経験はありませんでしたが農業学の学位を持ち、ほかの教師の手助けをすることに興味を持っていました。

1943-44年学期に高校に生徒会と校歌ができました。生徒会は音楽鑑賞、スポーツ、レクリエーション、学校年報などを企画しました。

1944年9月にタシミ高校には175名から180名の生徒が在学していました。グレード9が90名、グレード10が40名、グレード11が30名、グレード12が15名から20名でした。

1943-33学期にタシミ小中学校には634名の生徒と29名の教師がいました。これはブリティッシュ・コロンビア州内の収容所の学校で最大でした。

タシミ小中学校の校長はヒロシ・ロージー・オクダ（1942－43年）、テリー・ヒダカ（1943－44年）、ミア・オカムラ（1944－45年）、カヨウ・オチアイ（1945－46年）でした。

1943年と1944年の夏にタシミ小中学校の教師は他の収容所の教師とともに教育訓練夏期学校に参加しました。この夏期学校で教師は教室でとても役立つ勉強をして自信を深めました。

全体として見るとこの急造の学校は成功しました。収容所の学校の生徒は収容所生活が終了すると平常の学校に問題なく戻りその後も望むことを達成した人生を送りました。

太平洋戦争の日系カナダ人収容所での児童の教育：タシミの高校

日系カナダ人が敵性外国人と認定されると、日系カナダ人には戦時特別法が適用されるようになり連邦政府の管理の対象となりました。その結果、州政府は日系カナダ人の児童を教育することを拒否しました。そのため連邦政府がグレード1から8までの児童の教育のための教師と教育備品の資金を提供しました。1943年1月になってやっとユナイテッド教会女子宣教師会が組織してタシミで高校教育を生徒が受けられる機会が生まれました。

ポール・カーシュマン著「第二次世界中の収容所の日系カナダ人の教育、タシミ高校、1942年から1946年まで」からの抜粋

日系カナダ人が敵性外国人と認定されると戦時特別法が適用され、日系カナダ人はカナダ連邦政府の責任となりました。結果として州政府は日系カナダ人の指定に教育を施すことを拒否しました。しかし連邦政府はグレード1から8までの生徒に教師と教科書を提供しただけでした。1943年1月、ユナイテッド教会の女子宣教師会が初めて日系カナダ人の高校生のための高校教育を組織しました。アングリカン教会は児童120名の幼稚園を運営しました。この幼稚園は二人の宣教師と二人の日系人女性で運営され、幼稚園教育というより日中の幼児の世話など社会的な機能を果たしました。また第二外国語としての英語教育が幼稚園のプログラムの中に織り込まれました。

学校の施設は急造のものでした。古い机と椅子をバンクーバーの学校から購入しました。教室は牧場の納屋を改造したものでした。実際の話、戦後収容所が閉鎖されると教室だった納屋はまた納屋に戻りました。納屋には乳牛用の設備がそのまま残っていました。納屋は衝立で教室に区切られました。Dビルディングの大きさは約150フィート x 60フィートでした。納屋の中の一番大きな空間の半分と屋根裏部屋が25の教室に区切られました。残り半分はコミュニティーホールに使われました。Dビルディングより小さな羊小屋は15フィート x 15フィートの部屋に区切られました。授業は朝9時半から午後3時半まででした。

1942年にタシミの父兄会はブリティッシュ・コロンビア州公安委員会に高校の設立を請願しましたが、公安委員会は拒否しました。父兄はユナイテッド教会に助けを求めました。それ以後も父兄

会は連邦政府と州政府に請願を続けましたが許可は降りませんでした。公安委員会は日系カナダ人が自分たちの資金と労働で高校の建物を作ることさえ拒否しました。

タシミ高校は政府の援助を受けられなかったので、小中学校が使っていた教室を午後3時半から9時半まで使って授業をしました。生徒が自分たちで教室の掃除と修理をしました。1944年の9月までに4人の日系人以外の方が高校の一般科目を教え、6人の日系カナダ人女性が商業科目を教えるようになりました。宣教師の教師は教会から月々75ドルの形ばかりの給料をもらいました。

高校の宣教師教師の学歴は高かったです。皆が学士号を持っていました。キャサリン・グリーンバックは校長をしましたがサスカチュワン州ムーソミンの小中学校教員養成学校を1911年に卒業し1916年にウィニペグのウェスリー・カレッジで学士号を取りました。1919年まで公立学校で教えていました。その後、日本語を勉強するために日本へ行きました。日本では1926年から1959年まで（タシミで教えていた時を除き）甲府の山梨英和学園で教え、また校長も努めました。甲府では名誉市民にもなりました。ウィニフレッド・オーワックは1940年にブリティッシュ・コロンビア大学から科学学士号を取りました。タシミに来る前にバンクーバーの魚加工会社で化学分析の仕事をしていました。メイ・マックラクランは高校の設立に骨を折り最初の教師になりましたがマニトバ州のブランドン・カレッジで学士号を取りタシミに来る前は日本で教えていました。アーネスト・ベストはトロント大学で哲学と神学を勉強して学士号を取りました。タシミ高校の体育のプログラムの発展に貢献しました。後にジェームズ・ウィリアムズがベストと交代して高校の教師になりましたが、ウィリアムズはブリティッシュ・コロンビア大学を卒業しました。

タシミの普通科目は英文学、英文法、社会科、健康、数学、科学、ラテン語、フランス語、化学でした。

商業科目は日系人の教師が教えました。科目は速記、簿記、タイプ、工芸、家庭科でした。この教師たちは昼間はタシミの小中学校で教え、夜は高校でボランティアで教えました。

タシミ高校ではブリティッシュ・コロンビア州政府教育省通信教育局の通信教育教材を整えるのが大変でした。ブリティッシュ・コロンビア州に住む生徒は一科目につき2ドルの教材費を払いましたが、日系人の生徒は外国人ということで2ドルの他に9ドル払わなければなりませんでした。これは生徒の家庭には大きな負担なので、高校は一科目について一つの教材しか購入出来ませんでした。そのため授業は黒板に質問と答えを書いて行いました。そのうえ教科書も値段の全額を払って購入しなければなりませんでした。それで一冊の教科書を6人余りの生徒と一緒に使いました。そのうえ生徒はブリティッシュ・コロンビア州の通信教育の試験も費用を払いました。その後、ユナイテッド教会が資金を提供して生徒一人ひとりが通信教育用のワークシート教材を手にする事が出来るようになりました。教師が4人しかいなかったのが生徒各自がワークシートで自習する必要がありました。

科目によっては教師が内容を作ったものもありました。タシミの高校教育は政府の介入が無かったので教師は独自の判断で内容を選択することができました。タシミ高校にブリティッシュ・コロンビア州の教育視察管が来たことはありませんでした。

科学実験の用具と備品を手に入れるのが難しかったです。科学、数学、化学を教えたマクブライドはバンクーバーに行き、以前働いていた魚加工会社の研究所から用具と備品を寄付してもらいました。

高校の授業は月曜から木曜までで金曜は休みでした。土曜は教会の礼拝と社交で、午後に音楽鑑賞がありましあ。生徒に家には電気が無くラジオを使用禁止だったので、生徒はレコードで音楽を聞くのを楽しみにしていました。学校は120枚のレコードを持っていたので、普通この中から2枚の古典音楽を選びました。そしてレコードを聞く前に作曲家と音楽についての説明がありました。古典音楽を聞いた後は、生徒はベニー・グッドマンやアーティー・ショウなど好きなレコードを聞くことが出来ました。

タシミ高校の教師はブリティッシュ・コロンビア州教育省のブリティッシュ・コロンビア州教員試験合格の資格を持っていました。タシミ高校は政府からの経済援助が無かったので私立高校とみなされました。生徒は高校卒業資格を得るためにブリティッシュ・コロンビア州教育省通信教育局の試験を受けなければなりませんでした。

タシミの高校は教育機関でしたが同時に生徒の社交の中心でした。ダンス、スポーツ、遠足、クラブ活動などが学校を通じて教師の支援も得て組織されました。

タシミ高校の教師は出来る範囲で生徒が収容所の世界の出来事を知ることが出来るようにしました。生徒は収容所に隔離されていて近くのホープの町に行くのさえ収容所監理官の許可が執拗だったからです。時事問題討論会、音楽鑑賞、映画など生徒が外の世界にも関心を持つようにしました。高校の教師はたびたび生徒の英語を両親に日本語で通訳してあげました。

タシミ収容所のあった間、タシミ高校は生徒が高校教育を続けられるようにしました。卒業生の中にはその後大学に進学して弁護士、医者などになった人もいます。タシミの高校に通ってことでその後も勉強を続けることが出来ました。もし高校が無かったら、たとえ勉強を続けるとしてももっと大変だったでしょう。タシミの高校は日系カナダ人が強制収容にによって被ったいろいろな被害を止めることは出来ませんでした。生徒に未来への希望を与えたことは確かです。

タシミの状態：タシミ、ブリティッシュ・コロンビア州

タシミの義務教育の立案は遅々として進まなかった。これは連邦政府と州政府が収容所の児童の教育を巡って誰が責任者になるかの議論が難航していたからです。父兄は大変困りました。そのため

タシミの学校の初年度の 1942-43 年度は、施設の不備などもあり教師と生徒にとってとても厳しい教育環境でした。

（「過去の町の存在、タシミ収容所の教育」（タンタラス研究所、「カナダの人々」1972年からの抜粋）

タシミの義務教育の立案は遅々として進みませんでした。これは連邦政府と州政府が収容所の児童の教育を巡って誰が責任者になるかの議論が難航していたからです。父兄は大変困りました。そのためタシミの学校の初年度の 1942-43 年度は、施設の不備などもあり教師と生徒にとってとても厳しい教育環境でした。

学校の設備に関しては収容所の間で事情は異なっていました。学校開校時に一番設備に問題があったのはタシミ収容所でした。タシミでは学校の開校が遅れ、また教室は生徒で一杯だったので開校の初期には生徒は大変混乱しました。

タシミの学校は次の証言に見られるように教師と生徒の努力で問題を解決していきました。

「学校はタシミ収容所でいちばん大切なものでした。生徒は毎日することがあり日常生活に規律が生まれました。また収容所生活が終わった時に生徒が正常の学校生活に遅れずに戻るためにも大切でした」。

「学校には父兄も関わっていました。教室の施設で足りないものを作り運動場の整備をしました。PTA も組織されました。父兄は学校を訪れて学芸会、スポーツ、授業を見学しました」。

「学校は収容所の生活を少し収容所の外の生活に近づけました。特に高齢者は学校が出来たことを喜びました。学校は生徒だけでなく収容所の住民皆の生活に大きな貢献をしました。」

「タシミの学校教育は住民が勝ち取ったものでした。いろいろな障害があっても一時は生徒の知識の習得が妨げられましたが、すぐにこの困難を乗り越えました。最初にタシミに到着したときには一つも学校はありませんでした。しかし、こんな困難な状況でも私達に教育を取り返そうという信念を揺るがすものではありませんでした。」

「そのうちきっと私達がタシミ高校を作った努力が無駄ではなかったということがわかる時が来るでしょう。タシミ高校は私達が困難な状況にあっても未来に立ち向かい生活を確立していくための用意をしてくれたのです。」

「教育はただ読み書きソロバンを習うものではありません。私達の生活そのものです。現在の状況に生徒は多くの疑問を持っています。そのため授業では平常の科目の他に生徒の疑問に答えるようにたくさんの討論をしました。学校が正常に機能していることは生徒は勇気を与えました。そして父兄にも将来、状況は良くなるという希望をあたえました。」

「学校は生徒に生活の規律と意味を与えました。父兄も励ました。教育は単に生徒が学校に行くだけではありません。生徒と父兄に規律とやる気を与えるものです。父兄は直接または間接に学校に関係していました。学校の学芸会、スポーツ、ほかの社会活動を見学したり参加したりしました。タシミの小中学校、高校はタシミの収容所の組織としてもっとも大切なものの一つになりました。」

上記の証言から明らかなようにタシミで学校教育を始めたことでタシミのいろいろな組織が統合され全体として良く機能していったことがわかります。

4.5 医療

病院

タシミが開所した時にはまだ病院はありませんでした。タシミに近代的な病院が建設中は臨時の診療所が開いていました。病院の建設は1942年12月に終わり、1943年2月には完全に稼働しました。50のベッドがありましたが20人以上の患者が入院していることは稀でした。病院の隣の二軒連続した家屋が二人の日系カナダ人医師（シモクラ医師とクズハラ医師）の住居でした。

この病院はホープ・プリンストン道路建設の飯場に寝起きする人達も利用しました。病院で対処出来ないような患者は救急車でホープかバンクーバーに搬送しました。ときには連邦警察官が患者を搬送しました。またシモクラ医師は救急の患者をホープかバンクーバーに運ぶために自動車を持つことを許可されていました。

タシミの医療サービスと病院はタシミ収容所が正式に閉鎖される前の1946年6月に終了しました。

医療関係者

病院長は初代がハーベイ・クック医師、そしてクラレンス・G・マックネイル医師、S・M・ミラー医師がその後を引き継ぎました。ハロルド・シモクラ医師はカナダで医学教育を受けた外科医でしたが病院長を助けて仕事をしました。ブリティッシュ・コロンビア州の他の収容所にも日系カナダ人の医師が派遣されました。

病院には資格を持った看護師が数人いました。アリス・リイド、ベアトリース・フェッターレー、エドナ・リップシー、ハツエ・クマノ、C・モーゲンソンです。他に12人の日系カナダ人の看護助手がいました。トム・セキが用務員でした。

タイ・クズハラ歯科医は米国で訓練を受けバンクーバーで開業していましたが、がタシミに移り病院の中の一室で開業しました。

1945年には日系カナダ人の検眼士が病院の一室で開業しました。

病院勤務者の医師、歯医者、看護師、看護助手、用務員、料理人、施設の管理員は公安委員会に雇用され月給を貰っていました。

シモクラ医師の履歴

ハロルド・シモクラ医師は1904年1月4日に広島で生まれ、1915年にカナダに移民してバンクーバーで育ち教育を受けました。ブリティッシュ・コロンビア大学に入学しましたが、その後アルバータ大学の医学部前科に移りました（1952年までブリティッシュ・コロンビア大学に医学部はありませんでした）。1932年にトロント大学から医学博士の学位を受けました。そして東京の聖路加病院で研修生になり、1934年にバンクーバーに戻って開業しました。1936年にエセル・アヤコ・イシワラと結婚し三人の息子に恵まれました（サトル・ハワード 1938年生まれ、アラン・ミツル 1943年生まれ、レイモンド・シゲル 1947年生まれ）。収容所生活の後で一家はアルバータ州のレイモンドとレスプリッジに移り、その後バンクーバーに1951年に戻り開業しました。そして1961年に引退し、1975年に亡くなりました。シモクラ婦人は1994年に亡くなりました。

4.6 宗教

タシミには仏教会、ユナイテッド教会、アングリカン教会の信者がいました。住民の大部分は仏教徒でした。日本生まれの人は仏教徒でカナダ生まれの人にはユナイテッド教会とアングリカン教会の信者でした。

ユナイテッド教会の牧師と関係者は高校の生徒を教え、アングリカン教会の牧師と関係者は幼稚園を教えました。

三つの宗教グループは収容所の施設を共有していました。

仏教会の日曜学校と礼拝はDビルディングのコミュニティーセンター・ホールで行われました。

ユナイテッド教会の日曜学校はDビルディングの教室の衝立を取り外して行われました。

ユナイテッド教会の礼拝はAビルディングの教室の衝立を取り外して行われました。

アングリカン教会の日曜学校と礼拝は幼稚園で行われました。

仏教会の日曜学校と礼拝は日本語で行われ、キリスト教教会の日曜学校は英語で行われました。年配の人のために午前中の礼拝は日本語で、若い人たちのために夕方の礼拝は英語で行われました。

三つの教会は皆、若い人たちのグループを支援しました。若い人たちのレクリエーションや社会活動を支援することで、三つの教会は若い人たちに影響力を持つタシミに欠かせない組織になりました。

教会の牧師たちは若い人たちに大きな影響を与えました。牧師は高校では教師であり、高校外でも個人的に若い人たちと親しかったでした。そして高校の授業の範囲を越えて生徒達の知識、例えば音楽や美術、を広めました。土曜日の音楽鑑賞プログラムは若い人たちの古典音楽やポピュラー音楽の知識を高めました。また牧師と生徒は一緒にハイキングやピクニックにでかけました。多くの生徒が収容所生活が終わってからでも牧師・教師と何十年と連絡をとっていました。

タシミのニュース

タシミ仏教会と日曜学校は昨年の10月の設立以来、タチバナ牧師のもとに活動を広げてきました。日曜学校はタチバナ牧師の指導で午後2時から仏教会で行われました。日曜学校には150人の生徒が来て二世の若い女性の先生と一緒に勉強しました。先生はミセス・ナカモト、タナカ、ヤマナカ、マサト、ナカモト、タカハシ、ナカムラ、コハラ、タグチなどでした。

ユナイテッド教会では日曜朝の礼拝は日本語で、夕方の礼拝は英語で行われました。ウィルバー・ロイ・マックウィリアム牧師はバンクーバーにに住んでいて日曜日にタシミにきました。ミス・ベイリーもユナイテッド教会で働いていました。1943年3月には230人の児童が日曜学校に通っていました。これはタシミの児童の4分の1の児童にあたります。ちなみにタシミの家庭でユナイテッド教会の信者は4分の1でした。アングリカン教会とユナイテッド教会はともに男子と女子児童のための夏季キャンプを行いました。(宣教師月齢報告、1947年10月、438ページ)

マックウィリアムズ牧師はタシミの日系人からとても尊敬されていました。牧師は日系人の立場を代弁する人として政府関係者に影響力がありました。タシミに高校を開設するために欠かせなかった人であり、日系人以外の教師の採用にも尽力しました。高校の教師の多くは宣教師でした。

日系カナダ人が連邦政府によりカナディアン・ロッキーの東に移動するか、または日本に行くかという難しい選択を迫られた時、多くの人がマックウィリアムズ牧師のもとに相談に行きました。牧師は、連邦政府の意図に反する立場を取り、日系カナダ人は誰も早急な決断はしないようにと助言しました。

4.7 ブリティッシュ・コロンビア公安委員会

ブリティッシュ・コロンビア州公安委員会はバンクーバーに本部を置き、日本人をブリティッシュ・コロンビア州沿岸から160キロ以内の保護地域からすべて排除することを目的に設立されました。公安委員会は1942年3月4日の内閣令1665号によって設立され、連邦政府労働省大臣に付属していました。オタワの連邦政府労働省日本局および日本人移動長官は最初はバンクーバーだけに地方事務所を設けましたが、後に日系人の東部移動にともなってトロントにもう一つ地方事務所をもうけました。

公安委員会は1942年3月4日の内閣令1665号によりオースティン・テイラーを委員長として設立され連邦政府労働省大臣ハンフリー・ミッチェルの下で活動しました。1942年10月31日に日本人の強制移動が完了すると公安委員会は内閣令946号で解散しました。そして公安委員会の責任は連邦政府労働省大臣に戻り、ジョージ・コリンズが日系人配置長官に任命されてバンクーバーに本部を構えました。(カナダにおける日系人問題管理に関する報告書 1942年から1944年まで、8ページ)

1942年3月カナダ連邦政府はバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア州公安委員会を創立しました。この委員会はタシミ収容所の管理運営とブリティッシュ・コロンビア州内の日系カナダ人全般の戦時中の管理に責任を持っていました。収容所には管理官が配置され、委員会の方針によって収容所の管理運営にあたりました。配置官と福祉サービス職員が収容所の住人の福祉サービスに責任を持っていました。配置官は収容所住民の収容所以東への移動と1946年5月と8月の日本への帰還の許可を管理しました。公安委員会の他の委員は収容所の他の事務、例えば雑貨店、倉庫、木材、農場などの管理運営にあたりました。(“日系カナダ人移動センター、1942年から1946年、” WJ・オーマック著から)

公安委員会の役割は次のとおりです。

1. ブリティッシュ・コロンビア州の保護地域内からすべての日本人・日系人をブリティッシュ・コロンビア州内陸部の6つの収容所、ブリティッシュ・コロンビア州内の自立した町、または労働者不足の基幹産業(例えばアルバータ州、マニトバ州、オンタリオ州の農業)で働くように強制的に移動させること。
2. 収容所などに強制移動させた人達に住居、食事、医療など必要なものを提供し、仕事の出来ない人達に生活に必要なものを提供し、児童に初等教育を授けること。
3. 日系人の移動を管理し、収容所の生活に必要な規則を定めること。

タシミは他の収容所と同様に公安委員会のバンクーバー本部から派遣された監督官と副監督官が管理をしていました。この他に数名の業務マネジャーがいて管理官、副管理官と連携して収容所の運営に当たっていましたが、マネジャーは監理官からではなく直接バンクーバー本社の上役から指示を受けていました。

監督官は通常の町の町長と日常業務マネジャーの二つ役割を兼ねていました。また施設の建設、補修と全体の運営に責任を持っていました。監督官は収容所の日系人の作った委員会と収容所の運営に関して連携して業務をしました。

副監督官は収容所の住民の戸外での活動、例えば伐採、製材、施設の補修を監督しました。事務マネージャーは収容所の監督官事務所の会計士、福祉職員、事務職員を監督しました。他にも日系人以外のマネージャーが雑貨店、倉庫、肉屋、郵便局の運営をしました。

タシミは地理的に孤立しているので、他の収容所と異なり自立していました。収容所は完全にブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が管理し、収容所の運営に必要な仕事は少数の日系人以外の人を除くと収容所の日系カナダ人が雇われて行っていました。

5.0 収容所の日常

タシミの収容所は一つの独立した町として機能したので、小さな町の生活に必要なものがすべて揃っていました。売店、郵便、新聞、ゴミも収集、消防などのサービスも総てありました。そして住民は困難な状況の下で創意と工夫をこらして生活に必要なものを次々と作り出しました。

町の住民に必要なものは収容所内でほとんど手に入りました。住民にはいろいろな技能を持った人達がいきました。靴の修繕屋、床屋、美容師、宝飾品の製造と修繕、写真屋（映画撮影を含む）などの人達がいきました。カメラの保有は禁止されていましたが、連邦警察官が眼をつぶっていたので住民でカメラを持っている人もいました。住民は暇な時には住居の手入れをしていました。住民は手持ち無沙汰の時がないようにいろいろな活動をして、それぞれの技能を使って他の住民の役に立つことを考えました。お陰で収容所の生活はは住みやすくなっていきました。

1943年半ばまでに収容所の生活は落ち着いてきて、毎日の日課が決まってきました。住居の建設と以前からあった建物の改造も終了しました。畑と家庭菜園も作られました。仕事の出来る人は仕事をし、出来ない人は公安委員会の福祉事務所から手当をもらいました。児童も小中学校だけでしたが学校に通いました。このように収容所の毎日の生活に日課が出来てきました。

小さな店を開く人が出てきて、収容所はカナダの他の小さな町ようになっていきました。雑貨店の他に以前の牧場の建物の中に床屋、連邦警察派出所と同じ建物の中に靴の修理屋、美容室、郵便局などが出来ました。自分の家で商売を始める人もいました。9番通りの家は宝飾店を始めました。10番通りの家に住むジョー・セコはタシミに来る前に商業写真家でしたが、タシミでは収容所の写真家になり家で写真を現像しました。

畑と家庭菜園でとれる大麦、カラスムギ、セロリ、キャベツは売りに出され、豚も育てられて住民のために屠殺し肉屋で販売されました。しかし養豚は採算がとれず間もなく終了しました。

住民は一家に割り当てられた菜園で野菜を育て、家庭で消費する野菜をほぼ自給しました。多くの住民が花壇や小さな家庭菜園を始めました。また自分の住居に手を入れたて、机、台所の食器棚、椅子、ベッドの下の収納庫などを作りました。地下を掘って収納庫にした人もいました。

収容所の生活では社交のための組織が重要な役目をは担いました。社交やスポーツの組織がつぎつぎと出来て若い人たちの学校の授業時間以外の生活の中心になりました。若い人たちは学校を中心に社交やレクリエーションのための集まりを組織しました。

当時の日系カナダ人社会と同様にタシミでも一世と二世の間の考え方の違いが家庭内のいざこざのもとになることが多く、若い二世は家の外で同世代の友達と一緒に活動することを好みました。そのため二世はいろいろな社交やレクリエーションの組織をつくるようになりました。

タシミの生活、スナップショット

タシミでは施設を改善して冬の数ヶ月の間に若い人やシニアがレクリエーションを出来るようにすることはありませんでした。学校のホールが唯一のコミュニティーの集会所でしたが、つもダンスパーティー、演芸会、演奏会や柔道大会、バスケットボール試合などのスポーツ、教会と日曜学校の集まりなどの予約で一杯でした。私はタシミのコミュニティー活動の中で特に他のゴーストタウンの収容所と比べて自慢できるのはボーイスカウトだと思います。ケミウスでボーイスカウトの隊長をしていたシゲ・ヨシダの指導の下に50人余りのティーンエイジャーが幾つかのグループに組織されました。グループのリーダーにはトム・セキ、ビック・カドナガ、ノビー・ホリ、ハービー・モリツグ、ジミー・シノなどがいました。

5.1 買い物

収容所内の店での買い物には現金ではなくクーポンが使われました。クーポンは1セントから50セント、2ドル50、5ドル、10ドルがあり、ブリティッシュ・コロンビア公安委員会の事務所で買えました。住民は公安委員会の雑貨店、パン屋、肉屋などで買い物をする時にこのクーポンを使いました。店には限られた種類の製品しかありませんでした。タシミの近辺には他に店が無かったので住民は収容所の店で買える品物で満足するか、またはカタログで外から品物を取り寄せました。

公安委員会の雑貨屋ではしばしば買い物客が列をつくりました。とくにバンクーバーなどから新鮮な品物が入った日はたくさんの人が集まりました。砂糖のような品物は買い物制限があり住民は砂糖を一定量買える配給証を貰っていました。配給証とクーポンの二つを使う買い物もあって面倒でした。

タシミの店で手に入らないものはイトンやシンプソンのカタログを使って取り寄せました。支払いは郵便為替でした。カタログで購入するものは衣服や家庭用品が主でした。注文した品物は郵便局に届きました。

タシミの声

「戦前のバンクーバーでは親は二世の子供達がダンスに行くのに良い顔はしませんでした。これは一世の育った日本で若い男女が体に触れることを禁忌にしていた習慣を引き継いだものでした。その結果、二世がティーンエージャーになると、例えば柔道の講師は男子に女子とダンスをするのは日本精神に反するというような説教をしました。教会の中だけはカナダ風の行動が認めれていました。教会の説教は英語で行われ、若い信者の集まりではポップ音楽でダンスもしました。しかし教会の信者以外の親たちは教会のダンスパーティーはけしからぬとおもっていました。」（フランク・モリマツ）

5.2 タシミの公共サービス

公安委員会が小さな町にあるような公共サービスはすべて提供しました。炊事と暖房用の薪木は馬車で定期的に配達されました。

公安委員会の雇用人が毎日照明用の灯油を配達しました。住民がランプを家の外に出しておく、このランプに決められた量の灯油を注いでいってくれました。ランプを戸外に出しておくのは屋内に置くことは安全上禁じられていたからです。タシミでは一日に90ガロンの灯油が使われました。この灯油は無料でした。

飲料用と洗濯用の水は戸外にある水道栓から容器に注いで家まで運びました。水道栓は3軒から4軒に一つの割合で設置してありました。住民は毎日数回水道栓から水を家まで持ち運ばなければなりませんでした。

ゴミは一週間に一度集められてタシミの東端にある焼却場で処理されました。

タシミの消防署は新しく建てられた建物の中にあり、火の見櫓がついていました。火の見櫓からはタシミとその周辺の火事の見張りができました。消防署には2千フィートのホース、8つのノズル、鉋やバケツ用意してありました。

タシミの声

毎朝、カラコロンという下駄の音と水道栓から出る水の音で目が覚めました。すると家々の炊事の煙が煙突から昇り住民が起き出したのがわかります。8時には甲高い汽笛が鳴ります。これは製材所で働く人、看護婦、看護助手、靴屋、灯油の配達人、生徒に早く起きろという合図でした。

そしてまた新しい日が始まります。木材を運ぶトラックや馬車が大通りを行き過ぎ、郵便配達が口笛を吹きながら自転車で通り過ぎ、主婦は公安委員会の雑貨屋に買い物にでかけます。木曜日の午後には雑貨屋に新鮮な野菜や果物が入るので主婦は我先にとおしかけて行列ができます。そして1週間分の野菜と果物を買います。3時に学校が終わるとDビルディングから生徒が飛び出してきました。そして郵便局に駆けつけて「今日私に手紙が来ている？」とたずねます。

すぐに大通りは生徒でいっぱいになります。あちこちと走り回るもの、ホッキースティックを振り回すもの、母親に代わって買い物に行く少女、ミルク瓶とクーポンをもってミルクを買いに行く人で賑わいます。これがタシミの変わらぬ毎日の風景です。

忙しい午後が終わり夕暮れとなると働きに出ていた男たちが温かい夕食の待つ家への急ぎます。または風呂屋で疲れを癒やす人もいます。だんだん暗くなると周囲の山々が黒々と覆いかぶさるようになります。ランプに灯がともり、蓄音機がかすかに聞こえてきます。高校生は日中の仕事で疲れた体を引きずって夜間学校に行き、通信教育の教材に立ち向かいます。そして夜が来てタシミの一日が終わります。（サジエ・ナガイ）

5.3 郵便

タシミは自分たちだけの郵便局のある唯一の収容所でした。タシミは他の町から孤立しているのでラジオは聞こえ難く、電話は収容所の管理者だけが使用出来ました。そのため郵便だけが外の世界と連絡をとる手段でした。住民は私的な手紙の遣り取り、カタログショッピングのような用事、郵便為替によるお金の遣り取り、雑誌、新聞、その他出版物の購入に郵便局を使いました。

私的な手紙は検閲がありました。手紙は開封され禁止されていた情報の書いてあるところは切り取られました。紙の両面に書かれた手紙は一部を切り取られると裏側の文も無くなるの内容がわからなくなりました。手紙の検閲はタシミの連邦警察派出所が行いました。

5.4 農園と庭

タシミの風呂場の北側、町の西側の所に農園があり、ジャガイモ、チューニップ、人参、キャベツ、セロリなどを栽培しました。ここで採れた野菜は雑貨店で販売され、オーツ麦や大麦は馬や他の家畜の餌料に売られました。タシミは標高が高く生育期間は短かったですが野菜や麦は良く育ちました。タシミのそれぞれの家には50平方フィートの庭がありました。ここで家庭用の野菜を育てました。家の回りの小さな空き地で野菜や花を育てている人b多かったです。

5.5 レクリエーション

タシミは高い山々に囲まれ他の町から孤立した町でした。そのため収容所に隔離されていた住民には楽しみが必要でした。住民は自分たちでさまざまなレクリエーションを考え出しました。Dビルディングがレクリエーション活動の中心でした。野球などのスポーツは住宅地からスマロ川を渡った対岸の広場で行いました。

当時の日系カナダ人社会でどこでも見られたように一世と二世の間のはっきりとした考え方の違いがタシミにもありました。二世はしばしば家庭内のいざこざの原因になり、そのため二世は家の外

で友達とレクリエーションに熱中しました。タシミでは他にすること無かったので学校、スポーツで仲間一緒にする活動が盛んになりました。

高校は勉強の他に生徒のレクリエーションの中心になり、ダンス、スポーツ、遠足、クラブ活動などが教師の協力も得て組織されました。

ベースボールはタシミでとても人気があり幾つかのチームがありました。高校の生徒会は他にも卓球、バレーボール、バスケットボールのリーグ戦を作りました。毎週金曜日と土曜日の午後3時から6時までコミュニティー・センターは高校生のスポーツの場所になりました。春と秋には高校生は教師と一緒にハイキングにでかけ、冬にはタシミから西に2マイル離れたところにある池でスケートやホッケーをしました。ホッケーのリーグ戦には50名の男子生徒が参加しました。生徒会はスポーツクラブの他にもスピーチ・クラブ、グリー・クラブ、チェスとチェッカー・クラブ、時事問題クラブ、科学クラブ、工芸クラブを組織しました。

毎月の第二週末にはコミュニティーセンターで古い日本映画や英語の無声映画が上映されました。何回も同じ映画が上映されたので子供達はセリフを覚えてしまい上映中に真似をしていました。

タシミ高校、1942年から1946年まで」1992年3月3日出版)

5.6 スポーツ

野球、バスケットボール、アイスホッケー、柔道がタシミで盛んでした。

野球

1943年にタシミ青年会は親和会から金銭援助を受けて野球リーグを作りました。リーグには朝日、日本、若葉、荒鷲の4チームがありました。チームのメンバーはタシミと道路建設現場の独身と既婚の男子でした。1943年6月に新しく出来た野球場で荒鷲と朝日の試合でリーグ戦が始まりました。試合は水曜と土曜にあり大勢の住民が応援に来ました。

バスケットボール

バスケットボールは生徒に人気があり、冬の間Dビルディングで行われました。

柔道

日本軍のパールハーバー攻撃後ブリティッシュ・コロンビア州の柔道クラブは廃止されましたが、シゲタカ・スティーブ・ササキがタシミの収容所で柔道を続けました。タシミは日系カナダ人の収容所の中で柔道をする人が一番多い収容所でした。

シゲタカ・ササキ履歴

シゲタカ・スティーブ・ササキはよくカナダ柔道の父と呼ばれています。ササキは1922年にカナダでパン屋を営んでいた叔父夫妻にカナダで漁業をしないかと誘われてカナダに来ました。ササキはバンクーバー地区で最初の柔道クラブを作りました。1924年にバンクーバーで最初の柔道クラブを作った後で柔道の普及に努めバンクーバーに2番めのクラブとスティーブストンに一つクラブを作りました。バンクーバーの最初の柔道クラブは体育という名前で1924年に500 ブロック・アレクサンダー通りにレストランの経営者のイチジ・ササキの支援で開きました。バンクーバーの2番めのクラブはパウウェル通りに開きました。380パウウェル通りに昭和クラブを持つエツジ・モリが支援しました。昭和クラブな違法な賭博場でした。スティーブストンのクラブは体育クラブの支所でタマオキ・ドイとタケシ・ヤマモトが講師でした。ササキは週に二度この道場に指導に通いました。

1932年にササキの柔道クラブは連邦警察長官の眼に止まり、長官は連邦警察官の訓練に取り入れられていたボクシングとレスリングを柔道と置き換えたいと願い出て、同じ年に受け入れられました。ササキは柔道の修行に日本に行き三段を取得しました。アレクサンダー通りのクラブには近代日本柔道の父、嘉納治五郎が訪れ、クラブを気道館と名付けました。1936年にササキは嘉納治五郎と共に柔道をオリンピック科目とする運動のためにカナダを旅をしました。

パールハーバー攻撃と共にブリティッシュ・コロンビア州の総ての柔道クラブは閉鎖に追い込まれました。そしてササキはタシミ収容所に行くことになりました。タシミでササキは柔道の指導を始め、そのお陰でブリティッシュ・コロンビア州の収容所でタシミが柔道をする人が一番多い収容所となりました。ササキのお陰で日系カナダ人の収容所時代にも柔道は存続することとなりました。ササキとアツム・カミノがタシミの若者に柔道を教えました。ササキは連邦警察と親密な関係を結びましたが、このことが柔道を存続させる上で役立ちました。そしてタシミだけでなく他の収容所でも柔道を練習することが許可されました。収容所生活が終わると収容所で柔道を習った人達がカナダ中に柔道を広めました。特にオンタリオ州とケベック州に柔道が広まり、戦前のブリティッシュ・コロンビア州を中心とした柔道からオンタリオ州、ケベック州が中心の柔道になっていきました。

1954年にササキはカナダの講道館黒帯会（現在は柔道カナダという名称です）の初代会長に就任しました。1986年にササキはカナダアマチュアスポーツの殿堂に登録されました。1975年までにササキは柔道7段になり亡くなる前に8段になりました。

5.7 クラブ

タシミの住民は若い人たちが暇を持て余すことのないように、建設的な活動に従事することを奨励しました。また若い人たちも自分たちでクラブや組織を作って共通の興味を追求したり社会活動をして、収容所の生活で気分が落ち込むことのないように努力しました。

タシミ青年会 (TYS)

タシミ青年会は16才以上の若い人たちの組織で、ボーイスカウト、ガールズガイドやいろいろなレクリエーションプログラムを組織しました。ボーイスカウトには144名の団員がいてシゲ・ヨシダが団長になりました。タシミのボーイスカウトはタシミと同じような規模の町にあるボーイスカウトとしては最大でした。青年会は図書館も運営しました。蔵書は主に小説でした。タシミの住民はラジオを持つことが許されず、新聞は日系カナダ人新聞の「ザ・ニュー・カナディアン」しか読めませんでした。それで図書館にある本は読み物として人気がありました。青年会は日本語と英語の歌の演奏会も企画しました。

ボーイスカウトとガールズガイド

タシミの親たちや指導者達はボーイスカウトとガールズガイドの設立に熱心でした。理由のひとつはタシミに来る以前にボーイスカウトやガールズガイドに入っていた児童が同じ活動を継続して行えるようにすること、そしてもう一つの理由は若い人たちが収容所で建設的な活動に参加出来るようにすることでした。

カンバーランドでボーイスカウトに関係していたシゲ・ヨシダがタシミのボーイスカウトのリーダーになりました。カブマスターはビック・カドナガで48人の男子児童が6名ずつのカブスカウトとして組織されました。女子児童のためにはタシミ・スターズという名前のガールズガイドが組織されました。

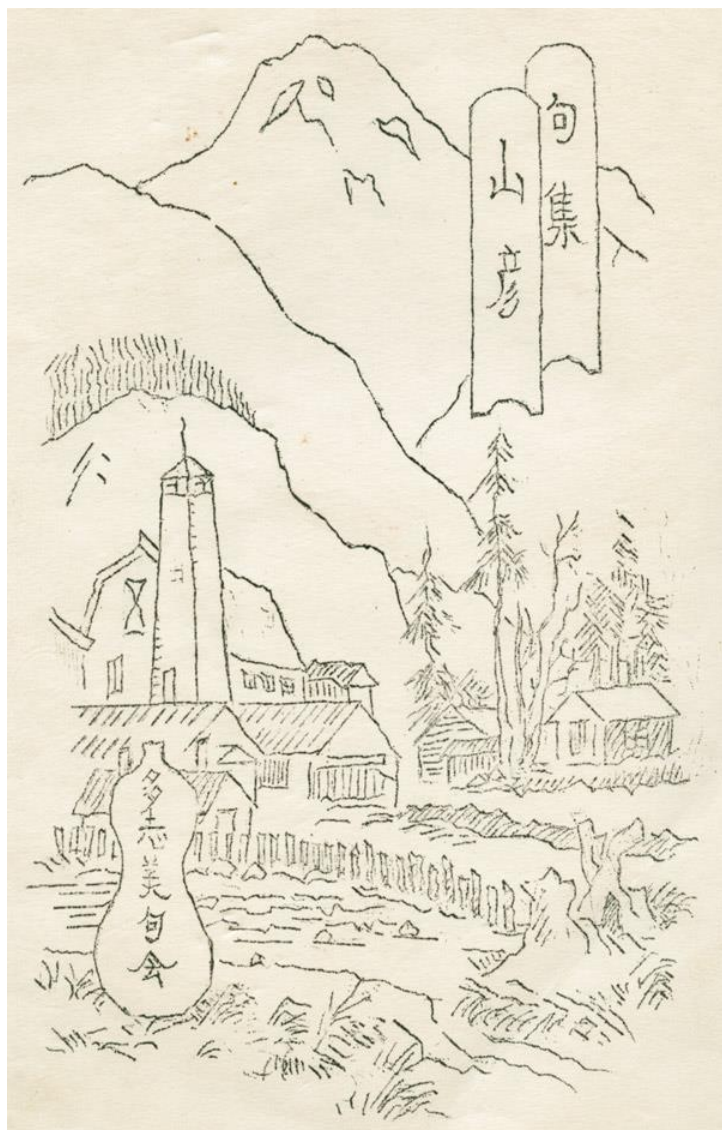


(ボーイスカウト、1944年8月26日)

タシミ句会

2016年9月16日にアルバータ州コールデール市のフケオ・サメシマ夫妻が2冊の本を日系全国博物館に寄贈しました。飾り気のない簡素な本ですが、実はタシミ句会の会員が詠んだ俳句を収録しており、日系カナダ人の収容所生活における様々な感情を記録した貴重な本です。

一冊は1945年に編纂され、「山吹」という書名になっています。「山吹」には339首の俳句が収めてあります。もう一冊は1946年に編集された「靈光」で319首の俳句が収めてあります。そしてこの句集の俳句を通して、句会の会員と収容所の住民が経験したさまざまな感情を垣間見ることが出来ます。句集はタシミの住民がどのように毎日を感じていたかを知る貴重な資料です。





映画

親和会は映画会も企画しました。二週間ごとの土日にDビルディングの西側で映画を上映しました。16ミリ映写機を箱に入れて天井から吊るしました。使用しない時は箱を天井に引き上げておきます。観客は長い木製のベンチに座って映画を鑑賞しました。

ケイゾー・ツユキが映画と映写機の係でした。ハリウッド映画とカナダ映画協議会の映画を上映しましたが、16ミリフィリムの映画は少なく、英語の映画はあまり上映出来ませんでした。ケイゾー・ツユキは自分のコレクションから自分で映した動画、日本の映画、日本の無声映画などを選んで上映しました。

ケイゾー・ツユキは映写機と音響システムを設置し、入場料として大人一人10セント、子供一人5セントをとりました。映画収入の大部分はタシミ青年会の活動資金のために寄付しました。

日本の古い無声映画は映写を担当したツユキが自ら脚本を読んで弁士をしました。日本の映画は何回も何回も上映されたので観客は物語を覚えてしまい、見せ場になるとセリフを大声で叫びました。同じ映画が何回上映されても、いつも映画会は満席で観客は毎回とても楽しんでいました。

演奏会

タシミのDビルディングで行われた演奏会や演芸会の写真がたくさん残っています。タシミ青年会が英語と日本語の演奏会と演芸会を企画しました。日本語の演芸会は芝居と言っていました。演奏会にはタシミの住民で歌の上手い人やプロの音楽家が出演しました。演劇やミュージカルもありました。時にはタシミの外から来た人が出演しました。演奏会と演芸会はとても人気がありいつも観客で一杯でした。タシミには他の町のように映画館や劇場がありませんでしたから、タシミの住民はみんな自分たちの演奏会と演芸会を支援しました。

ラジオは禁止されていましたが～

タシミでラジオを聞くことは禁止されていましたが、タシミの監理官はときには住民がラジオを聞いても見逃していました。

タシミでは新聞は自由に配布されていましたが、個人の手紙は検閲され、長距離電話の使用には連邦警察または公安委員会の許可が必要でした。長波ラジオ受信機は持ち主に返される場合もありましたが、山に囲まれたタシミでは長波を安定して受信出来ませんでした。短波ラジオを密かに持っていた人は日本からの放送を聞いてそのニュースを日本語でほぼ毎日発行されていた「タシミニュース」に投稿しました。「タシミニュース」は日本の陸軍と海軍が戦いに勝っていると伝えました。1943年12月7日の真珠湾攻撃第二周年にタシミニュースは日本軍の太平洋、ビルマ、北支での勝利を伝え、大東亜共栄圏が進展を続けて、偉大なアジア人がアジアをイギリスとアメリカの軛から開放するという夢がかないつつあると報じました。そして次の日の「タシミニュース」には昭和天皇陛下の1943年12月のメッセージとして戦況に満足しているが日本陸軍と空軍は、偉大なアジアの実現のための新しい世界体制の確立という日本の夢を達成するためにもっと頑張るように励まされたという記事を掲載しました。「タシミニュース」によれば米国が戦争に勝っているというのは米国の宣伝にすぎませんでした。東京からのニュースは戦況は日本に有利と報じていましたが、米国海軍の発表は米国の勝利を報じていました。またロイター通信は米国海軍は多大な損害を被って作戦を放棄したと伝えました。そしてこれらのニュースを聞いたタシミの住民は日本海軍に戦況は有利であり、米国海軍が勝利しているというのはただの宣伝であると思いました。(パトリシア・ロイ著、「相互の捕虜、太平洋戦争のカナダ人と日本人」UT出版、1990年、129ページ)

5.8 収容所の出来事

次の記事は「ザ・ニュー・カナディアン」からの引用で、入所当時の慌ただしさが終わり収容所の生活が落ち着いてきた時の様子です。しかし落ち着いていた収容所の生活は、公安委員会が若い人を仕事から解雇したことで乱れました。この解雇は公安委員会が日系カナダ人をブリティッシュ・コロンビア州の沿岸地方からカナダ全国に分散させるために取った政策の一環でした。

ボーイスカウトとガールズ・スターはタシミ生活の華でした。

50名の若い人たちが保守と事務の仕事から解雇されましあ。これはは収容所の日系人にとって大きな出来事でした。

若い人たちが仕事から解雇され、また家族から離されてカナダ東部に送られるのではないかと心配と、50名もの若い人たちがタシミの町の保守と事務の仕事からいなくなったら町のサービスはどうなるのかという心配がありました。

11月8日に公安委員会の副管理人のT・オロフォードが18才から55才の独身男性はこの日をもって収容所の仕事から解雇されるという通知を出しました。無くなった仕事には公安委員会の事務職員と学校の教師も含まれていました。

これまでのところホープ・ペンティクトン道路の建設工事に従事していた人達は解雇されていません。

収容所で一番話題にのぼったのは、連邦政府はなぜ今になってカナダ生まれの日系人と帰化日系人はカナダ市民としての責任を果たさなければいけないと言い始めたのかということでした。これまでこれらの人は敵性外国人という扱いでした。

こんな出来事がありました。外から訪れる人にはタシミは山に囲まれて厳重に監視された監獄としか見えませんでした。タシミは最初の年と比べて収容所の施設に変化は無いまま二回目の冬を迎えようとしていました。

最初の一年で住宅は少しは改良されたものの、冬を迎えた収容所の何列も何列も続く掘っ立て小屋の家ともう野菜も花も植わっていない小さな庭が続く風景は、厳しい11月の気候の下で重苦しい雰囲気でした。

2週間前に雪が少し降りましたが、今は積もった雪が溶けて道路はぐしゃぐしゃになっています。

住宅地の周りの家庭菜園には収穫の終わった後に残されたキャベツの茎や人参、レタスなどのクズが散らばっています。

収容所の食糧事情は比較的良いです。農園からの収穫があり、その他の食料は公安委員会の雑貨店が一括して大量に仕入れて住民に販売しています。

冬の数ヶ月の間、若い人やシニアがレクレーションを出来るような施設の改善はありませんでした。学校のホールが唯一のコミュニティーの集会所でしたが、いつもダンスパーティー、演芸会、演奏会や柔道大会、バスケットボール試合などのスポーツ、教会と日曜学校の集まりなどの予約で一杯だった。私はタシミのコミュニティー活動の中で特に他のゴーストタウンの収容所と比べて自慢できるのはボーイスカウトだと思います。ケミウスでボーイスカウトの隊長をしていたシゲ・ヨシダの指導の下に50人余りのティーンエイジャーが幾つかのグループに組織されました。このグループのリーダーにはトム・セキ、ビック・カドナガ、ノビー・ホリ、ハービー・モリツグ、ジミー・シノなどがいました。

男子のボーイスカウトと同年齢の女子児童はタシミスターズという組織に入りました。このグループはタシミだけのもので、男子ボーイスカウトの制服をモデルにした制服を着ました。白いブラウスに青と白のネッカチーフを首に巻きました。マイヤ・イノウエ、マーサ・ホリ、マージ・タカハシ、エミー・ナカノ、カズコ・カワベなどがタシミスターズのリーダーでした。

タシミは他の収容所に比べると落ち着いた生活が続いていたように思われます。それは毎日の活動が習慣化して、一年も経つと住民がこの習慣に慣れていったことによるのでしょう。タシミは「自然な雰囲気」の収容所になりました。そして地理的に他の町から離れて孤立していたのでタシミは自己完結した町になりました。

このような状況にもかかわらず住民の心の底にはもっと自然な生活への願望がありました。一度この願望が高まると、ちょうどレモンクリークの収容所で起こったように、もうこの願望は抑えられなくなるでしょう。公安委員会による日系カナダ人の大量解雇はこのきっかけに成り得る出来事です。次の冬が来る前にタシミにいろいろな変化をもたらすことになるでしょう。（ザ・ニューカナディアン新聞、1943年11月20日）

タシミ青年会

次の「ザ・ニュー・カナディアン」からの引用はタシミ青年会が企画した演奏会についてです。演奏会は大成功だっただけでなく、タシミの若い人たちが舞台と舞台裏でさまざまな活動に参加したことに大きな意味がありました。

タシミの演奏会についての手紙

Dear Mary:

メアリーさん

演芸会はとても素晴らしかったです。タシミ青年会の復活祭演芸会は大人気で4日間の公演となりました。演芸会が大成功だった理由はいろいろありますが、バンクーバーの盲目のピアニストロー・マッシュウーさんの出演もその理由の一つだったと思います。とても素晴らしい演奏でした。

演芸会は会場満員の観客を前にして午後6時きっかりに幕を上げました。呼子になると同時にボーイスカウトとタシミスターズがV字型になって舞台に登場しました。そして皆でカナダ国歌を斉唱しました。その後ボブ・カドグチが開演の挨拶をしました。これは演芸会のプログラムには載っていないものでした。

次に20名ほどのタシミスターズが「暖かく輝け」を合唱しました。小さくて可愛いメイコ・ウノが着物を着て心にしみる歌を歌いました。タシミの教師をしているアースト・デイはバイオリンで「明日は素晴らしい日」と「トツチェリのセレナーデ」を演奏しました。エミコ・ナカモノの若柳流の踊りは観衆を恍惚とさせました。ボーイソプラノのボビー・イトウは「松林の中の大聖堂」と「チャーリーは水夫」を歌い、ビック・カドナガはハーモニカを演奏しました。クミコ・ナカノとメイコ・クマノはちょんまげ姿で「妻恋道中」を歌いました。ビック・カドナガとボーイスカウトはスキットを演じました。ヒデ・ニシハタ、ボビー・イトウ、ウィリー・タカハシが主な役を園児しました。

この演芸会の特別な演目はロニー・マシュウーのピアノ演奏でした。ロニーが舞台に出て「皆さん今晚は」と挨拶をして「12番街のラグ」を演奏を始めると、観衆はこのピアニストの指の動きに魅せられてしまいました。一曲終わるたびに観衆は興奮して大声で応援しました。演奏の後半ではオーディションに行くピアニストの真似をして皆を大笑いさせました。ロニーがタシミの演芸会に出演してくれて大変嬉しかったです。

演芸会の後半はタシミ青年会の陽気なスキットで始まりました。ジョージ・カキノとマリエ。ナンバが主演で舞台の裏ではファッジ・イナモトとスエ・カワグチが声の出演をしました。ノボル・ツツイが「二人は若い」をハーモニカで演奏し、タッド・モリシタ、エディー・モチヅキ、カズ・カドナガ、タツオ・ホリが理髪師4人組となって「スワニーリバー」を歌いました。タジミ・オオキとケイジュ・サトウの尺八、マーサ・ホリの琴の演奏があり、タシミスターズが「アリスの青いガウン」を青いガウンを着て歌いました。

演芸会はミン・サカモトが率いるタシミ青年会とシゲ・ヨシダがリーダーのボーイスカウトとその他大勢の人達の努力で成功しました。舞台の背景はヨシマル・アベが、照明はジャック・マツイとジェームズ・シノが担当しました。

あなたもこの演芸会に来てみたかったと思いませんか。タシミの人達は4回の演芸会に少なくとも2回行っています。次の演芸会にはあたなの入場券も買っておきます。

ベルナッデより

(1944年4月29日、「ザ・ニュー・カナディアン」)

ボーイスカウトとガールズガイド

タシミの親たちや指導者達はボーイスカウトとガールズガイドの設立に熱心でした。ひとつにはタシミに来る以前にボーイスカウトやガールズガイドに入っていた児童が同じ活動を継続して行えるようにすること、そしてもう一つは若い人達が収容所で建設的な活動に参加出来るようにすることという考慮がありました。

カンバーランドでボーイスカウトに関係していたシゲ・ヨシダがタシミのボーイスカウトのリーダーになりました。カブマスターはビック・カドナガで48人の男子児童が6名ずつのカブスカウトとして組織されました。女子児童のためにはタシミ・スターズという名前のガールズガイドが組織されました。

ボーイスカウトの松明パレード

2月23日の国際ボーイスカウト週間の一日には、タシミのボーイスカウト110人が松明をかかげて収容所の周りをパレードしました。このパレードはタシミボーイスカウト結成一周年を祝うものでもありました。この祝賀会で優秀なボーイスカウトの表彰式が400名の参列者の前で行われ、公安委員会のMLブラウンによる挨拶がありました。また収容所の配置委員長ジョージ・C・ブラウンによるボーイスカウト活動の支援を惜しまないという挨拶がありました。

松明パレードの後でボーイスカウトはDビルディングで、タシミ青年会が寄贈したソフトドリンクと果物を楽しみました。

タシミの野球

野球は他の収容所と同様にタシミでもとても人気のあるスポーツでした。野球チームのメンバーは収容所に来る前にバンクーバーやほかのブリティッシュ・コロンビア州沿岸の町の野球チームのメンバーでした。とくにバンクーバーの有名な朝日野球チームのメンバーが収容所の野球チームのリーダーとなりました。

タシミは他の収容所から離れて孤立していたので収容所内に三つの野球リーグが結成されました。シニアリーグ、ジュニアリーグとオールドメンリーグです。チームは大勢の観客の前で激しいゲームを展開しました。夏の間のレギュラーゲームと秋のプレイオフはたくさんの観客を集めました。(ザ・ニュー・カナディアン、1943年9月25日)

タシミの住民は野球に熱狂

ダグ・フジノ

タシミのシニア野球リーグは青年会が親和会からの財政援助をうけて結成しました。朝日、荒鷲、若葉、日本の4チームがありました。チームのメンバーはタシミの独身、既婚男子と道路建設現場に住む人達でした。

リーグ戦は6月に荒鷲と朝日の試合で始まり、収容所副所長のJJサザランドが始球式をおこないました。

シーズン中に勝ち負けの差の少ない試合を続けたチームは、9月12日に上位2チームが何百人という観客を集めてリーグ決勝戦のプレイオフゲームを戦いました。

試合は荒鷲のヨッショ・マンデと若葉のスパッド・カトウの投手戦になりましたが、五回に若葉の大きなエラーがあり荒鷲がリーグ優勝を果たしました。

タシミの声

冬の間、スポーツ好きの住民はDビルディングのバスケットボールの試合を見にでかけました。ジュニア男子チームとジュニア女子チームがあり、女子チームは土曜日お午前10時から11時まで男子チームは午後5時から6時まで試合をしました。それぞれにサンダーバーズ、シューティングスターズ、セブナップスの3チームがありました。

シニア女子チームは金曜日夜6時から8時まで試合をしましたが、男子の観客を入れませんでした。インターメディアイト男子チームはDビルディングが空いているときに試合をしました。空いている時間を見つけると急いで相手チームを呼んできて試合をしました。シニア男子チームは4つありました。

5.9 タシミ句会

次のタシミ句会の紹介記事はビクトリア大学歴史学科のポストドクター研究員のエイジ・オーカワの寄稿です。タシミ句会の出版物はすべて日本語なのでエイジ・オーカワが英文で内容を解説しました。

はじめに

2016年9月16日にアルバータ州コールドール市のフケオ・サメシマ夫妻が2冊の本を日系全国博物館に寄贈しました。飾り気のない簡素な本ですが、実はタシミ句会の会員が詠んだ俳句を収録しており、日系カナダ人の収容所生活における様々な感情のすぐれた記録になっています。

フケオ・サメシマは25才のときから俳句を始め、その後ずっと続けていました。ポートアルバーニで靴屋をしていましたが、タシミに収容されました。タシミでカズエと会い結婚しました。タシミで結婚した三組のうちの一組です。タシミ収容所の後にサスカチュワン州のムースジャー、アル

バータ州のバーンウェルに引っ越し、最終的にはアルバータ州のコールデールに落ち着きました。タシミ句会で活動し、句会の本の発行に尽力しました。

1945年に339句の「やまびこ」句集が発行され、1946年に319句の「靈光」が発行されました。俳句は総て日本語です。川柳はありません。俳句は季語を取り入れ季節と共に移ろう人の気持ちを表現しています。

句集に収められた俳句は収容所の人達の気持ちを知る窓口です。俳句からタシミの世界を思い描いてください。まず初めにタシミ句会の概略とその俳句にたいする精神を説明します。次に句集からいくつかの俳句を選び英訳をつけました。

句会の意味

どうしてタシミの人達は俳句を詠んだのか？俳句を詠むことはどういう意味を持っていたのか？俳句からタシミの生活の何を知ることが出来るのか？これらの質問の答えは句集の序文を読むとわかります。序文には俳人の自然との向き合いかたに二つの要素があることがわかります

俳句へ達観的に迫る

二つの句集には序文がついています。序文の内容は抽象的ですが、タシミの俳人にとって周囲の自然は俳句を作るとこととは一体になっていたことがわかります。俳句は俳人の魂と自然の調和をはかる手段であり、自然の計り知れない力を受け取る手段でもありました。

「やまびこ」の序文

戦争によりこの狭い峡谷の小さな村に閉じ込められた私達にとって、魂を生き生きと保つには毎日の努力が必要でした。毎日の単調な生活と苦難に満ちた運命はとても息苦しかったでした。最初にタシミに到着した時は、周囲の寒々とした山々は私達をこの惨めな場所に押し込めて押しつぶそうとしているように感じられました。しかしすぐに自然はいかに私達を慰め、新しい命を与えてくれるものなのかと覚りました。朝霧が山から谷に降り、朝日が山の頂を雪を赤く染め、季節が移ろって行きます。この句集に収められた俳句は私達の声であるとともに自然の声でもあります。そして私達にひらめきを与えてくれる美しい自然への深い愛と感謝の気持ちの現れです。俳句は私達と山々が会話をする「やまびこ」です。

この句集に収められた339首の俳句はタシミ句会の会員の俳句2000首あまりから選んだものです。1943年1月にタシミ句会が結成されてから二年余りの内に詠まれたものです。それぞれの俳句は私達の俳句に対する情熱と献身の結晶です。どうぞ御覧ください。。

「靈光」の序文には自然の力がもう少しはっきりと書いてあります。

タシミ句会は従来の眠ったような沈滞した様々な句会と袖を分かって誕生しました。私達は俳句は私達が感情を研ぎ澄ました結果出来るもので、自然の壮大な美と向き合った時の私達の気持ちを詩にしたものと思っています。このような信念のもとに俳句の道に精進をしてきました。私達の置かれた一時的な環境を反映して間違った考えが俳句に入っているかもしれません。また句集に収める価値が無い、正統の俳句では無い俳句が入っていると思われる方もいるかもしれません。しかし総ての俳句は私達が自然に対面した時の魂の反映、霊の光なのです。

句集の終わりのほうに日系カナダ人二世の「二世句会」の会員による俳句45首が載せてあります。この句会はまだ結成されたばかりですが、すでに会員は自然の美しさを心の美しきで捕らえる、という私達の句会の精神を会得しています。二世句会の俳句は従来の型にとらわれない純粋な俳句であり、カナダの詩歌の世界に新たな道標を建てたとおもいます。

これらの俳句に見られるように句会では自然の美に感応することの大切さを強調しています。すぐれた俳人とは自然と密接な関係を作った人です。それゆえ私達は俳句を、山の声、人の声とよぶのです。

このような信念はタシミの自然は我々を退屈させるものではなく、私達に新しい命を吹き込んでくれるものと見ることです。周囲の自然と私達の心と魂は共鳴しています。ちょうどジュリー・アンドリュウのミュージカル「音楽の響き」の歌の一節「丘は音楽の響きで生き生きとしている」のようになります。タシミの丘も「俳句で生き生きとしている」のです。

しかし俳句はタシミの俳人たちを襲った暴力と無関係ではありません。タシミを囲う自然は俳人たちを収容所に押し込めた過酷な勢力を象徴しているようでした。しかし俳人たちは同じ自然が慰めと創造性を与えてくれることに気づきました。自然は強制収容による痛みと心配を癒やしてくれました。どうしてでしょうか。俳句は直接この理由を説明してくれませんが、魂が自然と一体となることにより、魂が過酷な現実から離れて自由な境地に上昇することが俳句から垣間見られます。

句集の俳句はタシミで詠まれたもので季節ごとにまとめられています。お正月や特別な行事の俳句もあります。自然の美を感じる事が俳句にとっても大切なので、タシミの周囲の自然を詠んだ俳句がたくさんあります。俳人の複雑な心境がタシミの周りの自然を通して表現されています。

俳句は総て日本語で書かれていて、英語への翻訳は易しくありません。言葉遊びや日本文化に根ざした微妙な表現を五七五のリズムに乗せています。そのため俳人が苦勞して俳句に込めた意味が英語への翻訳では簡単に失われてしまうこともあります。

そのうえこれらの俳句は特別な環境のもと、ある特別な時期にアマチュアの俳人によって詠まれました。俳句はタシミとカナダ各地の句会の会員に読んでもらうことを前提に作られています。それで俳句を英語に翻訳するに当っては日本文化の伝統と、これら俳人の置かれた環境の理解が必要に

なってきます。これらの知識が句集の俳句の背景にあります。俳句にはなにひとつ解説がついていないので、読者はそれぞれの知識を活用して俳句を理解する必要があります。

この句集を読むに当たっての注意があります。まず、この句集は日系カナダ人が連邦政府によってブリティッシュ・コロンビア州の沿岸地帯から強制的に追放されて強制収容された時のものであるということです。この経験が俳句に反映されています。そして俳句がいかに俳人達の苦難の毎日を助けたかということがわかります。第二にこれらの句集は1940年以前に日系カナダ人社会が豊かな詩歌活動をしていたことの証明のごく一端に過ぎないことです。タシミの句会は特殊な経験ではなく戦前の日系カナダ人社会に遡る詩歌の伝統の延長の一つです。そして第三に英訳は私の俳句の解釈であり、また他の解釈、翻訳も可能であることです。私は私の翻訳能力の範囲で翻訳しました。後はタシミの俳句がそれぞれの俳句の意味を最大限に読者に伝えられることを祈っています。

タシミの俳句

タシミの俳句は収容所の日常と周囲の自然について詠まれたものです。タシミの生活の中のできごと、特別なことがらを俳句にしています。二つの句集から選んだ俳句に私の英訳をつけました。

夏の朝
口笛の子に
出会ひけり

Natsu no asa / kuchibue no koni / deahikeri

One summer morning,
I met a youngster,
Whistling along
(by "Quiet Person," Yamabiko, Summer, 3)

若葉陰
激流岩を
相闘ぐ

Wakabakage / gekiryū iwa o / ai semegu

The rapid current,
Duelling with rocks
In the shades of fresh-green leaves
(by "Luminous Peak," Yamabiko, 3)

日のさ中
ごみ焼く人に
蠅の群

Hi no sanaka / gomi yaku hito ni / hae no mure

A swarm of flies,
Surrounds a person
Burning trash in the middle of the day
(by "Wave at Sunrise", Yamabiko, 3)

行く夏を
惜みて仰ぐ
夜空かな

Yuku natsu o / oshimite aogu / yozora kana

Gazing upon the night sky,
In sorrow
Of the summer gone by (by "Mountain Gust," Yamabiko, 4)

夏川や
藻草をくぐる
魚二ツ

Natsu kawa ya / mogusa o kuguru / uo futatsu

Two fishes,
Swimming through weed,
In the summer river
(by "Plum Moon," Yamabiko, 4)

向日葵に
砂浴の鶏の
二ツ三ツ

Himawari ni / sayoku no tori no / futatsu mitsu

Two or three chickens
Bathing in sand
By sunflowers
(by "Guest Boat," in Yamabiko, 5)

向日葵に
笑ひかけたき
朝心地

Himawari ni / warahi kaketaki / asagokochi

Sunflower,
My morning heart
Smiles to you

(by "Fat Potato," in Yamabiko, 5)

二の腕に
汗を拭ひぬ
洗濯婦

Ni no ude ni / ase o nuguhinu / sentaku fu

The woman doing the wash
Wipes her sweat
On her upper arm (by "Victorious Moon," Yamabiko, Summer, 23)

日盛の
光を返し
シャブル踏む

Hizakari no / hikari o kaeshi / shaburu fumu

The shovel I kick
Into dirt
Reflects the midday sun
(by "Pine Moon," Yamabiko, Summer, 23)

割り込んで
焚火に小さき
手を翳す

Warikonde / takibi ni chiisaki / te o kazasu

Budging in
To place my little hands
Above the bonfire
(by "One Leaf," Yamabiko, Winter, 7)

戸開くれば
寒月凜と
肺に沁む

To akureba / kangetsu rin to / hai ni shimu

The cold moon
Soaks my lungs
Through the open door
(by "Southern Fish," Yamabiko, Winter, 11)

ストーブ背に
胎動感じ

糸編む

Sutōbu ni / taidō kanji / keito amu

The baby moves
In my womb
Knitting affront the fireplace
(by "Mountain Breeze," Yamabiko, 12)

バンの牛
古草踏んで
牧へ散る

Ban no ushi / furukusa funde / maki e chiru

A cow on a van
Kicks old grass
Onto the farm
(by "One Leaf," Yamabiko, Spring, 14)

上の俳句を読めばおわかりのようにタシミの俳人は変化の無い収容所の生活を俳句を通じて詩的な創造にまで高めています。しかし同時に俳人たちはこの激動の時代に生きていました。「霊の光」の序文に俳人は「時代の変わり目」と言っています。太平洋戦争前の生活は砕け散りました。そして俳人は収容所という場所に閉じ込められています。序文の書かれた日付は 1946 年 2 月 21 日です太平洋戦争は前年の 8 月に日本の連合軍に対する無条件降伏で終わりました。この序文の書かれた時タシミの俳人は何を思っていたのでしょうか？

「霊の光」の中に松の雪を題にした俳句が 18 句あります。松の雪は 1946 年の宮中の歌会始めのお題です。そしてこの題は昭和天皇が終戦にあたって述べた「耐え難きを耐え」と関連しています。終戦は大きな歴史的な出来事であり、日系カナダ人に重大な影響を及ぼしました。タシミの俳人は終戦にあたってどんな未来を想像したのでしょうか？日本の無条件降伏についてどんなようにおもっていたのでしょうか？松の雪の題で詠んだ俳句にその一端を伺うことができます。

雪の松
初日の光(カゲ)を
こぼし居り (込山客船)

Yuki no matsu / hatsuhi no kage o / koboshi ori

Snow on pine,
Casting the shadow,
Of the new sun
(by Komiyama "Visiting Boat")

高らかに
初陽を得たり
松の雪 (竹田孤村)

Snow on pine,
Shone by the new sun,
High in the sky
(by Takeda "Lonesome Village")

寒き焚火
Samuki sakibi
"Cold Bonfire"

非常警報
人沸きたたせ
夏天へ

Hijō keihō / hito wakitatase / katen e

People are stirred
By the emergency alarm
That reverberates into the summer sky

夏天へ
死體見つけし
笛寒く

Katen e / shitai mitsukeshi / fue samuku

The cold sound of the whistle
Reached the summer sky
When the body was found

死屍据て
草に焚火を
いらだてる

Shishi suete / kusa ni takibi o / iradateru

Laying the body
On the grass
Then light the fire

死屍据て
焚火が寒し
木下闇

Shishi suete / takibi ga samushi / koshitayami

Laying the body
The fire is cold
In the shades of the trees

いたいけな
死屍硬直
青草冷ゆる

Itaikena / shishi kōchoku / aokusa hiyuru

The stiffened young body
Chills the green grass

死屍硬直
青草揺りて
水音鋭き

Shishi kōchoku / aokusa yurite / mizuoto surudoki

The body is stiff
The green grass sways
And the water sound is sharp

夏天へ
命奪へる
水音鋭き

Katen e / inochi ubaeru / mizuoto surudoki

The sound of the water
That has taken life
Reverberates into the summer sky

緑陰に
看護の焚火
煙らする

Ryokuin ni / kango no takibi / kemurasuru

The smoke from the pyre spreads
Into the shades of green leaves

詩歌の力

タシミの句集の解説を終わるにあたり、俳句がタシミ収容所の生活で大切な役割を果たしたことの読者の注意を引きたいとおもいます。タシミの俳人にとって俳句は単に趣味とか時間つぶし以上の意味がありました。俳句は俳人の気持ちをひどく不快な収容所生活の中で自分の感情を表現する手段であり心とた魂を生き返らす手段でもありました。またタシミの環境に文化的に順応する手段でもありました。タシミ入所当時はタシミの環境は収容所の住民に敵意を抱いているようにおもえました。周囲の冷たい山々は自分たちを収容所に押し込めた権威の象徴のようでした。しかし次第にタシミの自然は俳人たちの想像力の源になりました。ブリティッシュ・コロンビア州の沿岸の家から引き抜かれてタシミにきた人達は、タシミの自然に自分たちの持つ文化的、詩的な感受性をもって馴染んでいきました。そうすつことにより新しい環境に親しみを覚え、政治的な暴力のされされ続けながらも文化的に豊かな日常を送れるようになっていきました。そして息の詰まるような環境のなかでも毅然として生活していきました。

6.0 終わりに

サンシャインバレー、ブリティッシュ・コロンビア州

サンシャインバレーは第二次世界大戦中に日系カナダ人のタシミ強制収容所があったところで、当時ここに地方自治体はありませんでした。ブリティッシュ・コロンビア州のカスケード山脈の中であり、クロウズネスト・ハイウェイのホープ市とマニング・パークの間にあります。戦時中に保護地域とされたブリティッシュ・コロンビア州沿岸から 100 マイルの地域の外側にありました。収容所では 2400 人が大恐慌時代に作られた施設に入っていました。収容所の男子はハイウェイ工事に従事していました。戦後に収容所のあった土地は売却されボーイスカウトのキャンプ作るという計画が一時ありましたが、その後アリソン製材が購入し、次に小さなキャンプグラウンドとレクリエーション施設が出来て、シルバートイプスキー場のための基地になりました。（ウィキペディアより引用）

一般のカナダ人がタシミについて知っていることはこのウィキペディアの内容ぐらいのものでしょう。その他のことは忘れ去られてしまいました。現在サンシャインバレーに収容所時代から残っているものはごく僅かです。収容所時代にアパートだった大きな納屋が現在はコミュニティーセンターになっています。このコミュニティーセンターと道を挟んで向かい側にあるコンクリート製の餌料・穀物貯蔵庫だけがタシミの学校とホールになっていた納屋の残りです。住宅は一つも残っていません。幼稚園だった小さな建物はまだあります。タシミだった場所は夏のキャンピングが建てられていて、夏に町から来る人と少数の定住者が使っています。

現在タシミ収容所が閉鎖されてから 70 年余り経ちました。収容所の詳細を記した記録はありません。この文書は「遅くとも無いよりはまし」という考えで、この記録のギャップを埋めるために始

めました。1942年から1946年までブリティッシュ・コロンビア州内陸部の美しい谷間にあったタシミ収容所の事実、歴史、物語を出来るだけ記録しています。

タシミ収容所に関する多くの情報はいろなところから集めました。十分な情報が集まったのでタシミ収容所の記録の第一版を書くことにしました。

残念なことにタシミに関する詳細な情報、とくに施設にかんする具体的な情報はどこにも残っていないようです。施設の青写真、施設の建築用の見取り図、測量地図などは当然あったはずですが、連邦政府労働省日本局の記録が保管してある連邦政府アーカイブを探して見つかりませんでした。タシミの病院の青写真だけが見つかりました。

私達はこの記録を公開することによってタシミの関係者が昔のことを思い出したり、記録文書を探し出したりしてタシミの生活をもっと詳しく記録出来るのではないかと期待しています。この公開した記録はタシミの完全な記録の第一歩にすぎません。現在私達はタシミについて記録文書、とくに施設についての情報を探すことに力をいれていますが、この記録文書を生き生きとするようなタシミの生活についての物語も探しています。

6.1 連絡先

もしこの記録文書についての質問、懸念、提案、訂正、追加などをお持ちの方は下記までご連絡ください。

Nikkei National Museum
6688 Southoaks Crescent
Burnaby, BC V5E 4M7
T: 604.777.7000
E: info@nikkeiplace.org
www.nikkeiplace.org

謝辞

このプロジェクトを支援してくださった皆様に感謝いたします。皆様の支援なしにはこのプロジェクトは完成しなかったでしょう。（翻訳者：貢献者のリストは割愛します。）

6.2 参考文献

General References

Government of Canada, Department of Labour, “Report on the Administration of Japanese Affairs in Canada, 1942-1944”

Government of Canada, Department of Labour, “Report on Re-establishment of Japanese in Canada, 1944-1946”

British Columbia Security Commission, "Annual Report 1943-44"

British Columbia Security Commission, "Annual Report 1944-45"

Government of Canada, "Privy Council Orders-in-Council"

1944 British Columbia Security Commission, "Report on Teacher Training"

British Columbia Security Commission, "Annual Report on Education, 1942-1945"

Tashme Camp Supervisor Report May 1945

Royal Canadian Mounted Police Reports January, April and May 1945

Library and Archives Canada, Department of Labour, Japanese Division, RG36.27 files.

Library and Archives Canada, RCMP, RG18 files.

Library and Archives Canada, Department of Indian and Northern Affairs, RG22 files.

The New Canadian. Many articles on Tashme published during period March 1942 to 1950.

Report on the Administration of Japanese Affairs in Canada 1942-1944, Department of Labour, Hon H. Mitchell, MP, Minister of Labour & A. MacNamara, Dep Minister of Labour, Aug 1944

Removal of Japanese from Protected Areas. Report of BCSC October 1942 RG24-g-3-1-a.

TASHME A Japanese Relocation Centre, 1942-1946, W.J. Awmack

TASHME A Japanese Relocation Centre, Winnifred J. McBride, March 25, 1947.

Teaching in Canadian Exile by Frank Moritsugu and Ghost Town Teachers Historical Society, Toronto, 2001.

TASHME, Cst W R Cooper (in charge of Tashme Detachment, RCMP, May 1945) RCMP Quarterly Apr 1946.

Japanese Canadian Education During the WWII Internment, Wakako Ishikawa, Master's Thesis, Dept of Curriculum, Teaching and Learning. University of Toronto, 2003.

Educating Japanese Internees During WWII: Tashme High School (1942-1946), Paul Kirschmann ED-B 423 (Y02) Dept of Educational History and Leadership, U of Victoria. March 3, 1992.

The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War, Ann Gomer Sunahara James Lorimer & Company 1981

Mutual Hostages: Canadians and Japanese during Second World War. Patricia Roy, J.L. Granatstein, Masako Iino, Hiroko Takamura. UT Press 1990.

Stories of My People, A Japanese Canadian Journal, Roy Ito, 1994.

A Black Mark: The Japanese Canadians in World War II. Mary Taylor, Oberon Press, 2004.

Dept of Labor Report on Administration of Japanese Affairs in Canada 1942-1944

Forging a New Hope – Struggles and Dreams 1848-1948: a Pioneer Story of Hope, Flood, and Laidlaw

Presence of a Past Community: Tashme British Columbia by L J Evenden and I D Anderson

From Peoples of the Living Land edited by J. V. Minghi. Tantalus Research Limited 1972.

The Exiles – An Archival History of the World War II Japanese Road Camps, Yon Shimizu, 1993.

Last Japanese Family to Leave Tashme. Unpublished essay by Tak Negoro, 2013.

Conversations with Tom Seki of Hamilton ON who was a hospital orderly and Boy Scouts leader. Tom also contributed photos of hospital and hospital staff.

UBC Special Collections materials. Fonds of Reverend Yoshio Ono, Margaret Sage Hayward.

United Church Archives materials

Nikkei National Museum and Cultural Centre Archives materials

Japanese Canadian Cultural Centre Archives materials.

The Enemy That Never Was, Ken Adachi, McClelland and Stewart, 1976.

Additional information on Tashme is available from the following resources:

From Sedai Legacy Project

Videos of several residents of Tashme discussing their experiences in Tashme. Recorded in 2010 in Toronto. <http://www.sedari.ca/archive/videos/subjects/tashme/>

From Densho Project

Video description of living conditions in Tashme. Shizuko Kadoguchi Interview Segment 8.

Recorded February 15, 2005 in Toronto. Japanese Canadian Cultural Centre Collection.

<http://archive.densho.org/main.aspx>

Densho website,->other resources->web resources, etc ->Family album project -> Masumi Hayashi Photography – Family Album Project -> Canadian concentration camps.

Videos

NFB film: Of Japanese Descent. Film made in 1944-5 of life in Tashme internment camp.

Watari Dori, Linda Ohama. Film of meeting after 50 years of Tashme high school teacher Winnifred Awmack and Irene Tsuyuki, one of her students.

Henry's Glasses, Brendan Uegama. 2010. An amusing fictional story of an eight-year-old boy with a lot of imagination who lived in Tashme in 1945.

7.0 付録

7.1 タシミ歴史年表

1941年

12月7日 日本軍真珠湾攻撃後、カナダは日本に宣戦布告し、日本語新聞と48の日本語学校を閉鎖した。

12月8日 カナダ海軍がブリティッシュ・コロンビア州沿岸から日系カナダ人漁師の所有する1200隻の漁船を没収し、日本語学校を総て閉鎖する。

12月16日 内閣令PC9760号により日本人を祖先とする人はカナダ国籍の有る無しに関わらず総て敵性外国人名簿に登録することを命令される。カナダ政府は目をつけていた38名の日系カナダ人を逮捕する。

1942年

1月16日 内閣令PC365号で太平洋岸から100マイル以内を保護地域に制定する。日本人を祖先に持つ人18才から45才の男子は道路建設に従事するために連邦警察に出頭することを命令される。

2月23日 最初の100名の男子がイエローヘッド・ブルーリバーの道路建設のためにルセーム道路建設飯場に送られる。

2月24日 内閣令PC1486号により連邦政府司法大臣は保護地域内の日系カナダ人を移動させることが出来るようになる。そして大勢の日系カナダ人を一度に追放し始める。車と写真機が没収した。日系カナダ人命令から24時間以内に自分の家から追放された。

3月4日 内閣令PC1665号および1666号によりブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が設立された。この委員会は内閣令365号によって決められた保護地域かからの日系カナダ人の追放を企画し実行する責任を負った。追放された後の日系カナダ人の財産は敵性外国人財産管理委員会が管理することになった。

3月7日 連邦政府の道路整備の優先プロジェクト、ホープ・プリンスストン・ハイウェイの工事のために最初の日系カナダ人男子26名が飯場に到着した。

3月16日 ブリティッシュ・コロンビア州の辺鄙なところで漁業に従事していた日系カナダ人の最初の集団がバンクーバーのヘースティング・パークの仮収容所に到着した。

3月27日 内閣令PC2483号は日系カナダ人の保護地域からの追放を拡張した。

3月30日 内閣令PC2541号により連邦政府は日系カナダ人を公共プロジェクトに従事させることが出来るようになった。また窮乏した日系カナダ人を支援することも出来るようになった。アルバータ州とマニトバ州の砂糖大根農家に日系カナダ人が一家として仕事に行くことが始まった。

4月1日 保護地域内の日系カナダ人が保護地域から出る最終日で、この日までに日系カナダ人はどの収容所に行くかを決めた。

4月21日 最初の日系カナダ人の集団がグリーンウッド収容所に到着する。

5月11日 ウッドファイバー、ブリタニア、入・ウェストミンスターの日系カナダ人男子がキャスロー収容所の出発。ヘースティング・パーク仮収容所の日系カナダ人がタシミ、サンドン、ス

ローキャンシティーの収容所に向けて出発。タシミに到着した一団は 347 の住居用建物の建設をホープ町から 14 マイル東のホープ・プリンスストン・ハイウェイのロイヤル・エンジニアリング道路の AB トライツ牧場で始める。ここにあった製材所を改造して住宅の建設用木材を生産する。

7 月 タシミのコールタール紙で囲った住居へ入る一団が到着。

7 月 31 日 10 の住居が完成。他の住居は建設中。

ブリティッシュ・コロンビア州タシミという地名が正式に出来る。以前の地名はブリティッシュ・コロンビア州ホープ町 14 マイル牧場。

8 月 22 日 8 月 30 日までに 50 の住宅が完成するという報告。スマルト川から水道用の配管が敷かれる。納屋を改造したアパートと風呂場が完成間近。

9 月 5 日 タシミに新たな一団が到着。ヘースティング・パークから一家としてタシミに行く一団が出発。この一団は家の完成を待っていた 150 名。

9 月 11 日 内閣令 8173 号は日系カナダ人の居住場所に関わらず保護地域内の日系カナダ人と同様の扱いを連邦政府が出来るようにする。

9 月 16 日 タシミの人口は 1200 名。仮の小学校が開校。

9 月 16 日 仮設病院に入院中の人を除きヘースティング・パークの日系カナダ人はすべてブリティッシュ・コロンビア州内陸の収容所またはロッキー山脈以東への強制移動を終了。

10 月 31 日 ブリティッシュ・コロンビア州保護地域の日系人の強制移動が終了。ヘースティング・パークの仮収容所が閉鎖。

12 月 1 日 タシミの住宅用建物 347 がほぼすべて完成。タシミの日系カナダ人人口は 2636 名。3 軒または 4 軒に一つの水道の蛇口が完成。風呂場を建設中。約 50 軒に一つの風呂場。電気がアパート、商店と重要施設に入るが一般住宅は照明にケロシンランプを使う。現代的な 50 床の病院の建設がほぼ終了。タシミがブリティッシュ・コロンビア州の収容所で最後に完成。タシミが最大の収容所。

12 月 7 日 収容所の生活一般の世話をする親和会が設立。16 才から 35 才までの住民を会員にする青年会が誕生。ミツユキ・サカタが会長に選出される。

1943 年

1 月 26 日 学校が D ビルディングで開校。グレード 1 から 9 までの生徒が 629 名、教師が 30 名。ヒロシ・オカダとテルコ・ヒダカが校長。

2 月 5 日 内閣令 946 号でブリティッシュ・コロンビア州公安委員会が解散になり、職務権限は連邦政府労働省日本局に移譲。

日系カナダ人配置委員会委員長に T.B.ピッカーギルが任命される。職務は収容所の日系カナダ人をロッキー山脈以東に移動することである。ロッキー山脈以東の地域の砂糖大根農家、一般農家、採伐、製材、家事労働の仕事への願書受付が始まる。

グレースとアンガス・マックイネス、マックウィリアムズ司祭がタシミに高校開校の嘆願を始める。青年会、柔道クラブ、ボーイスカウト、ガールズガイド、生徒会が設立される。

5月 タシミでメイ・デイ祭りが開かれメイ・デイの女王が選ばれる。

6月 青年会が組織した野球リーグが始まり、新しく作られた野球場で荒鷲チームと朝日チームの試合でリーグ戦が始まった。

6月28日 公安委員会が味噌と醤油の工場を作る。10月1日までに2万6千ポンドの味噌が出来る。

8月1日 旅行制限が緩和され、ブリティッシュ・コロンビア州の保護地域以外への旅行に許可証の必要が無くなる。

ニューデンバーで開かれた4週間の教師研修に158名の二世が参加する。

11月 ホープ・プリンスストン・ハイウェイの建設に従事していたホープ側の飯場の労働者とプリンスストン側の飯場の労働者がホープとプリンスストンの真ん中まで工事を進めて出会う。ハイウェイは完成にはあと4年かかった。

1944年

1月17日 日本からの寄贈の165バレルの醤油、16箱のお茶、4バレルも味噌がタシミに国際赤十字を通じて到着。

2月17日 タシミでボーイスカウト週間が開かれ、松明パレードが行われた。

3月23日 土砂崩れでホープからタシミに向かう道路がマイル2とマイル4の間で閉ざされた。

5月20日 3才のテルオ・ワタナベがスマロ川で溺死。

6月9日 戦争が始まる前にバンクーバーのアレクサンダー街にあった日本語学校の校長のツタエ・サトウと教師のサトウ夫人がタシミを訪問する。

9月 新しい小学校校舎が完成。もとの製材所の建物の一部を改造して8教室ができ、小学校の教室不足の解消に役立つ。この教室の追加でDビルディング2回の講堂・体育館は常時使えるようになった。

1945年

1月1日 米国の日系アメリカ人は米国の海岸地域に戻ることが許された。カナダでは日系カナダ人が保護地域に戻れるようになったのは1949年3月31日であった。

4月12日 タシミを収容所から始まりすべての収容所で連邦警察と連邦政府労働省は16才以上の日系人にロッキー山脈以東への移動か日本への帰国の選択の回答を求め始めた。このためタシミではロッキー山脈以東または日本へ移動する人達が出てきて、タシミの日系カナダ人の人口の減少が始まった。

5月13日 ユナイテッド教会の牧師を委員長をする共同組合委員会が日系カナダ人の日本への追放は憲法違反であると連邦政府に抗議したが受け入れられなかった。

8月 ユナイテッド教会の仲介者 J.H.アーナップ博士がタシミを訪れてタシミの日本委員会の日系カナダ人の日本への追放反対活動を支援した。

9月2日 日本帝国が無条件降伏して太平洋戦争が終わる。

1946年

1月1日 戦時特別法は終了したが国歌非常事態終了移期間権限法が施行され、戦時中の日系カナダ人に対する連邦政府の権限が維持された。

タシミは日系カナダ人で日本への帰国を選択した人達の一時収容施設になり、他の収容所から日系カナダ人が到着を始めた。

4月29日 3才のトミコ・カワシタがスマロ川で溺死。

5月31日 日本へ帰国を選んだ672名（タシミから565名）が米国海軍船SS マリーン・エンジェル号でバンクーバーを出航。

6月15日 タシミ収容所の閉所が始まる。連邦政府労働省に雇用されていた日系カナダ人は必要最小限の職種を除き総て解雇される。病院と医療サービスが終了する。

6月16日 日本帰国船第二便のSS ジェネラル・メイグ号が1100人の日系カナダ人を乗せてバンクーバーから出航。

タシミからロッキー山脈以東、日本、他の収容所への移動でタシミの日系カナダ人の人口は1200名位に減少した。タシミから移動した人達は約半数がロッキー山脈以東に、半数が日本に行った。

6月25日 タシミ病院が閉院した。病院の施設は他の収容所に運送された。

8月2日 日本帰国船第三便のSS ジェネラル・メイグ号が1377名の日系カナダ人を乗せてバンクーバーを出航した。タシミの住民157名が含まれていた。

8月26日 タシミ収容所が閉所された。タシミが最初に閉所された収容所であった。タシミに残された所有物は戦時財産として競売または廃棄された。

9月12日

11マイル飯場と15マイル飯場が閉じられた。

9月28日 日本帰国船第4便 SS マリーン・ファルコン号が500名の日系カナダ人を乗せてバンクーバーから出航した。421名がブリティッシュ・コロンビア州から、残りはアルバータ、サスカチュワン、マニトバ、オンタリオ州からであった。

5月から12月 この期間に日本帰国船は5便あり総勢3964名の日系カナダ人が日本に帰国した。約半数はカナダ生まだった。

12月 枢密院がカナダ最高裁判所の日系カナダ人の日本へ強制帰国は合法的であるという決定を支持する。この時まで約4千人の日系カナダ人が日本に強制的に帰国させられた。

1947年

1月24日 日系カナダ人の日本への強制帰国を認める連邦政府内閣令は教会、大学、メディア関係者と政治家の抗議で破棄された。

2月13日 内閣令 PC567号によりカナダ市民法が拡張され日系カナダ人に選挙権が付与された。

7月18日 新しい委員会がヘンリー・バード判事を委員長として設立され、戦時中に連邦政府が没収売却した日系カナダ人の財産を査定して、総額120万ドルの補償金を決定した。この金額は実際の日系カナダ人の財産の価値のほんの一部であった。

1949年

3月31日 日系カナダ人がブリティッシュ・コロンビア州の海岸から100マイル以内の保護地域に戻れるようになった。日系カナダ人の移動制限はすべて解除された。

6月27日 日系カナダ人が初めて連邦政府議会選挙で投票した。選挙権を持つ日系カナダ人は約9千名であった。

参考資料：

The Enemy That Never Was. Ken Adachi. McLelland and Stewart 1976

The Politics of Racism. Ann Gomer Sunahara. James Lorimer and Company, Publishers Toronto 1981

Honoured in Places Remembered: Mounties Across Canada. W. J. Hulgaard & J. W. White. Heritage House Publishing. 2002

Files of Library and Archives Canada, Ottawa. RG 36-27 BC Security Commission